
出てきてください

酔灯 春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出てきてください

【Nコード】

N8344V

【作者名】

酔灯 春

【あらすじ】

バトルが苦手、人が苦手。彼女の一番最初のポケモンは、ひきこもりのゼニガメだった。なんとかかしたいけれど、理由は分からない。だったら探しに行こう、一緒に。

これは、何処までも真っ直ぐに歩こうとする少女と、どうしようもなく外に怯えるゼニガメのお話。

原作を知らない人の為の簡単キャラ紹介（前書き）

最新話までの情報を含むので、ネタバレあり。それが嫌なら原作キ
ャラだけ見てバックプリーズ。

原作を知らない人の為の簡単キャラ紹介

原作メインキャラクター紹介

〈カントー地方編〉

・レッド

原作第一章の主人公でセキエイリーグチャンピオン。明るくて優しい、ちよつと天然気味の少年。バトルに関しては基本チートなので、タイプ相性やレベルの差をガン無視できる恐ろしい特殊能力を持っている。老若男女問わず大人気なため、第一章のメイン敵であるロケット団のボスに「お前の全てがH O S I E I !」とバトルを仕掛けられたり、ロケット団女性幹部と混浴したりと意図せずしてのフラグ乱立野郎でもある。

・グリーン

レッドのライバルのウニ頭。二次元でお馴染みなあの重力に反抗的な髪型である。クールなイケメンであるが、何気に苦勞人。ポケモンを育てるのが上手いが、一種の洗脳に近いと思われる。レッドと事故によって手持ちを交換してしまったことがあったが、わずかな週間でレッドの手持ちを自分色に染め上げた。

・ブルー

第一章の一応ヒロイン的立ち位置。しかし初登場から堂々と詐欺にスリに泣き落としにと危険なお姉様。現在はオーキド博士によって改心して、色々な事件解決に協力している。世渡り上手で頭も良い。シルバーとは義理の姉弟。

・イエロー

第二章の主人公。被るだけで男に見えるようになるという、ミラクルな変装アイテム「何の変哲もない麦藁帽子」をブルーから貰った。ポケモンの心を読み取ったり、傷を癒す事が出来る歩くポケモンセンター。性格は非常に穏やかでマイペース。ユズルより年上であるはずが、ユズルと良い勝負できるほどに断崖絶壁。

・オーキド博士

ポケモン研究の世界的権威。昔は凄腕トレーナーとしてセキエイリーグチャンピオンに輝いた事もある。レッド達と同じセキエイリーグに出場したこともあるが、顔に黒い布をぐるぐる巻いただけという面妖極まりない変装術を披露した。

〈ジヨウト地方編〉

・ゴールド

第三章主人公。前髪を爆発させることに命を賭けているお調子者。ここにきてようやく天然ではない主人公が誕生した。お調子者だが主人公の例に洩れず、困っている人やポケモンを放っておく事が出来ない。ポケモンの卵に絶大な影響を与える力を持っており、ギャブル好きなトゲピーに前髪が爆発したピチューとちやくちやくと犠牲ポケモンを増やしつつある。

・シルバー

ゴールドのライバル。姉に負けないほどの頭の良さで知識を持っている。かなりのシスコンでブルーの事になると熱い男に転身。クール度ではグリーンと並ぶが、恐らく苦労人度はグリーンの方が上。

・クリス

第三章のヒロイン的ポジション。ポケモン捕獲のプロであり、委員長タイプ。第三章の苦労人は彼女であろう。ミニモニのコスプレ

強いと三拍子揃った優良物件。当初の予定ではここまでチートな奴になる予定ではなかったのだが、何処で道を違えたのか分からない。名前の通りに霞むどころかバリバリキャラが立っている。しかも何やら影まで持っているっぽく、これ以上存在感無双しないで欲しいと切実に願う。

どうもユズルの事が気になっているようである。というクラブ。着実にファンを増やしているし……。作者の友人が「カスムが格好良すぎて生きるのが辛い」と申しておる。キリ頑張れ超頑張れ。

・???

名前はまだ判明していない、ときどき出てくるユズルの中の別の人。ものすごくバトルが強いおねーさん。知的なクールで毒舌家。バトル相手は気をしっかり持とうね！じゃないとバトルでコテンパンにされた上に心までコテンパンさ！

ユズルの持ちポケ紹介

・メロンパン

ゼニガメ。ユズルの初のポケモンである。メインキャラにも関わらず、バトルではほぼ鈍器としてしか活躍していない。ある意味食っちゃねのニート生活に近いため、肥満が心配。彼がひきこもりを治す日は来るのだろうか。しかし彼がひきこもりを治す日は、同時にアイデンティティを失う日でもあるので、もうどうしようもない感じである。

現在ひきこもりから脱出。アイデンティティを失うかと思われたが、まさかのユズルのパーティ脱退。ただでさえ少ない出番が更に減っ

たでござる。

・コーヒープリン

スピアー。ユズルの命を狙う暗殺者からボディーガードへと、見事すぎる転身をした。どうやらサイドンとは知り合いらしい。基本真面目でクールな性格をしている。

・ナツクッキー

サイドン。コーヒープリン同様、ユズルの命を（ry。その姿に相応しくどっしりした頼れる大人風な性格だったが、まさかのヤンデレ発覚。おっさんのヤンデレというキリ以上の誰得誕生である。カイリユーと仲が悪いようで、出会いがしらに死闘開始。全く頼れない大人であることが露呈した。

・ソルトアイス

カイリユー。サイドンとは顔見知りのようだ。初の女性ポケモンの登場で、しかも暗殺無しの仲間入りである。色々な意味で終わってるユズルのパーティに光明が差した瞬間であった。姉御的なので今後のまとめ役に期待したい。

原作を知らない人の為の簡単キャラ紹介（後書き）

随時更新予定

第0話 昔の話

「ひつく……ひぐ……ッ」

少女は、誰もいない場所にいた。少女の住んでいる小さな町、マサラタウン。その町外れにある林の木の根元で、膝を抱えていた。髪の毛はぐちゃぐちゃになっており、体中砂だらけの傷だらけだ。更には、所々に殴られたような跡と、ぼろぼろになった服。乱闘でもやった後のような痛々しい姿のまま、ぼろぼろと涙を流していた。

「うっ……く……」

引っ込んできた涙に、少女はぐいと袖で目元を拭った。そして自分の傍に置いてある物を赤くなった瞳で睨んだ。

それは、甲羅だった。一抱えほどもあり、亀に良く似ていたが、亀にしてはでかすぎる何かだ。

「……このおっ！」

少女はよろよろとそれを持ちあげると、力いっぱい投げた。といつても、7・8歳くらいに見える少女にそれを投げるのは無理というもので、近くの地面にぶつかって多少土に汚れただけに過ぎない。少しだけ汚れたその穴から、ひょこつと何かが出てきた。

「……ッ」

ただの甲羅に見えたそれは、頭と手足を生やした。どうやら生き物だったようで、怯えたように少女から離れると、近くの木の裏に姿を隠した。水色の体色に、大きな瞳で二足歩行するその生き物は、

間違っても亀ではない。

その生き物の名はゼニガメと言い、ポケモンと呼ばれる生き物の一種だ。

ポケットモンスター、略してポケモン。少女の生きている世界には、動物とは違った不思議な生き物が住んでいる。人間はポケモンと協力し合い、時にポケモン同士を戦わせたり、時に友として傍に置いたり、また昔の話ではあるが、結婚した者までいたそうだ。

少女はゼニガメをじっと見つめた。木の裏に隠れて自分に怯えている姿に、少女のよく分からない苛立ちは消えていき、代わりに情けない顔でその場に座り込む。ぼんやり天を仰ぐと、澄み切った青い空と重なる木々が見えた。少女は少し前の出来事を思い出す。

「お前ばつかじゃねーの？ それはゼニガメじゃなくてただの甲羅だぜ！」

生意気そうな顔をした少年が、嘲笑気味に少女のゼニガメを指差した。

普通子供がポケモンを持つのは、10歳からである。少女はとある事情から、10歳になる前にゼニガメを手に入れていた。そのため町の子供達は羨ましがって彼女に見せてくれるように頼んだが、肝心のゼニガメが全く出てこないのである。

「ちがうもん！ オーキド博士がちゃんとゼニガメだって言ったもん！」

少女は少年を睨んで叫んだ。オーキド博士というのは、この町の外れに住んでいる、ポケモンの研究者である。彼女がゼニガメを譲り受けた相手は、オーキド博士だった。

「あの変なじーさんの事か？ お前騙されたんじゃないの？ 馬鹿だもんなあ」

ちなみにオーキド博士はポケモン研究の第一人者であり、かなり尊敬されている人物のだが、近所の子供が知っている訳はなかった。

「まあまあ、言ってるなよ。馬鹿だから仕方ないよ。なあバカルちゃん？」

「バカルじゃなくてユズル！ 馬鹿じゃない！！」

生意気そうな少年が続いて、今度はニヤニヤした顔の少年が少女、ユズルを馬鹿にした。ユズルは顔を真っ赤にして怒ったが、残念ながら効果は薄そうだった。

「だったらちよっと貸してみるよ。本当にゼニガメなら中身が入ってるはずだよ」

「な、なにす……っ返して！」

生意気そうな少年はユズルの手から無理やりゼニガメを奪うと、背の低いユズルには届かない所に上げた。ユズルは取り換えそうとするが、生意気そうな少年に飛びつく前に、ニヤニヤ顔の少年に羽交い締めされた。生意気そうな少年は甲羅に空いている穴に手を入れるが、すぐに悲鳴を上げた。

「痛ってえ！ コイツ噛みやがった！！」

痛みでゼニガメをブン投げる。ユズルは真っ青になって暴れると、暴れた拍子に肘がニヤニヤ顔の少年の顔に当たった。

「ガゴツ!？」

痛みで悶絶するニヤニヤ顔の少年から解放され、ユズルはゼニガメに駆け寄った。体が少しだけ震えてはいたが、怪我は当然ないよ。うでユズルは安堵の息を漏らす。

「何しやがるテメエ！」

噛まれて逆上した生意気そうな少年が、ゼニガメに飛びかかるようにする。だがユズルはゼニガメを抱きかかえてサツとその場を飛びのいたので、生意気そうな少年は勢いそのまま地面とキスする事になった。またも痛みを転がる生意気そうな少年に、ユズルは鼻を鳴らした。

「ふん、無理やり引っ張り出すからそうなるんだ。馬鹿はそっちじゃないか」

べーっと舌を突き出したユズルに、影がかかった。嫌な予感がしてユズルが振り返ると、さっき撥ね退けたニヤニヤ顔の少年が、鼻血を流しながら憤怒の形相で立っている。

「覚悟しろっ！」

「ぎゃあッ！」

ユズルのポニーテールを引っ張って、引き倒す。怒りに我を無くしたまま殴りかかってくる少年に、必死に応戦するユズル。しかし

少年の方が一つ年上であり、力も当然強いため、あっという間にユズルの防戦一方になった。

「この！ このおッ！！」

「いた……ッ痛い！ こ……の……ッ」

「お前なんか！ 調子に乗りやがって！」

「うぐ……ッ！ ひ……い……っ！ ヒグッ」

「馬鹿でブスの癖に！ ブス！ ブースッ！！」

「やめ……ッうえっ止めてよう……っ！！」

ユズルの体や顔に次々と痣ができていき、あまりの痛みに涙声になっていた。その様子に起き上がった生意気そうな少年は、流石に不味いと思ったのか慌ててニヤニヤ顔の少年を抑えにかかった。

「おいっ！ そろそろ止めとけって！ そいつ泣いてんぞ！」

「うるさい！ 放せよ！」

争う少年たちに、ユズルはよろけながらもゼニガメを抱きかかえて、全力で逃げた。後ろからはニヤニヤ顔の少年が喚き散らす声が聞こえており、ユズルは震えそうになる脚を叱咤してひたすらに走る。

抱えたゼニガメは、落としてしまいそうになるほど重かった。

「……「じめん」」

少女は小さくゼニガメに向かって謝った。ゼニガメのせいではな

い。あの少年たちが悪いのだ。それでもゼニガメが普通のポケモンであればあんな事にはならなかった。そう考えてしまい、少女はついゼニガメに八つ当たりしてしまったのだ。

「……」

ゼニガメは、木の裏からそっとユズルを伺った。まだ怯えの覗く顔ではあったが、ユズルが今にも泣き出しそうな顔になると、じりじりとユズルの元に戻っていく。緊張した表情でユズルと対面するゼニガメを見て、ユズルはふと思いついた事があった。

「……そう言えば、まだ名前をつけてなかったね」

ゼニガメが不思議そうな顔をするので、ユズルは少しだけ笑った。

「名前をもらった事がなかったんだね。あのね、名前は友達の印なんだよ。何にしようかなあ……」

さつきまでの重い雰囲気はどこへ行ったのか、ユズルはうんうんと唸りながらも楽しそうに考え始めた。そしてそんなユズルを、緊張しながらも、少しだけ嬉しそうに見つめるゼニガメ。

変わったゼニガメを連れてポケモントレーナーがマサラを旅立つのは、もう少し先のお話である。

第一話 マサラタウン

右を見る。

左を見る。

「……よし！」

私は真っ直ぐに草むらに向かって走り出す。草むらを駆け抜けて後ろを勢いよく振りかえった。知り合いは誰も見当たらない。その事を確認してから、ホツとしてトキワシテイに向けて歩き出す。

「……見つからなくて良かった」

ばれたらすぐに連れ戻される。少し心が痛まなくてもなかったが、私は連れ戻される気はサラサラなかった。

私の旅は、まだ始まったばかりなのだ。

「駄目だ！」

目の前の父さんは渋い顔で言い切った。

「お前はまだ10歳だ。旅に出るには早い」

腕組みをしてこちらを睨みつける父さんの後ろでは、母さんが困った顔をしている。

10歳が早い訳が無い。世間のポケモンマスターを志す子供たちが10歳になつたら旅に出るのは、最早通例のようなものだ。私も10歳になつたら旅に出ると決めていて、そのための準備だつてちやんとしてきた。

ポケモンマスターというのは、ポケモンでバトルする人たちの中で一番強い人のことだ。地方ごとにいる八人のジムリーダー

ポケモン協会という偉い所が決めた、トレーナーの腕試しをしてくれる人たち　に勝った証拠のジムバッジを八個集めると、セキエイリーグという大会の本戦参加権をゲットできる。そしてセキエイリーグで優勝すると、チャンピオンになれるのだ。セキエイリーグはチャンピオンを決める大会で、チャンピオンの中でも一番強いのがポケモンマスター。かく言う私もポケモンマスターに憧れている。

「レッドさんだつて10歳で旅に出たんだよ。それにキリやカスムなんて10歳になる前にサッサと旅立つちゃったじゃないか！」

キリとカスムは私の幼馴染で、半年前に旅立っていった。そしてレッドさんは、この町マサラタウンに住んでいる、チャンピオンの一人である。私だつて彼らのように旅に出たかったけど、10歳になるまできちんと辛抱した。なのに「駄目だ」なんてどういうことなのだ。

「ウチはウチ！ヨソはヨソ！お前は女の子で、彼等は男の子だ！」

「定番の台詞を吐かないで！それにポケモンバトルに性別なんて関係ないよ！」

「バトルには関係なくても旅には関係あるだろーが！」

「可愛い子には旅させよっていうじゃないか！」
「ウチの娘は可愛い子じゃなくて超可愛い子だから当てはまりません」、残念でしたー」

数十分後。

「大体父さんは過保護過ぎるんだよ。放置プレイを要求します！」
「放置プレイなんてしたらお前俺に構ってくれないだろ。父さん寂しいんだからな！」

「だって母さんは花の匂いがするけど、父さんは何か臭うもん」

「男はいずれ臭うようになるもんなんだよ。そう……特性“加齢臭”によつてな！」

「そんな特性ポケモンにないでしょ。あつても“悪臭”じゃない」

「本当にそうなのか？」

「え？」

「ポケモン研究者である父さんが、お前より特性を知らないとしても？」

「え？あるの？」

「ある訳ないだろお馬鹿さん」

「母さん！私の右拳を！右拳を止めないでええええっ！」

一時間後。

私と父さんは、息を切らしながらテーブルに突っ伏していた。

「はい、お茶よ」

「あ、ありがとう……」

「すまん……」

母さんが冷たい麦茶をテーブルの上に二つ置く。三つ目の椅子に

腰かけると、父さんに代わって話し始めた。ゆったりとした話口調は、ヒートアップした私の頭を程よく冷やしてくれる。反対されることを予想して私は目を伏せたが、母さんは優しく微笑んだ。

「私は、貴方がどんな夢を追いかけても、それを応援するわ」

その言葉に私はぱっと顔を上げ、父さんは飲みかけていた麦茶を吹き出した。

「でもポケモンマスターを目指すのは止めてね。危ないもの」

しかし続いた一言に、私は再びテーブルに突っ伏し、父さんはガッツポーズを決める。「ほら見る！」と言わんばかりの反応が腹立たしい。

「それにお前も知つての通り、最近ポケモンの様子が変わた。特定のポケモンの数が激減したかと思えば、やたらと強いポケモンが現れたり……トレーナー狩りも多発している」

「他地方のトレーナーもよく出入りするようになったしねえ。そのせいか、生息地以外の場所に出るポケモンもいるみたいよ」
「……」

全て本当の事だ。父さんや母さんが心配する気持ちも分かる。

ポケモンマスターだって、ほんの一握りの人間が昇りつめる事が出来る高みだ。ジムリーダーやチャンピオンなど以外の普通のトレーナーの収入は勝ったときに貰えるお金だから、勝てなければ貧乏生活まっしぐら。ポケモンの回復はポケモンセンターでしてくれるけれど、トレーナーの方はお金が無ければ野宿しかない。

新人トレーナーの旅というだけでも厳しいのに、更に危険が上がるのならば、女の身で旅を乗り切っていくのは大分難しいだろう。

大人しくここで父さんの後を継いで研究者になった方が、よっぽど安全だ。1年前の四天王事件　ポケモンを使って悪いことをしようとしたらしい人たちが、ポケモンにこの地方の街を襲わせた事件だ　からの街の復興だって、最近やっと落ち着いてきたくらいでもある。

父さんは黙り込んだ私に追い打ちをかけるように、私の隣の椅子の上を一瞥した。

「第一、お前のそのひきこもりポケモンでどう戦っていくつもりなんだ？」

「ひきこもりじゃないよ！……いや確かにひきこもって出てこないけど、最近はずっとずつ出て来てくれてるよ！」

私は椅子の上から持ち上げて父さんの目の前に突き付ける。硬い甲羅、甲羅にある5つの穴、一抱えほどもあるそれはまごう事なく

ゼニガメ。

ただし、からにこもっている状態である。

「ひきこもってるじゃないか」

「今は出てこないただだもん！メロは父さんと違って繊細なんだってば！」

父さんは大仰にため息をつき、私はメロンパンもとい略称メロのゼニガメを抱きしめる。

「出てきてやっとなスタートラインだ。ラインにすら立てなきゃ話にならない」

「ポケモンの個性を認められない大人ってやだね、メロ」

私の言葉に、父さんは無理矢理話を終わらせるようにテーブルを一叩きした。

「とにかく、まともに戦えないポケモンを持ったトレーナーを旅に出す訳にはいかない。だから旅はなしだ」

正論であることは確かなので、私は反論せずに沈黙した。こうして私は、家出以外に旅に出る方法を失ったのだった。

と、家を出たのは良かったが、ちよつと失敗したかもしれない。

「ぎゃああああああああっ!!」

走る走る走る。すぐ傍に聞こえてくる駆け音。一匹では何ともないその音が、何十匹となり、今は大きな恐怖を伴って襲い掛かってくる。メロンパンはモンスターボールに戻したから良いが、問題は私だ。ちらりと後ろを振り返ると、コラッタの大群がすごい形相で追いかけてきている。

「ちよつと手が滑っただけなんだってば!」

コラッタ達の追撃は止まらない。メロンパンを抱えていた手が滑って、コラッタを一匹気絶させてしまったのが不味かった。食事時らしく気が立っていたコラッタ達が一斉にこちらを振り返ったのだ。あの長い牙で噛みつかれたらただじゃ済まない。全身噛みつかれた状態で連れ戻されるなんて、二度と旅に出られないフラグじゃないか。

「うぎゃっ」

足元の段差に気付かず、急な浮遊感に次の瞬間には段差を転がり落ちた。コラッタの大群はもうすぐそこだ。全身がずきずきと鈍い痛みを訴えている。

「う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う……」

涙目になっている私の頭上を、まばゆい輝きが走って行く。

「……………」

一瞬見えた輝きを不思議に思いながらも、コラッタの大群が襲いかかってくるのを覚悟して身構えた。だがその気配が全くなく、訳が分らず首を傾げる。そつと段差の上に顔を出すとコラッタの大群は一匹残らず黒こげになっていて、襲ってこられない理由に納得した。

しかし、誰がやったのだろうか？

疑問に思っただけを周りを見渡す。すると私から数歩離れたところに、全身に静電気を纏わせて立つピカチュウと、上から下まで真っ黒な服装でマントをなびかせた細身の男が立っていた。

マントとか、普段着にする人いたのか。

初見の感想がそれだった。

「ポケモンを出せ」

「え？あ、はい」

逆らい難い圧迫感を感じて、私は大人しくメロンパンを出した。

あれだ、おえらいさんが何かしら命令してきたような感じだ。めっちゃ逆らい難い。

私がメロンパンを出すと、男は奇妙な物を見るような目でメロンパンを見つめた。メロンパンは、いつも通り今日も元気にひきこもっている。

「何だそれは」

ポケモンに決まっところーが。他に何に見えるというのだろうか。いや私の眼には空腹時にメロンパン（食物）に映ることもあるが。

「ゼニガメですが」

「何故からにこもっている」

「外界が苦手なんです」

「ピカチュウ、十万ボルト」

男が指示を出すと、私が止める暇もなくメロンパンを黒焦げにした。

「メロ！」

私は急いでメロンパンに駆け寄る。メロンパンはからにこもって
いられなくなったらしく、ぐったりとした様子で頭と手足を出して
いた。私は男を強く睨みつける。

「いきなり何するんですか！」

私の叫び声でメロンパンが目を覚ました。私に抱きかかえられた
まま大きな瞳に男を映すと、突然小刻みに震えだし、力の入らない
手で私にしがみついてくる。

男は極めて冷静に返答した。

「役立たずを消しただけだ」

頭に一気に血が上った。

「ピカチュウ、でんこうせっか」

「フッシー、はっぱカッター！」

私の目の前でピカチュウに刃と化した葉が襲いかかった。緑と黄
色が交差しあい、辺り一帯の雑草が刈り取られる。凄まじい風が私
を押し返してきて、思わず尻もちをついた。

「大丈夫か！？」

「あ………」

いつの間にか男に向かって走り出していたらしい。聞き覚えのあ
る声が出て、私の目の前に見知った顔が現れる。

黒髪に優しげな顔つき、真っ赤な帽子のトレードマーク。

「……レッドさん？」

「間に合ってよかったよ」

そう言うと、目の前の男をきつく見据えた。その全身から怒りが吹きあがってくるかのようだ。

「人に向けてポケモンで攻撃するのは、ルール違反だろ」

「……俺がやったのはバトルじゃない。ただのゴミ掃除だ」

「なんだと!」

レッドさんが男に殴りかかる。男のピカチュウがまともにはつばカッターを受けて動けないので、男は掌で受け止めた。至近距離で睨んでくるレッドさんに対して、男はニヤリと笑ってその拳を押し返して見せる。

「ッ!」

「レッドさん!」

レッドさんは左手で右手首を掴んで後ろに2・3歩後退した。私はメロンパンをボールに戻して急いでレッドさんに駆け寄る。

「まだ痺れは残っているんだろう?」

その一言に、弾かれたようにレッドさんが男を見上げた。その瞳には、強い驚愕の色が見える。男は笑みを深くして言葉を続けた。

「お前と戦うには、まだ早い」

言葉を言い終えたその時、男の背中から両翼が生えた。私とレッドさんが唾然としていると、ひょこつと背中からプテラの顔が現れる。良く見ると男の両肩をプテラががちり掴んでいた。

「ッ待て！」

レッドさんが男に向かって走るが、その手は虚空を掴んだだけだ。男はそのまま何も言う事なく、大空へと舞い上がって去ってしまった。

私はただ呆然と男が飛び去っていくのを見ていることしかできず、胸にはどこかもやもやしたものが残っていた。

「これでもう大丈夫だ」

「ありがとうございます」

レッドさんがきずぐすりを使ってくれたおかげで、メロンパンは何とか回復した。

「それにしても、アイツ……」

レッドさんが苦い顔で呟く。アイツというのは、間違いなくあの男の事を言っているのだろう。

あの時、レッドさんは私の親に頼まれて私を探していたそうだ。私は親が研究員なので、オーキド博士とのつながりでレッドさんとも顔見知りだ。オーキド研究所には、父の手伝いに通っている。レッドさんはプテラに空中から私を探してもらっていたから、男を追いかける事が出来なかったのだ。

レッドさんは未練を払うように頭を振ると、私に真剣な顔で向き合った。

その口が何か言いだす前に、私は土下座をする。

「見逃して下さい」

私の様子に、レッドさんが戸惑っている雰囲気伝わってきた。レッドさんは困ったように唸ると、質問を投げかけてきた。

「……一つだけ聞いていいかな。どうしてそこまでユズルはゼニガメにこだわるの？」

ここの近隣にはほかにポケモンがいる。わざわざひきこもってしまうているメロンパンで戦う事はないんじゃないかと言いたいらしい。それにポケモンにだって個性があつて、戦うのが嫌いなポケモンを戦闘に無理やり引き込むのもどうかと問いたいのだろう。私は額をつけたまま話した。

「メロ、いえメロンパンは、私の初めてのポケモンです」

メロンパンはひきこもりだけど、決して戦うのが嫌いなのではない。何が理由かわからないけれど、戦いたいののに、何故か“戦えない”だけなのだ。

きっとその理由は、旅をしてみないと分からないものなのだと思う。数年の付き合いだけど、メロンパンのひきこもりは治らなかつた。私はポケモンの言葉が分からないから、何が理由かも分からない。でもメロンパンはひきこもりたくてひきこもってる訳じゃないことくらい分かる。治してあげたいけれど、原因が分からない。

だったら、探しに行くしかないじゃないか。

「私は、メロンパンと旅を始めたい」

「……ゼニガメは？」

メロンパンはモンスターボールから勝手に出て、一声鳴いて見せた。

「……分かった」

しばらくしてその返事が返ってきた時、私は満面の笑みになった。目の前には、苦笑したレッドさんがいる。

「ユズルの両親には、おれから上手く言っとく」

「あ……ありがとうございます！」

肩を竦めてレッドさんが立ち上がったので、私も慌てて立ち上がった。レッドさんは自分のリュックを漁ると、出した物を私に放つてよこした。

「タウンマップを渡しとくよ。これから先、役に立つ」

受け取ると、私はレッドさんに深々と頭を下げて、タウンマップを広げてトキワシティへの道を確認めた。タウンマップはこのカントー地方の地図の事だ。もうすぐその距離にマサラタウンに一番近い町であるトキワシティがある。走って逃げてた間に、だいぶ近くなってたようだ。

「行ってらっしゃい」

「はい、行ってきますー！」

レッドさんが軽く手を振って見せ、私は元気良く手を振り返して歩きだす。

第一話 マサラタウン（後書き）

ナニコレ……ページ数が減らせないよ！何故減っていないんだ！おかしい。おかしいよ！訳が分からないんだよ！

第二話 トキワシティ

「わしのなー、わしの若いころはのー」

「はあ」

「もっと」　　ひっく、ういー。もっと……どーんな

っ

「はあ」

「トレーナーが構えて、ひっく。おったもんよお」

「はあ」

「それをなんじゃー！最近のもんはあっ」

「はあ」

「情けないったらないのおっ！！」

「はあ、すみません」

「謝って済むならジュンサーさんはいらんのじゃああああ！舐め
とんのかワリヤア！！！」

「ひいっ！ごめんなさい！」

どうしよう、足が痺れてきた。10分も正座してれば当たり前な
んだけど、おじいさんがヒートアップしているだけに「あおう、そ
ろそろ帰りたいです」なんて言いにくいよ！！

「ちゃんと聞いとんのか！？ういっく！これだから……」

「聞いてます聞いてます！」

「返事が二回なのが嘘くさいっ」

「ええええええええええええっ！」

右を見る。目を逸らす。左を見る。目を逸らす。

ここはトキワシティのど真ん中の道の上だっのに、なんで誰も
たすけてくれないんだあああっ！

聞こえていますか？ヘルプミー、ヘルプミー。誰でもいいです、助けて下さい。

応答願います！

「ごりゃー！わしの話聞けエエエエツッ！！」

「おい、そのじいさん」

私が足の痺れと格闘しながらおじいさんの話を大人しく聞いてみると、ふつと影が差した。振り仰ぐと、オレンジのツナギに黄色のシャツのツートンカラーが目飛び込んできた。

「おう、その美人の嬢ちゃんも座れいっ！」

ピキ

背後から嫌な音がした。恐る恐るツナギの更の上の顔を正座したまま見上げる。

うららかな春の木漏れ日の陽光のような金系の短髪は所々ぴよんぴよんと跳ねている。右側の髪を安っぽいビーズのついた三本のヘアピンで止め、非対称の髪型になっていた。丸っこい大きな蜂蜜色の瞳の上の眉は最大まで引き寄せられ、眉間に深い皺を刻んでいる。にっこりと笑えばとても可愛らしいであろう、女にしてはかなり背が高めの少女が妖気ともいえる怒気を纏わせて立っていた。

「……前言撤回、てめえなんぞクソ爺で十分ッ！」

おじいさんは、「なんじゃとー!」と空の酒瓶を振り回しながら抗議する。しかし、ここは素直に謝るのが正解だ。

「あの、おじいさん」

「なんじゃ」

「キリは、じゃなくて、この子は」

私がフォローしようとしたその時、私が話し終えるよりも先に少女に見える少年、先に旅立った私の幼馴染が叫んだ。

「僕はれっきとした男だッ!」

「は?」

おじいさんはぼかーんとした顔を見ると、よたよたとキリに近寄り、じいっとその顔を5秒ほど見つめた。わなわたと震えだすと、頭を勢いよく左右に振る。

「嘘じゃっ!こんなに肌がつやつやで瞳がくりくりで唇がぷるぷるの別嬪さんが男じゃなんて……っ!嘘じゃあああっ!」

「ジジイイイイイツ!今すぐ棺桶に全身突っ込んでやるつかアアアッ!」

「ストップ!落ち着いて!」

おじいさんに殴りかかろうとするキリに抱きついて引きとめる。そのままずると後退していき、キリの背中からおじいさんに声をかけた。

「ありがたいお話ありがとうございます!失礼します!」

「おお、また来るんじゃぞ。地味な方の嬢ちゃん!」

「ご老人って正直だよね。胸に痛いほど。地味という単語に挫けそうになったが、私は今だ暴れているキリを引きずりながらその場を後にした。」

「一先ずキリをおじいさんが見えない位置に引つ張り込もうと奮闘していると、落ち着いたらしいキリが低い声で抗議した。」

「いつまで抱きついてるんだよ。さっさと離せ気色悪いっ！」
「き……気色悪い……」

「なんとと言う言い草。だから振り返ったキリに流れるようなアップパーカートを繰り出しても仕方ないと思うんだ。キリは綺麗に上空を舞った。」

「くっ！飛距離が短くなった……だと……っ!？」

「キリは体重が重くなっていったようだ。旅立つ前よりも、私のアップパーカートであんまり飛ばなくなっている。成長期か？成長期なのかコノヤロー。」

「何すんだ暴力女！」
「キリが悪いんじゃないか。気色悪いなんて言われたら誰だって怒るさ」

「キリが真っ赤な顔で叫んだので、私は口を尖らせて反論した。するとキリは再び開きかけた口を閉じ、頭を軽く下げた。」

「……悪かったよ」

キリが大人しく謝った事に目を丸くする。旅立つ前はここで口論コースまっしぐらで、其処をカスムが落ち着かせるといふパターンだったのに。どうやらこの半年の旅で中身も成長したようだった。

ならば私も大人にならなければなるまい。

「うん、まあ……ごめんなさい」

「おう」

キリの目の前まで行って頭を下げると、キリは居心地が悪そうにそっぽを向き、立ち上がってズボンの砂を払った。目の前に立ったキリに、私はふと疑問を感じて問いかける。

「そーいえば、キリはなんでトキワにいるの？」

「お前が家出したって連絡があっただよ」

キリがニヤリと笑って見せたので、私は脱兎の勢いで逃げ出そうとした。しかしその一瞬前に、キリが私のポニーテールの端を掴んで引き留める。

「痛い痛い痛い！！」

「このままお前の家に帰るぞ。お前が旅なんて無茶にも程がある」

「何処が無茶なんだよ！全然無茶じゃない余裕余裕！！」

私の言葉に、キリはポニーテールを離すと私の腕を取って疑わしそうな眼をした。

「お前は旅に出た事無いから分かんないだろうけど、んな甘っちょろいもんじゃねーんだよ。少なくとも」

私の腰についているモンスターボールを見て、キリは嘲笑した。

「そんなひきこもり一匹じゃな」

「ロイヤルスピンクラッシュー!!」

掴まれている左腕を引っ張って、キリに右ストレートを叩き込む。しかしキリは余裕の表情で踏みとどまると、左手でその拳を受け止めた。渾身の力を込めて押し返そうとするがキリはピクリとも動かずに、冷えた目で私を見据えた。

「……いいか、僕はお前がそいつをペット扱いしてるうちは全然構わない」

「メロはペットじゃない。馬鹿なことを言っな」

「けど、あくまでバトルや身を守る手段として連れて行くのなら、話は別だ」

底冷えするような目だ。旅立つ前とは比べ物にならない程の気迫に気圧されるけれど、何とか踏みとどまる。

「旅に出れば当然危ない事も沢山起こる。そういつた時に重要になるのは連れてくるポケモンだ。ポケモンが強ければそれだけ危険にも対処できる。けど、お前のゼニガメときたらどうだ?」

「……………ッ!」

「戦えないポケモンを連れて旅するなんて、自殺行為に等しいんだよー!」

目に怒気が燃える。キリの言ってる事は完全に正論だ。父さんや

母さんと同じ。それだけに、私を説得するどころか逆に激昂させるには充分だった。

「そんなの……そんなのキリには関係ないじゃないか！」

噛みつかんばかりに吼えると、キリは私の右拳を振り払って絞り出すように叫び返した。

「関係ない訳ないだろ！」

「いーや！関係ないね！！キリがメロの何を知ってるって言うんだよ！」

キリは眉間の皺をますます深くして私の両肩を掴んだ。私はぎりぎりと肩に食い込む痛さに顔を顰めそうになったが、負けるものとキリをきつく睨み返す。キリは少し声を低めて説教を続けた。

「怪我したらどうするつもりなんだよ！最近はどうつかの馬鹿達が無駄にポケモン狩りまくってるせいで、ポケモンが凶暴化してんだぞ。トキワの森だって例外じゃない」

「怪我したら治せばいい！旅に危険だつてつき物だ！」

「治る前に死んだらどうするんだよ！お前も、お前のゼニガメも！」
「！」

私はキリから目を逸らして、足元を見つめた。暴れるのを止めた私を諦めたとみたらしいキリは、肩から手を放した。トキワの森は、トキワシテイからニビシテイに行くためには必ず通らなければいけない森だ。迂回なんてできない。

「死んだら元も子もないんだ。他の街が見たいなら僕が連れてってやる。危険を冒す必要なんてない」

キリはそう言うと、腰のモンスターボールを取ってピジヨットを出した。俯いている私に向かって右手を差し出す。

「帰るぞ」

ぼんやりとピジヨットを見た。滑らかな体毛に、凜々しい顔つき。いかにも強そうで、よく鍛えられている。きつとバトルしたら、すごく頼もしいんだろう。

「ねえ」

「何だよ」

「バッジ、いくつ持ってる？」

「まだ4つだ。ほら」

ツナギのポケットから銀色に光る、長方形のバッジケースを取り出して私の目の前で開いて見せた。ポケモンの雑誌を何度も読み返したから、どれがどの街のジムのバッジかなんてすぐに分かる。

ニビジム、ハナダジム、クチバジム、ヤマブキジム。

それだけの実力があるという、強者の証だ。

キリは実際に自分の目でカントーを見てきた。父さん母さんとは説得力が違う。

けれど、

『第一、お前のそのひきこもりポケモンでどう戦っていくつもりなんだ？』

『役立たずを消しただけだ』

『戦えないポケモンを連れて旅するなんて、自殺行為に等しいんだよ！』

役立たず、役立たず、役立たず。

ぐるぐると脳内をその言葉が繰り返し繰り返し繰り返して、吐き気さえ感じた。

役に立つポケモン。役に立たないポケモン。そんなの

「勝手に……決めるなアアアツ！！」

キリに向かって思いっきり怒鳴りながら空のモンスターボールを投げる。けどモンスターボールから上がった煙にもキリは動揺しなかった。

「無駄だ。大人し……ッ!？」

だが私は煙に紛れて逃げた訳じゃない。煙で視界が一瞬防がれるのを利用して、キリの急所を思いっきり蹴り上げた。煙が晴れると、崩れ落ちて悶絶しているキリがいた。

「ま……て……ッ!」

「待たない！お大事に！！」

ちょっとだけ気の毒な気がしたキリに気遣いの言葉を一言かけて、トキワの森に向けて走り出す。朝早くに出発したから、今はもう夕暮れに近い。けどこのままトキワのポケモンセンターに泊まれば確

実にキリと八チ合わせるに決まってる。

それだったら危険なトキワの森に飛び込む方が百倍ました！

『行ってらっしゃい』

レッドさんの言葉が蘇る。みんな反対したけど、レッドさんはちゃんと送り出してくれた。

だったら、ここで連れ戻されるなんて格好悪いところ見せられないじゃないか！

「ユ……ズル！」

背後で最後にキリが呼ぶ声が聞こえた気がしたが、私はそのままメロンパンを連れて、暗いトキワの森へと飛び込んで行くのだった。

To be continue ?

第二話 トキワシティ（後書き）

素直に心配だって言えよキリ……、ツンデレはこれだか（ry

第三話 トキワの森

空に輝く美しき満月。深い闇を孕んだ木々。甲高く響く奇声。そして

「私はここで死ぬんだ……」

生贄になっている私と、踊るウツボット&ウッドン×数十体。

どうしてこうなった。

「うーん……」

いやホントにどうしてこうなった？っていつでも私が悪いんですよね分かります。

ここはトキワの森の奥深く。助けが見込める可能性は非常に低い。トキワの森の一部をちょうど円形に拓いた場所に所狭しとウツボット達が踊り狂っている。

「キョエエエエエエエッ！」

「キョエツ！キョキョキョキョキョッ！！」

ウツボットってあんなに怖いポケモンだったかなあ。研究所で見た時は結構可愛かったはずなんだけどおかしいなアハハハハ。

ウツボット達が踊り狂っている広場を取り囲んでいる木々一本一

本に、生贄となる生き物、というより私以外は全てポケモン、が、ぐったりとした様子で吊るされている。その様に、ポケモンの図鑑で読んだ内容を思い出した。

『野生のウッドンがウツボットに進化するときには、複数の生贄を用意して、そのエキスをエネルギーとして進化する。媒体には、月の石を使用する』

そう言えば、レッドさんも昔生贄にされかかって大変だったって話を聞いたことあるなあ。まさか同じ目に遭うなんて、これは未来のポケモンマスターへのフラグなのだろうか。

今まさに未来が消えようとしている訳ですが。

まさかトキワの森でいきなり気を失ったかと思ったら、ウツボット達の生贄の儀式に使われるとは思ってもみなかった。メロンパンは腰のモンスターボールに入ってるから心配ないが、問題は私だ。

「キョエエエエエエイトッ！」

『キョエエエエエエイトッ！』

広場の中心で叫ぶウツボットに呼応するように、広場中のウツボットとウッドンが一斉に奇声を上げる。鼓膜が破れるかと思うほどの音量だが、両手両足裏でぐるぐる巻きにされているので大人しく耐えるしかない、辛い。

「キョエツッ！」

中心の一際大きいウツボットが、私の方にうごごごと蠢きながらにじり寄ってくる。その蔓の先には、よく見えないが多分月の石が

握られていた。何をするつもりなんだろう。

いや何をするつもりって……決まってるんだけど予想したくない。

「キエエエエエエエッ！！」

ウツボットが大きく振りかぶって迫る。私は何とか蔓から逃れられないかと体を動かしてみるが、蔓は何重にも巻かれてるようでありくともしない。次に来る痛みを想像して、私は反射的に目を強く瞑った。

肉を突き破る嫌な音、何かを絞り取るような耳慣れない断続音がそれに続く。全身に鳥肌が立ち、背筋を悪寒が駆け抜けた。

しかし、いつまでたっても痛みが来ない。

「……干物？」

そつと目を開けてみると、私のすぐ横にぶら下がっていたはずのポツポが、干物に進化していた。干物（ポツポ？）から見て私とは反対側の方向に、ウツボット達はズルズルと移動しながら次々と哀れなポケモン達を干物に変えていく。

「たすか……つた……？」

「キョエエエエエエエッ！」

『キョエエエエエエエッ！』

訳ではないようだ。

ウツボット達は一匹昇天させるごとにワクワクとした目でこちらをチラチラ見ている。その期待に満ちた目からなんか私がメインデイスリュっぱい。吊るされてる位置からしてもラストっぱいもの。何だこれ嫌なビップ待遇受けてるよ。

刻一刻と私の死へのカウントダウンは順調に進んでいく。何とかならないかと色々動いてみるのだが。

「ん……ツくつそ、駄目か………」

そう上手くいくはずもない。蔓はやっぱりびくともしなかった。ちらりと残りの数を見る。

残り、3匹。

「……ツくつそおおお！」

腕と腕を擦り合わせて隙間から出ようとともがく。指なら動くのだが、腕自体は無理だ。

残り、2匹。

「キョエエエエエエエエエエッ！」

『キョエエエエエエエエエエッ！』

耳障りな奇声が近い。背中を冷たい汗が流れた。

残り、一匹。

「……！！……！！！」

焦りしか感じられず、私は無言で身体を動かした。解けない、解けない、解けない！

残り、0匹。

目の前に大きな影が差した。

「は、はるー……？」

へらりと引きつった笑いを浮かべてみるが、ウツボット達に通用するはずもない。ウツボットは血塗れの月の石を大きく振りかぶり、その背後ではウツドンが踊っている。差し迫る月の石の切っ先の動きが、やけにゆっくりと見えた。満月がバツクにあるせいか、ウツボットの目が光が一点もない真っ暗やみのように見える。

「ギョエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！」

『キョエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！』

「ッー！」

今までで一番大きく、一番長い奇声と悲鳴とが、森に木霊した。

かくして、私の冒険はその人生と共に幕を下ろしたのです。

GAME OVER

「って、待つて待つて待つて！まだ死んでないよ！！」

何だかとても理不尽な神の声が聞こえた気がして、私は全身全霊を持って抗議した。全身に赤い痕が残っているものの蔓の拘束は既に解かれ、殺気だったウツボットとウツドンの大群と相對している。

そして私の目の前で、ふるふるしながら立っているメロンパン。

さつきは本気で死を覚悟したのだが、メロンパンが寸でのところで飛び出して、みずでっばうで月の石を弾き返し、ひっかくで蔓を切ってくれたのだ。現在はウツボットとウツドンの大群から私を庇うかのように立っている。ふるふるしてるけど。

「メロンパン……」

「ギョエ`エ`エ`エ`エ`エ`エ`ッ！！」

弾かれたウツボットが、眼光鋭くメロンパンを威圧する。私からじゃメロンパンの表情は見えない。メロンパンは、戦えるのだろうか？

「……」

メロンパンのからにこもる！

メロンパンの防御力が上がった！

「……」

メロンパンはからにこもっている！

「……ギイエツ！」

無理だったようだ。

「メロンパアアアアアアアンツ！」

「ギョエエエエエエツ！！！」

からにひきこもったまま動かないメロンパンにウツボットが迫る。私は間一髪でメロンパンをモンスターボールに戻した。ウツボットの蔓が、一瞬前までメロンパンがいた場所を攻撃する。

「ふう……」

危ないところだった。

額の脂汗を拭っていると、直後に風を切る音がして、本能的に右に走る。予想通り鋭い音がして、ウツボットの蔓が私がいいた所の草を薙ぎ払う。ウツボット達に背を向けて、木々の間を転がるように逃げ出した。その後を追うかのように次々と何かの塊が発射され、豪雨のように背後の木々に降り注ぐ。

多分ヘッド口爆弾だ。当たったらひとたまりもない。

「……………ッ！」

悲鳴を呑み込んでただひたすらに前に進む。木の枝が何度も顔や体に当たって無数の切り傷を生んだ。全身がじくじくとした痛みを訴えていたが、それ以上に死亡フラグが背後に迫っているので気にしている余裕はない。

満月が照らし出すトキワの森。幻想的だが今の私にとっては恐怖の森でしかなかった。背の高い木々は迫りくる化け物のようで、森に住む無数のポケモン達の視線が自分に向けられているのを肌で感じる。背後に聞こえる追っ手のウツボット達の移動音は遠くなり始めているが、気を抜くとすぐに近づいて来た。イエローさんに合わせて結った長いポニーテールには、ビードルやキャタピーの糸や葉っぱが大量にくっついてぐちゃぐちゃだ。

勢いよく木々を踏みしめる音がそのまま追っ手の音のように聞こえて、汗が全身から噴き出していた。

「は……………っはあ……………はっ……………う、あッ！ぶごッ！！」

疲れきって足が纏れ、顔面から地面に倒れる。痛い。鼻が特に痛いけど、額はもつと痛い。いそいで立ち上がろうとすると、鈍い痛みが足首に走った。

「っ、なとき……………っに……………っ」

足首はどうやら転んだ拍子に挫いたようだった。仕方なしにずりずりと近くの木の背後に向かう。匍匐前進することに足が痛みを訴えたが、無視して辿り着くと、木の背後に背をつけて息を潜めた。潜めてもなお荒い息と狂ったような心臓の音が、耳の奥で忙しく鳴り響く。酸欠と額にできたたんこぶのせいで、頭の内外の痛みが激

しくデュエットしていた。

「……」

しばらく無言で耳を澄ませる。転んだ時に打った鼻から血が流れてきたので、右袖で拭った。鼻の奥がじんわりと痛むような感じが出てなかなか止まらないので、ボロボロになった右袖が真っ赤に染まっていく。額のたんこぶも出血していたようで、左の額から左目に流れ込んで来て邪魔だったからこっちは左袖で拭う。両袖が真っ赤に染まったのを見て嘆息したが、同じ服を何着も持っているので、助かったら雑巾にしようと思心に決めた。

息や心臓の鼓動が落ち着き、出血も止まるくらい耳を澄ませたが、もうウツボット達は追いかけてこないようだった。気が抜けた私は大きく息をつくとき、ふらりと横に倒れ込んだ。

その時、短い風切り音が3つして、私がさっきまで上半身を預けていた木の幹に細い何かが突き刺さった。一瞬で目が覚めた私は右に転がって起き上がり、ざわめくトキワの森に全身の感覚を集中させる。

左。

再び風切り音が私を襲ったが、一連の騒動で鋭敏になっていた耳が音を捕え、重力に従いたがる身体を鞭打ってなんとか避ける。しかし風切り音はそれだけで終わらず、姿を現さない相手によって次々と放たれていった。

左、左、右、上、右

段々と避けるのが難しくなっていく。私は疲れ切っていたし、相手の狙いは素早く正確だ。気を失いそうなほどに空腹で、睡眠も欲している。私は家を出てから何も食べていないし、一睡も出来ていない。倒れてもおかしくない状態だった。

後ろ。

今までよりも更に早い攻撃の気配を感じて、倒れ込むように私は避けた。浮きあがった髪の毛の数本が銀色の何かによって千切れ飛ぶ。その直後、私の背後に大きな気配が現れ、もう一つの銀色が右の頬を掠めて地面に突き刺さった。円錐形で銀色のそれは、何処かで見覚えがある。聴覚が背後の羽音を聞きつけた時、そのポケモンの名前が無意識に口をついて出た。

「スピアー!?!」

私の声に反応して、スピアーがゆっくりと円錐形の凶器を引き抜く。何故ここにスピアーがいて、しかも私を攻撃してきたのかまるで分らなかった。

私はゴロゴロと横に転がってスピアーの下から脱出して急いで起き上がり、スピアーから距離をとって立った。

「わひゃっ!」

私が体勢を整えるのを律義に待っていたスピアーだが、見逃してくれる気はないらしい。右の針を勢いよく私に向けて攻撃してきたので慌てて避ける。

足はもつがくがくで、空も飛べるスピアーから逃げ切れる自信は全くない。私はくらくらする頭を振り絞って思考を巡らせた結果、腰のモンスターボールを手にとった。

「てりやああッ！」

私はスピアーに向かってモンスターボールを思いっきり投げる。バトルもしてないのに捕えられる可能性が低いのは百も承知。でもこれしか

メロンパンが召喚されました。

「なにiiiiiiiiッ!？」

投げたモンスターボールから軽やかな音がして、メロンパンが飛びだした。やっぱりからにこもったままだったが。

どうやら私は、間違えてメロンパンの入ったボールを投げてしまったようだ。

「わっ!！」

私が失敗してもスピアーはお構いなしに攻撃を続行する。どうしよう、どうしようかと混乱していると、天命のように打開策が見つかった。スピアーの針攻撃が雨のように襲いかかってくる中、私は急いでメロンパンを抱き上げる。

メロンパンをなんとか抱き上げた私に、スピアーの右針が迫るその瞬間、

「……!？」

「間に合った！」

私はスピアーの攻撃をメロンパンの固い甲羅で受け止めていた。即座にスピアーは舞うようにみだれづきを繰り返すが、年単位でカラにこもるを使ってきたメロンパンの防御力は伊達じゃない。スピアーの針の方が耐えきれず、両手の針を引っ込めてお尻の方の針で向かってきた。

私は紙一重でそれを避けると、渾身の力を込めてメロンパンを振りかぶる。

「おつどりゃあああああつー!!」

「……!ズピツ!!」

メロンパンの甲羅が頭に直撃したスピアーは、ふらふらと地面に倒れる。私は今度こそ空のモンスターボールをスピアーに投げた。カタカタと2・3回揺れたが、モンスターボールにスピアーが収まり、私はその場にへたり込んだ。

「す……スピアー、げつとだぜええええ……!!」

薄く差し込む朝日に向かって弱弱しくガッツポーズをして、私はその場で気絶したのだった。

To be continue ?

第三話 トキワの森（後書き）

やったぜ！スピーアーゲットだぜ！！

第四話 ニビシティ 前編

重い。

身体が重い。

「う……んがっ!？」

何か丸い物体が大量に顔に落ちてきて、私は眠い目を擦りながら目を覚ました。ぬっと現われる影。目の前には、真っ赤な複眼に、黄色い肌、黒くて長い触角が

「ぎゃああああああああああっ!!！」

森中に響き渡るかと思われる悲鳴を上げて、私は完全に覚醒した。

叫んでいると、スピアーの右針から発射された何かが頬を掠り、過ぎ去っていった。その複眼は無言で「黙らんかい」と言っているように見える。私は両手を上げてコクコクと頷いた。

そうだった、スピアーは私がゲットしたのだった。

しかし勝手にモンスターボールから飛び出してくるとは、心臓に悪い。私はとりあえず身体を起こして頭を振った。

「うおっ……」

それだけで視界が揺れ、くらりとした感覚が襲ってくる。体中が痛いし、おなかも減りすぎて気持ち悪い。体中が悲鳴を上げているのがよく分かった。それでも、気絶していたとはいえ長い事眠っていたのだから、頭はずっとクリアになっている。

そう言えば、トキワの森で気絶してたのによく生きてたな私。

周りをぐるっと見渡して、私は目を覚ました時以上に驚く事になった。空は相変わらず木々に覆われているためあまり光は差し込まず暗いままだが、私を取り囲むように、木々に糸が縦横無尽に張り巡らされている。出入り口になっているのか一方向だけ糸が張られていない場所があったが、ここまで念入りに張つてあると、他のポケモンは入ってこれないだろう。私の近くには、木の実がたくさん転がってもいた。ついでにメロンパンも同化しつつ転がっていた。

木の実を見て、喉を鳴らす。空腹はとつくの昔に限界を突破していた。メロンパンもメロンパン（食物）に見えかけてるもの。

危険を察知したのかメロンパンは頭や手足を出して、よたよたとこちらに向かつてきた。いや、食べないから安心していいよ。

しかし、メロンパンもおなかが空いているようだ。目が私と木の実とスパアと移動しながらせわしなく動いている。それでも食べないのは私やスパアに遠慮をしているのだろうか。メロンパンと一緒にスパアを物欲しげに見つめると、スパアは「どうぞ」と右針を振った。

「いただきまーすっ！！」

「ゼーニッ！！」

多分集めたのはスパアであるから、本人に了承を得た以上遠慮

容赦なく木の実に食らいつく。見た事のないものもあるが、そんなこと気にしていたら限がない。私と同じくメロンパンも、恐ろしい勢いで木の実を口に詰め込んでいる。一匹と一人はしばらくの間、食事のあいさつ以外無言のままただひたすらに食欲を満たしていた。

「い、生き返ったあああ……。本当にありがとう！」
「……ゼニ」

満腹にはなれなかったが、腹八分目くらいにはなる木の実の量があつて、スピアーに私とメロンパンは御礼を言った。メロンパンはまだ慣れないのかすぐにからにこもってしまったけれど、スピアーに対して警戒心が薄らいでいるのは確かなようだった。ご飯ってすごい。

「スピ」

スピアーが短く返事を返す。人心地ついた私はリュックサックを手取るうとして、ない事に気がついて叫んだ。

「あああああああつ！リュックサックー！！」

恐らくウツボット達に攫われた時に落とした。私は3秒ほど頭を抱えたが、スピアーが目の前に放り投げてきたものを見て目を丸くした。私の悩んでいた正にそのもの、私のリュックサックだったのだ。

「リュックサックウツ！会いたかったよ！良かった！！会えてよかった！！」

リュックサックと熱い抱擁をして、私はスパアにも抱擁しようとした。残念ながら避けられたが。

それはさておき、私はリュックからタウンマップを取りだして二ビシティまでの道を確認した。拡大縮小を何度か繰り返しながら確認を終えると、立ち上がって準備体操を始める。

「あつたらしいあーさがきた！きーぼうのーあーさーだ！」

前にテレビでやっていた準備体操をうる覚えながらにすると、身体全体がばっきんごっきん音を立てる。普段からよく動いてるから筋肉痛にこそならなかったものの、硬い地面で一夜を明かしたのがいけなかった。10分ほど柔軟に集中して体操を終了すると、身体がほぐれた感じがして動きやすくなった。

「よし！行くかー！」

大きく伸びをして、メロンパンをモンスターボールに戻す。スピアもモンスターボールに戻そうとしたが、放たれた赤い光線をひらりと避けられて、首を傾げた。

「……もしかして私の手持ち嫌？」

思い当たった原因を言ってみたが、スパアはうんともすんとも言わない。私はぐるりと幾重にも張られた白い系の防護壁を改めて見て、嫌いなこんなことしないだろうと一人で完結した。ほっとけば勝手にくたばるか野生のポケモンに襲われて、自由になってた訳だし。少なくとも嫌われてはいない、と思う。好きかどうかは会

ったばかりだし怪しいけど。

「まあ、入るのが嫌なら仕方ないか。疲れたら言ってね、ボールに戻すから」

「スピ」

「じゃあ行くのが、メロンパン、コーヒープリン」

「……」

「え？名前だけど。略称はリンだよ」

スパイア改めリンが不思議そうな空気を醸し出していたので、私はこれこれしかじかと説明を始めた。

『母さん母さん、今日のおやつは何？』

『今日はコーヒープリンよ』

『コーヒープリン？なにそれ』

『コーヒーゼリーって美味しいじゃない？』

『うん、大人の苦みだね』

『それで、プリンもおいしいじゃない？』

『うん、ぷるぷるしてて甘いね』

『だったら、一緒にしたらもっと美味しいと思わない？』
『母さん、天才的発想だね！』

「
というやりとりの元、プリン、コーヒーゼリー、プリン、
コーヒーゼリーという感じで交互に重ねた悪魔のお菓子、コーヒー
プリンが我が家に降臨しましたとき。めでたしめでたし」

「……」

「味？失礼な！味はちゃんと……」

私は疑わしそうな眼のスピアーに胸を張って答えた。

「悶絶するほど不味かったとも！」

「お？おおお？つ……つ着いたーッ！ニビシテイ！！」

空はもう赤みを帯びた夕暮れ時に染まっていた。トキワの森はほとんど日が差さないので時間感覚がないが、私は長い事気絶していたようだ。やっとのことでトキワの森を抜けて赤く染まるニビシテイに辿りつき、私は歓喜の声を上げながら入り口付近の看板を確認していた。

“ニビシテイ・ニビは灰色、石の色”

ボロボロの格好のまま思わずガッツポーズを決める。

「生きているって素晴らしい！！」

あれから野生のポケモンがわんさか襲ってきたが、全て撒いたりスピアーが撃退したりして、なんとかトキワの森を抜ける事が出来た。スピアーがモンスターボールに入らなかったのは、野生のポケモンが襲ってくる事を予期しての行動だったらしい。メロンパンも

鈍器として撃退に一役買ってくれ、なんだかレベルが上がった気がする。

とりあえずポケモンの回復をしたいので、ポケモンセンターへそのまま直行。ポケモンセンターの自動ドアをくぐり抜けて、カウンターのジョーイさんに声をかけた。

「ポケモンの回復を

「きゃああああああああああつ!!」
「え」

私の姿を見たとたんにジョーイさんが真っ青な顔で絶叫し、ただでさえ集まっていた視線を更に集めた。ポケモンセンター中の視線が集中する中で、ジョーイさんは指笛を響かせる。

「あの、ちょ」

「重症トレーナー一名とポケモン二匹よ!早急にお風呂と食事と睡眠とポケモンの回復が必要だわ!!ラッキー達急いで!!」

「あああああああああつ!?!」

ジョーイさんの指笛に反応して、三体のラッキーが素早く登場する。三位一体となって私を担ぎあげ、ジョーイさんと一緒にポケモンセンターの奥へと連れ込まれた。一体が鮮やかな手並みで私のリュックサック・モンスターボール・服を奪い去り、もう一体は何処かへと離脱。残る一体とジョーイさんは私を浴室に連れ込んで、お湯の張った浴槽に放り込んだ。

「……!つぶあ!!」

じんわりと身体に染み込んでくる温かさについ溶けそうになるが、解けた髪の毛をかきあげて視界を確保すると、背筋を悪寒が走りぬ

けた。

浴槽のすぐそばに立っているのは、ジョーイさんとラッキー。

「第一級洗淨体制に移ります！ラッキー、準備は良いわね！」

「ラッキーイイイツ！」

「うひいっ！！怖い！怖いよこの人たち！！」

よく分からない事を言いながら目を光らせるジョーイさんと、雄たけびをあげながらわしゃわしゃと手を蠢かすラッキー。彼等からウツボット達に襲われた時に負けないほどの恐怖を感じた。

ダメだ、このままじゃ何か乙女として大切なものを失いそうな気がするよ！

「くっ！戦線を離脱します！」

私はひらりと浴槽から飛び出すと、水滴を滴らせながら浴室の出口へと向かう。ラッキーが私を引きとめようと立ちふさがるが、その頭に両手を乗せて飛び越し、浴室の扉へと手をかけた。

「なっ！前方倒立回転飛び……だと……っ！って、待ちなさい！」

「待たない！逃げます！」

脱衣所横に置いてあったバスタオルを2枚ひつつかんで1枚身体に巻き、そのまま脱衣所を突っ切る。そこから何処に向かうか迷ったが、お風呂に入りたくない訳じゃないし、ポケモンセンター近くの宿にも泊る予定なので、ひとまず連行された道を逆走する。ぼたぼた水滴が髪や身体から流れ落ちていくが、2枚目のバスタオルを

頭から被り脱衣所口にあったスリッパを拝借しているので問題ない。足跡や水滴なんて残したらジョーイさんやラッキーにばれちゃうじゃないか！

パタパタパタと軽い音を立てながら廊下を走っていると、曲がり角で誰かと衝突した。

「うぶっ!?!」

こ、これは俗に言う「道角でこっつんこ」そこから始まるラブストーリー!」と言うやつでは……!寒い!寒すぎて凍えそうだよ!早急に回避しなければ!!

「こんなとこで何やっとなるん?えらい格好やけど」

頭上から降ってきた声は、聞き覚えのあるものだった。

私は頭に被ったバスタオルを前に引っ張り、急いで踵を返そうとする。しかし髪の毛の端を引っ張られて立ち止まらざるを得なくなった。

「痛い痛い痛い!」

「家出なんて、こりゃまたあんさん無茶したなあ」

何かこの会話デジャヴツ!バリバリ聞き覚えがあるよ!カスムもか!カスムもなのか!!幼馴染ダブルコンビで私を追い詰めようというのか!!

私が逃走方法を考えて唸っていると、カスムは髪の毛を離してのんびりとした口調で思いがけない言葉を言った。

「ま、それはそれとして俺は構へんのやけどな」

「へ？」

その言葉の意図が掴めず困惑していると、私の右腕を取って走ってきた道を逆走し始める。つまり、浴室に向かっているのだ。

「は？え、アレ？」

「家に連れ戻したりなんかせえへんから、まずそのエロい格好なんとかしいや」

えつと、何とかしろということとは、ジョーイさん達の所に戻るという事で

「嫌だあああああつ！！！」

カスムは絶叫して逃げ出そうとする私を、手早く頭のバスタオルで巻くと小脇に抱えた。

「嫌よ嫌よも好きの内、っていうもんなあ。照れ屋さんか」

「違う違う違う！間違ってるよその考え！！！」

抱えられながらもカスムを見上げると、黒に近い青色の髪を揺らし、同色の瞳を細めてさわやかに笑っている。

かくして私は、楽しそうな笑い声をあげながらも妙に手際の良いカスムに連行され、泣く泣くジョーイさんとラッキーに引き渡されたのだった。

「なんやドナドナみたいやなあ」

「御者さん助けてくれませんか」

「無理」

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
. . .
?
?

第四話 ニビシテイ 前編（後書き）

二人目幼馴染登場。

第五話 ニビシティ 後編

「これより、特別試合、ニビジムジムリーダー・タケシVS挑戦者ユズルの試合を開始します」

私の目の前には不敵な笑みを浮かべて、屈強な男性が立っている。皮のズボンに上半身は裸。イワークがその後ろではとぐるを巻いてユラユラとこちらを見下ろしている。トレーナーと同じように、その顔は自信に満ちているように見えた。

彼こそは、ニビジムジムリーダー・タケシである。何故上半身裸なのかは知らないが、青年なはずなのに胸毛もワキ毛も無くツルツルした身体つきなのは何故だ。どう言った無駄毛処理法を行っているのだろうか。

「使用ポケモンは二体の入れ替え戦。ただし、一体でも戦闘不能になった場合そこで戦闘不能にした方の勝ちとします」

ここ、ニビジムの会場には熱気が集中している。そして敵意も集中している。私にだ。

バトルに参加してなかった観客は期待と困惑が入り混じった表情を見せている。そして予選を通過できなかった挑戦者たちやニビジムの精鋭たち2/3くらいはいかにも「気に入らない」といった不満をこれでもかと露わにしている、残りは面白そうな顔をしていた。

しかしそんな視線を気にしてはいられない。ズルだろうが何だろうが、私は切羽詰まっているんだ。主に追手という意味で。

「試合、開始！」

審判の旗が始まりを告げ、イワークとコーヒープリンが互いに動き出した

「ジムの開放日？今日やけど」
「はあっ!？」

のほほんと重大な事を言っただけのカスムに、心身ともすっかり回復した私はカスムにもすごい勢いで詰め寄る。

「え、ちょ、いつから!？もう始まってらんじゃ……!」
「ほれ」

カスムは一枚の紙を私の目の前に突きだした。

『来たれ挑戦者！
ニビシティジムリーダー・タケシが受けて立つ!!
ジム開放日程

日時：x月21日 12時～14時受付で予選を行います。

参加資格：腕に自信のあるトレーナーだったら誰でも歓迎します。

ニビシティジムの場所は……』

部屋の時計とカレンダーを泣きそうな顔で睨みつける。

“x月21日 15時03分”

「もう予選終わっとらんちゃうか？」

「まだ間に合うまだ間に合う！まだ間に合うっ！！」

ジョーイさんに心配されてポケモンセンターに泊まれたのが幸いした。ポケモンセンターは重症のトレーナーとポケモンがでた時のため、一応トレーナーも泊れる部屋がある。ポケモンセンターは基本的にジムからもそう離れていないので走れば間に合うはずだ。

私が慌ててコーヒープリンとメロンパンの入ったモンスターボールを掴んで部屋を飛び出そうとすると、カスムがコーヒーを飲みながらポニーテールを引っ張った。

「痛い痛い痛い！なんで髪ばかり引っ張るの！」

「そりゃ掴みやすい位置でびよこびよこ動いとるからやないの？」

「はーなーしーてーっ！私には今すぐジムに飛び込むという使命があるの！！」

「その前にちゃんと昼飯全部食いや。残したらアカン」

もっともなので私は席に着き直してだいぶ遅い昼食をかつこんだ。口をご飯でいっぱいにしながらカスムに目で抗議する。カスムは肩を竦めて見せた。

「あんなに気持ちよさそうな顔で寝てたら、起こす気なんてわかへんよ。全身切り傷だらけでだいぶ疲れ取ったみたいやしな」

それはそうなんだけど、今はその心使いが仇となっている。いや頭の良いカスムの事だから、私がジム戦をするつもりである事くらい、予想は出来ていたのではないか？

疑うようにジト目でカスムを見詰めると、カスムは笑顔でのたまった。

「ま、黙っというてギリギリで起こした方が面白そうってのもあるん

やけど」

やっぱりかこの野郎オオオオツ!!

私は昼食をお茶で胃に押し流すと、今度こそモンスターボールを引っ掴んで部屋を飛び出した。ポケモンセンターを出て、ニビジムへと走る。

ニビシティはだいぶ復興が進んでいるようで、ほぼ元の街並みへと戻りつつあった。四天王事件直後の半年かそこらはどのジムもジム戦どころではなかったが、ちょうどキリヤカスムが旅だった頃合いからジムを再開し始めている。

町の住民は観戦に行っているのか疎らになっていて、私は地図を握りしめてニビジムへと急ぐ。

“GYM ニビシティジム”

入り口の文字を横目で確認してジム内部へと続く道を走り抜けた。熱気のもった空気と落胆を含んだ観客の声。アナウンスが途切れ途切れに聞こえてくる。

『では、今回の 戦権を得たものは無し 終

了しま 』

「待ったーッ!」

通路を抜けきったところで声を張り上げて叫んだ。観客やアナウンサー、ジムの人間の視線が私に突き刺さった。たじ、と後ずさりしかけたが、勇気を振り絞って名乗りを上げる。

「マサラタウンのユズルです!ジムリーダー・タケシに挑戦しに来ました!」

「マサラタウン？」

私の言葉に、タケシさんが眉をピクリと動かした。

「まさか、トキワの森を抜けてきた訳じゃないだろうな？」

「え？抜けてきましたけど……」

「何！？」

タケシさんが信じられないと言った顔で開眼した。観客たちは「タケシさんが開眼したぞ！」「本当だ！開眼だ！！」とざわめく。

「トキワの森は、少し前に誰かがウツボットやウツドンを大量に離れたから危険な状態なんだぞ！？何を考えてるんだ！」

「え？うそ！？そんなの初耳だよ！なんか変だなーとは思ってたけど誰がそんな余計な事をしたんだ！！おかげで死ぬかと思ったよ！！」

「よく生きてこられたな……しかし予選は終わっている。次の機会にしてくれ」

タケシさんが残念そうに告げたが、ここで引き下がるわけにはいかない。私は90度に頭を勢い良く下げたお願いした。

「お願いします！戦ってください！！時間がないんです！！」

いつキリがニビにやって来るか分からない。カスムはあの通りだし、かばってくれるか怪しいところだ。ジムバツジを手にするくらいしかキリに認めさせる方法が、私には考えつかなかった。

ぶっちゃけあんな逃げかたしたから次に会うのが怖いんだよ！

「……そこらじゅう傷だらけのところをみると、本当にトキワの森を抜けてきたようだな」

「嘘ついてどうするんですか。おかげで一着雑巾にしなくちゃいけなくなっただんですよ」

タケシさんは口元に手を当てて数秒黙考すると、ニヤリと笑ってみせた。

「面白い。条件次第では、予選なしで俺が相手してやるぞ！」

タケシさんはそういうと、ジムリーダー控えの席の窓を開け、モンスターボールをリングに投げる。モンスターボールは空中で軽やかな音を立てて開き、イワークが巨体をくねらせながら飛び出した。

「お前が勝つたら望み通りグレーバッジをくれてやるう」

「そ、それはずるくないか!？」

「そうだ! 予選もやらずになんてずるいぞ!！」

タケシさんがひらりとイワークの頭に飛び移ると、イワークは頭をリングにつけて、タケシさんを下ろした。私も道を開けた観衆の間を走ってリングへとよじ登る。

タケシさんは文句を言ったトレーナーたちに開眼したまま問いかけた。

「ならお前たちの中に、今のトキワの森をくぐり抜けてくる度胸のある奴はいるか？」

彼等からの返答は沈黙だった。タケシさんは満足そうに静かになったトレーナーたちを見渡すと、リングに上がった私に視線を戻す。

「これより、特別試合、ニビジムジムリーダー・タケシVS挑戦者ユズルの試合を開始します」

審判員が宣言する。緊張が高まった。

「使用ポケモンは二体の入れ替え戦。ただし一体でも戦闘不能になった場合、そこで戦闘不能にした方の勝ちとします」

ルール上メロンパンも使えるが、トキワで久しぶりに活躍してくれたメロンパンをあまり無理させたくはない。できるだけここはコーヒープリンで決めないと。

「試合、開始！」

審判の旗が始まりを告げ、イワークとリンがお互いに動き出した。

「まずは小手調べ。イワーク、いわとばしだ！」

イワークが口から大小様々な大きさの岩をコーヒープリンに向かって飛ばす。私はコーヒープリンに向かって指示を飛ばした。

「避けてリン！」

コーヒープリンは岩を最小限の動きでよけながら隙を窺う。流石スパイアーだけあって素早い。コーヒープリンとアイコンタクトを交わしながら、拳を握りしめた。

「どくばりー！」

コーヒープリンの右針から針が3本発射される。高速で飛来する銀色の凶器は、的確にイワークの頭を狙ったが、硬い岩肌を通る事が出来ず、高い音を立てて跳ね返されてしまった。

「何!?!」

「無駄だ。俺のイワークに、生半可な攻撃は効かないぞ!」

イワークは全くダメージを受けた様子がなく、そのままギラギラとした目でコーヒープリンを睨みつけた。タケシさんがコーヒープリンを指でさして叫ぶ。

「ロケットずつき!」

「いとをはく!」

コーヒープリンはロケットずつきをくらって、コーヒープリンがリング上に叩きつけられる。大きな音を立ててコーヒープリンは仰向けに倒れたが、瀕死にはならなかったらしくよろよろと浮かび上がった。

「あの距離で僅かに直撃を免れたか。さすがに」

「ゴ、ゴ……ゴオオオオオツ!!」

「どうしたんだイワーク!?!」

余裕綽々のタケシさんだったが、イワークの様子が変だと気がついて戸惑った。私はその間にコーヒープリンに駆け寄って抱き上げる。

「ありがとう、リン。休んでてね」

モンスターボールの真ん中から赤い光が出てコーヒープリンを包

み込み、モンスターボールへと戻っていく。メロンパンの入ったモンスターボールに持ち替えて、私はぐっとイワークを見上げた。

「まさかさっきの“いとをはく”は……ッ！」

「メロ、お願い」

タケシさんの焦った問いかけに答えず、私はメロンパンを出した。メロンパンはやはりからにこもったまま出てこない。人の気配が多すぎて、出るに出不らねないのだろう。

メロンパンのためにも、コーヒープリンの為にも、この一戦で決める必要があった。

けどこの様子では、戦闘すらできそうにない。

「ゴオッ！オオオオオオッ！」

「メロンパンッ！」

暴れるイワークの尾が当たり、メロンパンが吹っ飛んだ。私は飛び込んでメロンパンを抱きとめる。すさまじいパワーに、抱きとめた後リング上をすべって、受け止めた服に焦げ跡を残して止まった。メロンパンにダメージはなかったものの、どうすれば勝てるのか

ん？待てよ、回転？

「……これだ！」

ピンときた私は、目に張りついた白い糸が取れかけているイワークに向かって、思いつきメロンパンをブン投げた。メロンパンは高速で回転しながらイワークに向かっていく。

すべてがスローモーションのように感じられた。予想外の行動にざわめく観衆、驚愕に目を見開くタケシさん、空中を滑らかなカーブを描きながら滑空していくメロンパン。

「な!?!」

タケシさんの声も、観衆の声も、もう私には聞こえていない。ただまっすぐに、魂の底から声を張り上げる。

負けられない。私達は、立ち止まってなんていられないんだ!

「いつけええええっ!! スピンアタアック!!」

岩と甲羅がぶつかり合い、衝撃音がジム中に響き渡る。

私の思いに同調するかのように、イワークの顎に小気味よくストライクしたメロンパン。衝突後は落下を始めたが、あの高さくらいだったらメロンパンの甲羅はびくともしないから大丈夫だ。

「オ……オオオ……」

観客も、タケシさんも、そして私も無言で見守る中、イワークがユラユラとその巨体を左右に揺らす。ここにいるすべての人間がバトルの結末を待っていた。

「オオ……ン……」

「イワーク!」

イワークは揺れが大きくなっていったかと思うと、タケシさんが悲痛な叫びをあげる。同時にイワークは目を回して倒れてしまった。重い地響きとともに私の体も短く揺れ、かすれた声が喉の奥から無意識に飛び出した。

「か……っ た……？」

私でさえも信じられない思い出イワークとタケシさんを交互に見やった。審判員がイワークを5秒ほど見詰めていたかと思うと、サッと私の手を取って宣言する。

「勝者、マサラタウンのユズル！」

オオオオオオオオオオッ！！

一瞬の静けさの後、大歓声がジムを震わせた。

まだ勝った事が信じられず、回復を待っている間ポケモンセンターの部屋でぼうつとしていると、カスムが部屋の扉を誰かがノックした。

「入るで」

了承を得る前に部屋に上がり込み、向かいの椅子に腰かけるカス

ム。楽しそうに私に話しかけてきた。

「ジムバッジゲットおめでとーな。最後のは狙ってやったん？」

私はグレーバッジを見て、ニヤニヤしながら答えた。

「うん、だいたいあの角度から当てれば脳震盪起こして気絶するだろーな」と

「とんでもない事思いつくなあ。それに“こうそくスピン”なんてよく知ったね」

カスムがしきりに感心したように頷くので、私は眉を寄せて問い返した。

「“こうそくスピン”？ 何それ」

「……知らへんやったのかーいっ！」

「あてっ！」

カスムが思いっきり私の頭にチョップをする。

こうそくスピンなんて技初めて聞いたんだから仕方ないじゃないか。何故私がチョップをされなければならぬんだ。

カスムは頭をさすっている私に対して、“こうそくスピン”とやらの説明を始めた。

「ええか？ こうそくスピンはジョウトではポピュラーな技やけど、カントーではあんまり知られてないねん。審判のおっちゃんもちやんとした技やからOKだしてくれたんや」

「へー、そんな技あったのか」

「反応薄ッ！……と、そういえばキリを見かけたで」

「何ッ!？」

「お、ええ反応」

のんびりとしているカスムを尻目に、私は急いで鞆に出したものを詰め、メロンパンとコーヒープリンの入ったモンスターボールを腰につけた。忘れ物がないか確認すると、一刻も早くニビシテイから脱出すべく、部屋を飛び出していく。

「待ちいや」

「ぐえっ」

飛び出そうとしたが、カスムが服の襟を掴んで引きとめた。首が！息がッ！！

「そのままハナダ目指しても、すぐ見つかるやろが。別のルート行ったらどや」

「けほっ、……別ルート？」

私が立ち止まってカスムを肩越しに振り返ると、カスムは襟を離して片目をつぶって見せた。

「そや。トキワからクチバを繋ぐ、ディグダの穴のことやねん」

To be continue ?

第五話 ニビシティ 後編（後書き）

この話はいつもより時間がかかってしまいました……。けど書き上げるのができて良かったです。

タケシがアニメのタケシと比べると当社比二倍くらい格好良くなってる気がする。何故だ。

閑話 闇の中で・そのいち

ふわふわとした感覚が、全身を包んでいた。寒くもなく、暑くもなく、何とも言えない空気が心地よい。

私は目を覚ます。何も無い空間、何処までも続く闇。

無音。

「……来たか」

静かで、透明感のあるテノールが響いた。私は声の主を探してゆつくりと周囲を見渡す。

ちょうど5・6歩離れた所に、私よりもずっと背の高い青年が腕組みをして立っていた。キリと同じ金髪だが、全く焼けていないために現実感が無い色をしている。何処までも澄み切った金色の短髪に、鋭い細めの真つ赤な瞳。長い黒の細布を額に巻き、残りの布を背中に垂らしていた。

「黒と黄色好きなんですか？」

青年の服は、黒と黄色の二色しか使われていない。どんだけ好きなんだ。

「あなたのイメージ上、こうなっただけだ。別に好きという訳ではない」

青年は淡々と答えた。私は首を傾げて青年に尋ねる。

「イメージ、ですか？」

「敬語は使わなくていい。あんたが俺に敬語を使うと、違和感がある」

青年はそういうと、無表情のまま私の右腕を取って歩き始めた。

「……」

「ちょ、ちょっと！何処に行くんですか！貴方は誰！？」

歩幅の違いで転びそうになりながら叫ぶように問いかけると、青年は足を止めて肩越しに振り返った。静かな迫力のある青年の視線に、冷や汗が流れる。

「使うなど、言ったはずだが」

「え、あ、はい。……じゃなくて、うん」

それだけ言うと、また容赦のない歩幅で私を半ば引きずって歩く話しかけづらい雰囲気気を重くしながらついて行くと、白い塊が見えてきた。青年はその塊の前で立ち止まると、私の腕を離してその場に正座する。

「座れ」

大人しく向かいに座って、私は訝しげに白い塊をしげしげと眺める。

いや、白い塊と言うより、これは

「何故布団がここに……」

ふかふかの白いシートが眩しい、既に何かが包まっている布団だった。

「あるんだから、仕方ないだろう」

あいも変わらず淡々としている青年を横目に、布団をつんつんとつついてみる。つつくことにビクンビクンといい反応が返ってきたが、何だか可哀想になって布団をやめた。

申し訳なく思っただけ謝罪しながら布団のふくらみを撫でる。

「突いてごめんね」

すると布団の端から手が！

「うおおおおおおおッ!?!」

あ、引っ込んだ。

「手？手が出た……なかに入ってるのは人なのか!?!」

びつくりして悲鳴を上げるとすぐに引っ込んだが、中に入ってるのが人である事は間違いないだろう。現に青年も、うるたえる私に向かって頷いた。

「人だ。もう一度撫でてみるといい」

言われた通りにふるふるしている塊を撫でる。私もだいぶ驚いたが、むこうさんも驚いた事だろう。精一杯の慈愛の精神を込めて撫で続けると、震えが収まって、今度はおずおずと言った感じで手が布団の端から出てきた。

その手をがしつと即座に握る青年。

「ふ……ッ！」

「っ！？わあああああああああつ！！！」

気合い一発、悲鳴を上げる少年を布団から一本釣り。

少年が釣り上がると、青年はすぐに手を離れた。手は離された少年は高速で布団の中に帰っていく。布団は今までとは比べ物にならない程ガタガタと震えていた。

啞然としている私と、何事も無かったかのように姿勢を正す青年。

「人だっただろう」

「君何してんのおおおおっ！？」

私は目にもとまらぬ速度で青年にツッコミを入れた。青年は「訳が分からない」と言った顔で不満げに私を見る。

「実際に見た方が話が早い」

「いや確かにそうだけどっ！物には順序と言うものがあるよね！？」

数秒見えた少年は、チャックのついた真っ青なローブを着て、フードを目深にかぶっていた。でか過ぎるフードのせいで顔は見えなかったが、背丈は私とそんなに変わらなかった様に思える。

「ひきもって出てこないんだ。待っていたら何年かかるか分かった物じゃない」

「傷が！心に深い傷が！！」

ひきこもりを一本釣りするなんて、なんて恐ろしい事をしでかしてくれたんだこの男は！今のでこれからのひきこもり期間が延長さ

れた気がするよ!!

同じひきこもりを抱える身として他人事とは思えず、私が少年の行く末を案じて涙を流していると青年が声をかけてきた。

「おい、あなた」

「あなたじゃないよ。ユズルだよ」

「……ユズル、あなたをここに呼んだのは、言っておきたい事があるからだ」

ムツとして訂正すると、青年は言い直して鋭い眼差しで私を貫いた。

「呼んだって……ここはどこなの?」

「あなたの夢の中だ」

「夢?」

私は脳裏に閃いた可能性に、ゴキブリも真つ青な速度で後退りする。

「まさかユーレイ!? 君幽霊なの!?!」

「近いが幽霊ではない。帰ってこい」

ホツと胸を撫で下ろして、ずるずると戻る。幽霊では無いってことは、何故夢に出てくる事が出来るのだろうか。

「……あなたも色々聞きたい事があるだろうが、時間が無い。次にいつこつやって話す事が出来るかも分からない」

私の疑問を感じ取ったようで、青年が先回りして言った。私はその言葉に慌てて青年に飛びついた。しかし青年の身体と布団は、段

々と深くなつていく闇に溶けるように消えていく。

「待つて待つて！まだ聞きたい事がいっぱいあるんだよ！」

ここが夢の中である事は分かった。しかし何のために私に会いに来たのか、この二人が誰なのか、何故夢に現れる事が出来るのか、全然分かっていないし、私はこの二人の名前すら聞いてない。

「よく聞け、ユズル」

真剣な顔で私を見つめる青年に、神妙な顔で頷く。静かに言葉の先を待った。

「この先何があるとも、旅を続けてくれ。頼む」

「言われなくても続けるよ！」

私が間髪いれずに応えると、青年はそこで初めて私に微笑みかけた。その身体が薄くなつていくとともに、私の目蓋も重くなつていく。その重さに必死で抗いながら意識を保っていると、青年は最後にこう言った。

「俺の名前はコーヒープリン。あんたから貰った名前だ」

……………は？

何だか色々と台無しにしてしまったような気がしながらも、私の意識は闇に沈んでいくのだった。

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
. . . .
?

閑話 闇の中で・そのいち（後書き）

今回は閑話ですので、いつもの半分くらいの長さになっています。
閑話は5話ごとに入れていこうと思ってますよ。本編の方はちゃんと同じくらいの長さで続けるので大丈夫ですよー。

第六話 デイグダの穴

「……変な夢見た」

私はぐつと伸びをすると、寝袋からもぞもぞと這いだす。洞穴の中は暗く、コーヒープリンの赤い複眼ははっきりと見える。

ここはデイグダの穴の中だ。あのままニビシティにとどまっているとキリに見つかる可能性が高かったので、カスムと一緒にデイグダの穴の中で一晩泊る事になった。デイグダの穴の存在を知っている人はあまりいないそうで、そんなに人が通る訳でもないから堂々と狭い穴の中に寝袋を敷いて寝た。デイグダの穴は、穴を掘るのが習性であるポケモン、デイグダが掘ったトンネルの事である。そのまんまだ。

寝袋の横に置いておいたランタンのスイッチを入れ、穴の壁になんともいえない影を作っているコーヒープリンに朝の挨拶をする。

「おはよー、リン」

「……」

コーヒープリンは無言で首肯した。その姿をまじまじと私は見詰める。

「……まさかね」

独り言を呟いて寝袋の中から上着を取りだして着た。夢だったにせよ、夢でなかったにせよ、たとえ頼まれたって私は旅を止める気はない。何を考えてコーヒープリンが私に「旅を止めないでくれ」と言ったのか、その真意は分からない。これが夢でなかったのならば、またコーヒープリンは夢に現れるだろう。

私はもう気にしない事にして、リュックの中から朝ごはんのおにぎりと水筒を取り出す。昨日ニビシティを出るときにフレンドリュシヨップで買っておいた。おかずは梅干しと昆布だ。

パリパリの海苔を巻いて食べていると、カスムもあくびを噛み殺しながら寝袋から這い出てきた。

「くあ……おはようさん。昨日とは違って今日は早起きやな」

「昨日あれだけ寝れば早起きにもなるよ」

「そか」

カスムも自分のリュックサックから、私と一緒にフレンドリュシヨップで買ったサンドイッチを取り出して食べ始める。卵とハムのシンプルなサンドイッチ。私はおにぎり、カスムはサンドイッチに紅茶と、随分対照的な朝ごはん風景になった。

おにぎりを食べ終わると、寝袋の中で一緒に寝たメロンパンを取りだしてから、寝袋を圧縮して小さくする。折り畳み傘サイズまで小さくなったそれをリュックの中に詰め込み、メロンパンとコーヒープリンの分のポケモンフーズを用意する。

「ご飯だよー」

「スピ」

「ゼニ」

フレンドリュシヨップで買っておいたものだ。フレンドリュシヨップは主にポケモン関係の道具を色々売っている便利な店だ。いずれは自分で調合出来るようになりたいが、今は市販品で我慢してもらおう。2匹が仲良く食べてるのをほほえましく眺めた後で、いつもの日課を始めた。

「あつたらしい、あつさがきた！きーぼーうのーあーさーだ！」
「元気やなあ。若いもんにはついてけんわ」

私より、2か月程度しか年上でないはずのカスムはおっさんくさい事を言った。その言葉を無視してのびのびと体操を終え、髪を高く結う。カスムはその様子を寝袋を圧縮しながら眺めている。

「ポニーテール以外はせえへんのか？」

「イエローさんと同じにしてるからしないよ」

「相変わらずイエローさんのこと大好きやな」

「変わらへんなあ」と水筒のコーヒーを飲んでいるカスムに、私は満面の笑みで答えた。

「もちろん！グリーンさんやブルーさんも尊敬してるよ！」

「でもって一番好きなのは？」

「当然レッドさん！」

「ほんまに変わってないわ」

グリーンさん、ブルーさん、レッドさんはそれぞれオーキド博士から図鑑をもらって旅に出た、凄腕のトレーナーだ。3年前のロケット団壊滅だつて大きく貢献した。イエローさんは四天王事件の時にあのチャンピオンワタルと戦つて勝利したトレーナーで、事件解決にも深く関わっている。

図鑑というのは、オーキド博士がポケモンの研究の為に渡したものだ。捕まえたポケモンのデータを勝手に記録してくれるもので、凄くハイテクだからそんなに数は作れない。そんな貴重なものを渡されたということは、それだけ凄くトレーナーだという事だ。そしてロケット団はポケモンを悪いことに使おうとした人たちの事で、その組織で一番偉い人をレッドさんが倒し、ブルーさんとグリーン

さんが協力した。ブルーさんとグリーンさんはレッドさんの友達であり、グリーンさんはライバルでもある。

そしてイエローさんはレッドさん達の後輩みたいな人。四天王事件解決の中心人物だ。

「むしろレッドさんに至っては、憧れないトレーナーなんていないんじゃないの？」

若干11歳でセキエイリーグチャンピオンに輝いた訳だし。

「キリはだいぶ嫌ってるみたいやけどな」

「あー……」

キリは何でか知らないが、レッドさんの事が嫌いだ。カスムの事も嫌いだとよく宣言しているが、レッドさんに負けては特訓して再挑戦、負けては特訓して再挑戦を繰り返し、旅に出るときの言葉は「セキエイリーグに優勝して、今度こそお前に勝つからな!!」だった。一体何が原因なんだろう。

「カスムはどう思ってるの？」

「普通にええ人達やと思うとる。あんなにええトレーナーはなかなかおらへんからな」

カスムは私の質問に答えながらコーヒーを飲み終わると、ポケモンフーズの準備をした。

「飯の時間やでー、みんなでてきてーな」

カスムが空中に四つのモンスターボールを投げる。音を立てるモンスターボールの中からは、フシギソウ、バタフリー、ピカチュウ、

ウインディが飛び出す。私はフシギソウに駆け寄った。

「久しぶり、進化したんだね」

「バナバナア」

擦り寄って来るフシギソウに、私はその顔をわしゃわしゃと撫でてやる。フシギソウはフシギダネの頃にオーキド研究所にいたポケモンで、カスムが旅立つときに博士からもらっていた。研究所に手伝いに通っていた私はフシギダネの時から顔見知りになっている。

「バタフリーとピカチュウはトキワの森で捕まえたの？」

「あー……バタフリーは捕まえたって言うよりも、保護したって方が正しいで」

「保護？」

私が眉を寄せると、カスムも同じような表情をした。

「なんやキャタピー狩りのな事がその時おこっとってな。トキワの森から命からがら『助けてくれー!』ゆうて飛び出して来たんで助けたんよ。トキワの森に帰る訳にもいかへんから、そのまま連れになったちゅー訳よ」

「犯人は？私が今すぐ始末してくる」

「あほ。今のお前が敵う相手やあらへん」

怒りに燃える私の頭を軽くはたいて、カスムがその先を続けた。

「俺も犯人何とかしたる思たんやけど、これがまたえろっ強いねん。なんとか追い返したけど、お前が倒せる相手やない」

「やってみなくちゃ分からないじゃないか!」

「意気込むのはええけどな。なんとかしたいんやったら、実力を見

極める事も大切やで」

「う……」

「根性だけで勝てるんやったら、誰も苦労せえへんのや」

「うん……」

カスムの妙に説得力のある言葉に、私は大人しくなった。そこでふと思いついて、カスムに訊ねる。

「カスム、そういえばカスムはジムバッジいくつ手に入れたの？」

「0個や」

「へー、0個……って、0!？」

「そうやでー」

思いがけない言葉に私は混乱しながらカスムに詰め寄った。

「ど、どうしたの？何かあったの？」

「どうどう、落ち着きや」

カスムは混乱している私を宥めると、理由を語りだす。

「俺はジムバッジとかセキエイリーグとか、ぶっちゃけどうでもええねん」

「え？じゃあなんで旅なんて出たのさ」

「見分を広めて悪い事はないやろ。それに俺元々戦うの嫌いやし」

カスムは昔からそうだ。争いごと嫌い。戦い嫌い。だから仲裁役をよくしていた。

私はカスムの言葉に、ポケモンフーズを食べ終わったカスムのポケモンを見渡した。ポケモン達はみんな、こっちまで幸せになれそうなほどカスムに懐いていて、カスムはポケモンハーレム状態だ。

その様子に予感がした私は恐る恐る質問する。

「じゃあもしかしてこのポケモン全部……」

「成り行きで一緒になっただけやな。欲しくてバトルした事なんて一度もあらへん」

「ええええええええええっ!?!」

予想通りか! やっぱりなのか!

フシギソウとバタフリーは分かったとして、私はまずピカチュウを指差した。ピカチュウは「チャアー」と言いながらカスムの右肩に乗ってカスムにほっぺたをスリスリしている。

「ピカチュウは?」

「卵から孵化した時、欲しいのと違っとなみたいでなあ。ピチューの時レベル1で呆然としとるとこ拾った」

カスムは手慣れたようにピカチュウの頭を右手で撫でた。ピカチュウは蕩けそうに幸せな顔をしている。

次にウインディに視線を寄こした。ウインディはクールに決めて寝そべっているが、カスムの足元で寝そべっている上に、尻尾がぱたぱたカスムの足を触っているから分かりやすい。

「ウインディは?」

「いつまでたつてもガーディが進化しなくて、いらついた馬鹿が捨てたせいで暴れとるのを捕獲した」

「進化してるけど」

「捕まえてしばらくは暴れとつたんやけど、腰据えて説得したらなんやふつきれたみたいでなあ。ウインディに進化した」

やっぱりウインディも、カスムが頭を撫でると無言で気持ちよさそうに目を細める。

「ポケモンハーレムが今ここに……」
「なんでやねん」

カスムがピシッと突っ込みを入れるが、フシギソウ以外からそこはかたなく「俺達の主人に気安く近づくんじゃねえぞゴルア」という雰囲気が漂ってきている。だからハーレムで正しいはずだ、うん。

まあ普通のハーレムと唯一違っている点と言えば、カスムがポケモン達からの好意をバッチリ自覚しており、この状況に頭を抱えているという点なのだが。

「モテモテだね！カスム」
「何気に困つとるんやけどな……はあ」

カスムがため息をついてポケモン達をボールに戻して行く。それにならって私もメロパンをボールに戻してランタンを右手に持った。コーヒープリンはボールに入れたがらないので戻さない。なぜかボディーガードをしてきているようなのだ。

「真面目だなあ……もっと肩の力を抜けばいいのに」
「……」

「そいつはどうやって出会ったん？ずっと気になっとなんやけど」
そういえばまだカスムに紹介してなかったと思い、私はコーヒープリンをカスムの前に呼んだ。

「名前はコーヒープリンで、略称はリン。トキワの森でウツドンの

生贄になりかけて逃げ出した時に、逃げた先で暗殺者のごとく奇襲を受けたけど、最終的にメロンパンで殴ってゲットしたよ!」

胸を張って説明する私に、カスムは苦笑いする。

「他人が聞いたら卒倒しそうな出会いやなあ。よお生きとつたわ」
「でもご飯集めてくれたし、進んでボディージャー……ッうわ!？」

コーヒープリンのフォローをしていると大地が大きく揺れて、思わずコーヒープリンに抱きつく。

「……ここら辺はイワークが通らんはずや」

カスムが眩くと同時に揺れがますます強くなり、ついに立ってられないほど揺れ始めた。ディグダ達も焦ったように土に飛び込み、内壁が落ちてくる。

「こりゃアカン。バタフリー!」

カスムが警告すると、何かが近づいてくるような音が聞こえ始めた。カスムはバタフリーに身体を掴んでもらって舞い上がり、私はコーヒープリンに抱きついたままだ。

「ゴオオオオオオオオオオツ!」

「わあああああああつ!何か来たー!」

咆哮と共に横壁を崩して現れたのは、イワークっぽいけどイワークじゃなかった。ランタンの光を反射して光る頭。突き出た顎に、イワークよりよっぽどごつごつとした頭の、はじめて見るポケモンだ。だいぶ興奮しているようで、そのポケモンはギラリとこちらを

ロツクオンすると口に炎のようなものを溜め始めた。

それは一瞬の攻防戦だった。

「ゴオツ！」

「サイケこうせん！」

見た事も無いポケモンが竜の息吹を吐き出すと同時に、バタフリーが虹色の光線を発射する。息吹と光線が相殺し合い、弾きあつた部分が輝きながら内壁を照らしあげた。

お互いが技と技を消され、穴の中に静けさが戻る。バタフリーは銀色の燐粉を纏いながらカスムの前に佇み、ポケモンとにらみ合っている。

「……………」

「……………ゴオ……………」

数秒睨みあっていたかと思うとポケモンは、ゆっくりと瞼を閉じて、寝入ってしまった。私はカスムに駆け寄っていく。

「カスム！」

「ふう。何とかなつたみたいやな」

どつと疲れたようで、カスムはその場に座り込んだ。カスムは恐らく、アイコンタクトだけでバタフリーに指示を出しておいたのだろう。技が相殺されたらすぐに、“ねむりごな”を放つ様にと。私は効果が出てぐうぐう寝ているポケモンの頭部を見て、眉を寄せた。

「このポケモン、初めて見るけど…………カスムは知ってる？」

「こいつはハガネール…………何処の馬鹿がカントーで放したんや、

まったく」

カスムは文句を言いながら立ち上がり、モンスターボールを投げた。しかしモンスターボールは跳ね返され、カスムは眉間の皺を深くする。

「なんや持ちポケか。危ないで一時的に捕獲しとこ思たんやけど…
…ちよつと先にいつとてくれへんか？俺も後から行くから、出口で待つとつてや」

カスムの言葉に無言で頷いて、私はコーヒープリンから降りて走っていった。

「ただいまー」

「お帰りー」

出口で待っていると、予告通りカスムが帰って来た。晴れ晴れとした顔をしているところから、ハガネールのことは上手く片付けたのだろう。

「ハガネールにはお帰り願ったわ。納得もしてくれたで」

「ふうん、ならいいけど……」

カスムがポケモンをどうやって説得しているのか分からないが、カスムが説得したというのならばそうなのだ。説得しているところを見られたくないらしくて、いつも一人で行っているが、あとでポ

ケモンに確認すると確かに納得している。

カスムの謎の一つである。

「カスムって謎が多いよね」

「男は謎が多いほど格好よくなるんや」

訳が分からん。しかし、カスムなりに「訊いてほしくない」と暗に言っているのだろうと、私はそれ以上詮索せずにカスムと穴の入口を離れてカスムに先導されていく。

カスムは少し進んでクチバが見えると、両手を広げて笑顔を見せた。

「ここがあんさん待望の、クチバシティや！」

「おおーっ!!」

目の前に広がる港町。私は歓喜の声でカスムに拍手を送る。笑いながらクチバへと歩いていくカスムの背中を追いながら、私は胸をときめかせる。

きつとこれから先、まだまだ知らないポケモンにたくさん出会って行けるのだろうか。

To be continue……?

第六話 デイグダの穴（後書き）

カスム活躍しすぎじゃね？キリが負けてます……。おかしい、本当はこんなに出番なかったのに……。カスムマジックですかね？

第七話 クチバシテイ・前編

「えーこれより、クチバジムジムリーダー・マチスVS挑戦者のバトルを開始します」

ワアアアアアアッ！！

カスムが宣言すると観衆が大きな声援を上げて応えた。クチバの町民・通りすがりのトレーナー・マチスさんの船の乗務員などなど、他にもサントアンヌ号から騒ぎを聞きつけて降りてきた人たちもいる。

観衆が円を描くように取り囲んでいる中、中心に対峙しているのは私と一人の男。迷彩の軍人服に皮のグローブとブーツ。引きしまった大柄の体格に刈り込まれたツンツンの金髪で、黒いサングラスをかけている。

空は快晴。雲ひとつなく、風も穏やかな絶好のバトル日和。

だというのに、目の前の男 マチスさんは顔を手で覆って脱力していた。

「Shit! 何でこんな事になってんだか……」

そんなマチスさんに、カスムがのほほんと告げた。

「諦めが肝心や言いますし、こいつに捕まっただんが運の尽きや思て下さい」

「お前もこいつのツレなら止めねえか！なに協力してんだ！」

「面白い方へ流れるんは、人の常やと思いまへんか？」

「fucking kid! 最近のガキの躰けはどうなってんだ
!!!」

マチスさんが青筋を立ててカスムに怒りをぶつけたが、カスムの言葉に周りの人たちは仕切りに頷く。マチスさんはガリガリと頭を掻き毟った。

「マチスさん!腹を括ってください」

私がマチスさんに向かって真剣に訴えると、マチスさんは唸った後にちゃんと向き直してくれた。

「分かった分かった!相手してやるさ。かかってきなIitttle
girl!」

「りとる・がーる?まあいいや!行きます!!」

ジム戦が、始まる。

「サント・アーンヌごーう!ひゃっほーう!!」

「テンション無駄に高いなあ」

私はクチバについてまず最初にした事、それは

「カスムー!カスムー!」

係船柱又はビットに足をのせる事である。平たく言うなら船着き

場にある、足をのせたくなる出っ張りの事だよ！

「へーい！」

指を顎にあてて決めポーズをすると、カスムは鼻で笑って私を指さした。こう、「ビシッ！」と効果音がつきそうな感じで。

「……甘いッ！コンデスミルクに砂糖と蜂蜜ブチ込んで煮詰めるよりも甘いであんさん！」

「そんなにつ！？聞いただけで吐きそうになるほど甘いよ！」

カスムは宣言すると、近くにあるビットに片足を乗せ、私と同じポーズを取って見せた。しかしポーズは一緒でも、何かが決定的に違うと感じさせるその空気。

「そのポーズは　　こうやるんやっ！！」

「なん……だと……っ!？」

足の乗せる位置、曲げる角度、腰にあてた手に、顎につけた手の形。その全てが美しく、完璧に見える。カスムは歯を光らせて私に告げた。

「どれをとつても申し分ないはずや！アマちゃんは引っ込んでくんなー！」

「ま……負けた……！」

膝を屈する私。敗北に唇を噛んでいると、影が差した。

目の前に立っているのは、カスムだった。

「あんさんはまだ発展途上や……これから磨いていけばええんちゃ

うか……?」

「カスム……いえ、師匠!」

カスムから差し出された手に、私はうるうる瞳を潤ませて

「スピツ!」

「あたーツ!」

手を重ねる前に、コーヒープリンの手痛い突っ込みの針を受けた。

私が痛み悶絶しながら転がっていると、カスムは甚く感動したようで、コーヒープリンに拍手を送る。

「おおっ! ナイス突っ込みや。こんなにええ突っ込み見たんは久しぶりやで」

「くおおおおおお……痛い……ッ!」

「ごろんごろん転がる私と、笑顔で拍手を送り続けるカスム。コーヒープリンは無言で私を見下ろしていた。

「やっぱ突っ込みのキリがおらんと、ポケ重ねになってしまらんなあ。リンゆうたか? あんさんおってほんまに良かったわ」

「うつつ……トレーナーに容赦なく手を上げるポケモンで……。嬉しいような悲しいような……」

「ええやん。遠慮のない関係ちゅーことで。……ん?」

涙目で立ち上がって頭をさする私を尻目に、カスムは目を細めてクチバの港を見つめた。ビットの上に立って、背伸びをしながら遠くを観察している。

「今船に乗ろうとしとるの、マチスさんちゃうか？」

「どどこどどこどこ!？」

「ほれ、あれや」

カスムにビツトを降りてもらって、代わりに乗って目を細めた。するとカスムが指差した先には、確かに今正に船に乗り込もうとしているマチスさんの姿が!

「出かけるとこみたいやなあ。このままだとバトルできなく……は？」

カスムが残念そうに言う時には、私は既にそこにはいなかった。マチスさんに向けて全速力で走りだしていたからだ。

「マーチーサーサーンツ!後生ですから待つてくださあああああ
いッ!！」

「うわっ! なんだなんだ!今どっから現れた!？」

ぱつと見、テレポートしたかのような素早さを発揮して、私はマチスさんの腰に突撃した。驚いて慌てているマチスさんに、ヤドランに噛みつくシエルダーのごとき根性でしがみついて哀願する。

「バトルー、バトルー!ジム戦してくださいいいいい……!！」

マチスさんは困惑した様子だったが、言いたい事に気づくとしつしと手を振って船への階段を登ろうとした。

「What? 悪いが、今から出かけるところでな。諦めな」

しかしここで「はい、分かりました」と引き下がってはシエルダ

「のユズルの名が廃る！私はマチスさんのでかい身体をよじ登ってへばりついた。」

「ばーとーるうううう……！バトルしてくれるまで離しませんよお
おおお……！！！」

「ひっ！？ 何処のghostだよ！帰ったらバトルしてやっから、今は離れな！」

その言葉にピクツと反応して、問い返す私。

「いつ帰るんですか？」

「未定」

その言葉に思考が停止する。

未定、みてい、ミテイ、M I・T E・I……！？

ユズルの脳内会議中………結論が出ました。

私はガシツとマチスさんの肩に手を伸ばす。

「逃すかあああああああッ！！！」

「ぎゃあああああああああッ！？」

私はものすごい勢いでマチスさんの背中によじ登り、両足でがちり腰をロックすると、両腕で首に巻きついた。マチスさんは必死で私を剥がそうとするが、私も必死なのでそう簡単には剥がれない。結局、五分ほど争った結果。マチスさんはとうとう折れて、バトルを承諾した。

マチスさん、ゲットだぜ！！

「使用ポケモンは2た……」

「Just a moment!」

カスムのルール説明を遮って、マチスさんが叫んだ。ちなみにカスムが審判をやっているのは、審判さんが風邪でお休みしてるからだよ！

「俺は急いでんだ。どうせならone on oneでやってもらおうか」

「わん・おん・わん……!?!」

私はその言葉に戦慄し、マチスさんはニヤリと笑った。私は隠しきれない焦りを見せて、カスムに顔を向ける。

「カスムー!」

「なんやー?」

カスムは審判の旗を両手に持って答えた。私は真剣に問いかける。

「わん・おん・わんってなに?」

マチスさんがずつこける。だって外国の言葉なんて知らないよ。カスムは私の言葉に驚くことなく丁寧に説明した。

「1対1でバトルすることや。つまり使用ポケモンは1体の、一発

勝負やな」

「ありがとー！」

「さっさと構ええやー」

私は手を振ってカスムにお礼を言うと、コーヒープリンを見た。ここはやっぱりコーヒープリンを出すしかないだろう。

そう思っていると、先にマチスさんがポケモンを繰り出した。

「ライライツ！！」

オレンジ色の毛並みに茶色の尖った耳、長い尻尾の先の鋭いギザギザ。バチツバチツと電流をほつぺたから迸らせて、こちらを楽しそうに見据えてくる。

マチスさんは自信満々に笑った。

「こいつぁ俺の相棒のライチュウだ！すぐに片付けてやるぜ！」

相棒。

その言葉は、鋭い棘のように私の心に突き刺さった。私は腰のモンスターボールとコーヒープリンを交互に見詰める。

私はレッドさんに「メロンパンと旅を始めたい」と語った。それはメロンパンのひきこもりを治すという目的以上に、メロンパンが初めてのポケモンで、私の相棒であると思っていたからだ。

しかし、今の私ときたらどうだ？

勝負になるとコーヒープリンばかりに頼って、メロンパンを蔑ろにしてはいなかっただろうか。心のどこかで、メロンパンを疎ましく思っていたのではないだろうか。メロンパンのひきこもりを何とかしたいと思いつつも、仕方のないものだとも思っていたのではな

いだろうか。

私はメロンパンの入ったモンスターボールをぎゅっと握りしめる。マチスさんは自信を持ってライチュウの事を「相棒」だと宣言した。

私はあれくらい自信を持って、メロンパンの事を「相棒」だと、言えているのだろうか。

『役立たず』

脳裏に蘇るあの男の言葉に、掌に詰め痕が残るほど拳を強く握り締める。

「行け！メロンパン！！」

私はコーヒープリンを出さずに、メロンパンを出した。マチスさんは不思議なものを見る目でメロンパンを見る。

「なんだそりゃ？」

周りを取り囲んでいる観衆も、どよめきながら「あれはなんだ？」「ポケモンか？」「多分ゼニガメじゃないか？」と囁き合っている。私は背筋を伸ばしてマチスさんに相対した。

私はこの先あの男に会った時、メロンパン抜きで勝てたとしてもきっと嬉しくない。それは、メロンパンの事を『役立たず』だと認めたまも同然の勝利だ。

だから私は今、私は胸を張って答えよう。

「私の大事な、相棒です！」

めに。

再びあの男にあいまみえたその時、
本当の意味で勝つた

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
.....?
?

第八話 クチバシテイ・後編

「バトル 開始！」

カスムが宣言すると同時に、私はメロンパンをライチュウに向かってブン投げた。

先手必勝！

前話でなんか良い事言ったけど、やっぱりひきこもって出てこないのです！！

「いつ！？避けるライチュウ！！」

「ライ！」

予想外の攻撃にマチスさんは焦ったが、そこはジムリーダー。すぐにライチュウに指示を出して余裕で避けた。

「速い！」

私がブーメラン的に帰って来たメロンパンを抱きとめると、マチスさんは不敵に笑った。

「電気タイプは速さが売りだぜ！それはそうとして危ないから離れる！審判！ありやいいのか！？」

「ニビジムの審判もOK出したんやし、ええんとちやいますか？」

カスムの冷静な言葉に、マチスさんは頭を抱えてた。

「Fuck! じゃあトレーナーがついてんのは!?!」

「トレーナーとポケモンは一心同体! 実践風バトルという事で!」

今度は私が答える。マチスさんは私の言葉に、黒い笑みを漂わせた。

「へ……っ! じゃあ遠慮なくトレーナーも攻撃させてもらうが……文句はねえな!?!」

「当然! 文句なんかある訳ないよ!」

即答すると、マチスさんは犬歯をむき出しにして愉快そうな顔をした。ライチュウもそれに呼応するかのように電気を鎧のように纏い、帯電を始める。

「覚悟しな! ライチユウ、十万ボルト!」

「どりゃあああッ!」

不味いと踏んだ私がカーブを描くようにライチュウにメロンパンを投げると同時に、電気の奔流が向かってきた。電光石火の速さでライチュウと私の間を一直線に結び、本能的に動いた身体のすぐそばを稲妻が走り抜けた。

「……は……っ……はあ……」

地面に黒い痕を残して、稲妻は過ぎ去った。無意識に止めていた息に苦しさを覚えて、脂汗を流しながら浅く呼吸する。

電撃を放った直後なら当るかもしれないと投げたメロンパンも軽々と避けられてしまい、ライチュウとマチスさんの余裕の表情は崩れない。

「ハッハアツ！どうだこの威力！これが実力の差って奴だ！！」
「……………」

帰って来たメロンパンを無言で受け止める。今のままじゃ、勝てない。その事実が胸に重くのしかかった。

「……………それはそうとして、それは何のポケモンだ？」

マチスさんがふと真顔に戻って訊ねたので、私は淡々と返した。

「ゼニガメです」

「なんでからにこもってるんだ？」

「ひきこもりなんです」

一瞬の沈黙。私の一言を理解するのに時間がかかったらしく、観衆も、みんな沈黙していた。

「……………ハアツ！？」

沈黙を最初に破ったのはマチスさんだ。違う意味で崩れた余裕に微妙な気分になる。

「待て待て！何でひきこもってんだ！？」

その質問に、私はマチスさんの目を見て、恥じる事なくはっきりと言った。

「分かりません。ですが私の相棒は、誰が何と言おうとこの子です」「なんでそんなに拘る。もっと戦いやすいポケモンなんていくらでもあるはずだぜ。そのポケモンで挑む必要性が何処にあるってんだ

「？」

あの男を思い出す。止める間もなく、メロンパンを焼きメロンパンに変えてしまった男の事を。

「私は旅立つてすぐに、ある男のピカチュウによってゼニガメを瀕死にされました。その男は、ゼニガメの事を“役立たず”と言った。もし私がゼニガメで戦う事を諦めてしまったのなら、あの男の言った言葉を認めてしまう事になる」

シンと静まっている観衆。マチスさんは神妙な顔で聞き、カスムはいつもと変わらない顔で聞いているように見える。

「だから私は、必ずマチスさんに勝ってみせます。この子と、一緒に」

マチスさんは「くだらねえな」と呟いた。

「おめえがどんなもん背負ってようが。俺には関係ねえ」

マチスさんの声は、静まり返った中に良く響いた。一度閉ざされた口が、重々しく開く。

「ただ全力を持って、叩き潰すまでだ！」

ワアアアアアアアアアアアッ！！

盛り上がる観衆。マチスさんは真剣な眼差しで私を見る。その目

にさつきまでのバトルとは違うものを感じ、口角を上げたマチスさんに姿勢を正した。

さて、大見えを切ったは良いが、現状追い詰められているのは変わらない。メロンパンがひきこもっている以上、使える技は“こうそくスピン”モドキのみ。しかもメロンパンは水タイプで、ライチユウは電気タイプと相性は最悪だ。
どうする

「頑張れ！」

「へ？」

知らない人からの声援に、私は思わず首を傾げて見渡した。とたん、増えていく応援の声。

「負けるな！」「根性見せてやれ！」「ひきこもりの底力舐めんなッ！」「男前だぞ！」「いてまえーッ！」「ここで終わる気かー！」「ファイトー！！」「少佐！大人げないですよー！」「格好良いぞー！」「良い覚悟だー！」「感動したぞー！」「イけるイけるッ！」「きつと勝てるぞー！」「マチスがなんぼのもんじゃーッ！！！」

一つ、また一つと増えていく声、声、声。一部声援じゃないものも混じっていて、マチスさんが「ンだとゴラァッ！今言った奴出て来い！」と叫んでいるが、ほとんど応援だ。

かつて、これ程までの声援を受けたことがあっただろうか。みんな何年たっても出てこないメロンパンを見て、「諦める」と、「無駄だ」と、「そんなポケモンで勝てる訳ない」と言った。そのたびに私は震える声で、「そんな事はない」「きつといずれ治る」と精一杯声を張り上げた。

まるで自分に言い聞かせるかのように。

この声は、いくつもの応援は、私とメロンパンに向けられたものだ。

「……行くよ。メロンパン」

大きく振りかぶる。幾千、幾万の願いを込めて。きっと今は虚勢もいらぬ。必ず届くと祈って、私は投げる。

私が投げようとしているのに気がついて、マチスさんがライチュウに指示を飛ばす。“十万ボルト”だ。全力で相手すると宣言した通り、尻尾をたてて空気中の電気をかき集め、最高の一撃を放とうとしている。

ライチュウの身体の表面で胎動する電流。それが一気に膨れ上がり、私へと差し迫って来るのと同時に。私もメロンパンをブン投げた！

「十万ボルトオオオオオオッ！！」

「ロイヤル・スピン・アタアアアアアック！！」

ほとんどさつきと一緒だ。稲妻が、真っ直ぐに私に向かう。唯一異なるのは、メロンパンの飛来速度が段違いに速くなっているところだろう。驚愕するマチスさんに、完全に急所にヒットして吹っ飛ばすライチュウ。投げることに集中しすぎて稲妻直撃コースの私。

……アレ、これ死ぬんじゃない？

視界を真っ白に染め上げる雷光に、意識が飛びそうになる。あまりの眩しさに閉じた瞼。それでも消えない発光。

白が意識を、染め上げた。

「勝者、挑戦者！」

ワアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

「あれ？」

カスムの宣言と大喝采を上げる周囲に、私は閉じていた目を開く。

「スピ」

「コーヒープリン？」

私を持ちあげて鳴くコーヒープリン。多分だけど、電撃が直撃する直前に、コーヒープリンが助けてくれたのだろう。

私が目覚めたので、コーヒープリンは私をそつと地面に下ろした。生きている事に胸を撫で下ろしながらマチスさんを探すと、気絶しているライチュウをモンスターボールに戻しているところだった。私が駆け寄ると、顔を上げる。

「ほらよ、オレンジバッジだ」

「わわわっ！」

投げて寄こされたそれは、私が喉から手が出る程欲しかったものだ。空中で危なっかしげにキャッチして、バッジを観察する。

太陽の形を模したそれは、陽光を受けてオレンジ色に輝いていた。私はバッジを握りしめてマチスさんに頭を下げる。

「ありがとうございました!!」

「へっ! おいお前ら! 時間が押してんだ。出航すんぞ!!」

マチスさんは照れ臭そうにそっぽを向くと、観客になっていた船員たちに激を飛ばす。船員たちはとたんに背筋を伸ばして船へと走って行った。

マチスさんもその流れに乗って、まだ頭を下げている私に背を向ける。顔を上げてその背中を見送っていると、マチスさんは振り返らずに手を振って見せた。

「負けんじゃねえぞ!」

力強い言葉。嬉しくなって、満面の笑顔で叫び返した。

「はい!」

「え?じゃあカスムとはここでお別れになるんだね」

宿の一室。それぞれ別にとるよりも、二人で取った方が安上がり

なので、一室だ。二段ベッドの下に腰かけている私に、カスムは頷く。

「ああ。元々あんさんとはニビで偶然出会っただけや。すぐに連れ戻されるやる思たしな」

「ひどっ！酷い子がここにいるよメロー！」

膝に乗せていたメロンパンを抱きしめて泣き崩れて見せる。しかし今回はカスムにスルーされた。

カスムの言う事には、ニビには補給に立ち寄っただけで、私の家出騒動には関わる気がなかったそう。それでも協力してくれたのは、私がグレーバッジを自力で手にし、止めても無駄な雰囲気を感じ取ったかららしい。

「ちなみに負けたらどうなったの？」

「ニビの目立つ所に縛りつけといて、キリに連絡でもしとったなあ」「華の乙女になんてことをしようとしてるんだ」

さらっと恐ろしい事を言うんじゃない。さらっと。

「まあキリもバッジ2個持ってたら今更「帰れ！」だの無理やり連れ戻したりだのせえへんやろ」

カスムの言葉に反応して、コーヒープリンが私に寄り添った。その様子を見てカスムは喉の奥で笑う。

「こわーいボディー・ガードもついとるみたいやしな」

「ははは……」

これに関しては、私は苦笑いをした。あの夢が本当なら、コーヒ
ープリンを私を連れ戻そうとするキリに容赦しないだろう。下手し
たら毒針でも打ち込みそうで、頼もしいけど少し怖い。

「私はこれからヤマブキに向かおうと思ってるけど、カスムは？」

「……俺は15番道路でしばらく調べもんや」

「15番道路？なにかあったの？」

私の問いかけに、カスムの雰囲気が変わった。何か、感情が吹き
出るのを抑え込んでるような感じがする。カスムは奥歯を噛み締め
て、絞り出すように返答した。

「最近メタモンが乱獲されすぎて、野生のメタモンが絶滅しかけて
るらしいんや」

メタモンのカントーでの主な生息地は、15番道路。メタモンの
数を調べるにはうってつけの場所だ。カントーで異変が起きている
というのは本当の事らしい。トキワのことと言い、一体何が目的な
のかさっぱりだ。

「許さへんで……絶対に……」

「……………カスム？」

私が首を捻って考えていると、カスムが何か呟いた。何を言った
のかは分からないが、ただならぬ怒りを感じて恐る恐る声をかける。

「ッ！ ……何でもない。明日も早いし、あんさんも疲れとるやろ
？寝るでー」

カスムはハツとしたように表情を変え、笑顔でベッドの上へ上が

って行く。私は心配ではあったが何を言えばいいのか分からずに、無言で頷いてベッドに潜った。

カスムが部屋の明かりを消し、静けさが部屋を支配する。眠れずに何度も横になっていると、カスムが独り言のように言った。

「……俺には俺の、あんさんにはあんさんの旅がある。人の旅に首突っ込むんやないで」

いつからか決して名前を呼んでくれなくなった友人の言葉に、私は無言で枕に顔を埋める事しかできなかった。

T o b e c o n t i n u e ?

第八話 クチバシティ・後編（後書き）

カスムウウウウッ！どれだけカスム マジックを使えば気が済むんだ！出番増えすぎだぜ！！しかしこれでやっとカスムから解放だ。お疲れさまでしたー！

第九話 ヤマブキシティ・前編

前略、如何お過ごしですかマチスさん

「待つてくれえええええ！」

先日は無理を通してバトルをして下さり、真にありがとうございました。

「頼む！ あんたしかいないんだ！」

さて、私はマチスさんに心から謝罪したい事があります。

「一か月、いや一週間で構わんからっ！！！」

私がひつついて、シエルダーのごとく離れなかった事についてです。

「ここの師範になってくれ！！！」

「お断りしますッ！！！」

やられる側になってみると、とても面倒な相手だったのでですね。大変申し訳ない思いでいっぱいになりました。

「お願いだからああああッ！！！」

「放して下さいいいいいいいッ！！！」

マチスさんにそんな念波を送りつつ、私はひつついてくるムキムキお兄さんやおじさん達と、全力で格闘するのだった。

“ ヤマブキは金色、輝きの色 ”

ヤマブキシティの入り口の看板を確認して、私はヤマブキに来たのだと実感する。

「 ここには確か、ナツメさんがいるんだっけ 」

ナツメさんは、ヤマブキジムのジムリーダーだ。エスパータイプの使い手で、綺麗なお姉さんだとポケモンの雑誌のジムリーダー特集に載ってた。自身も超能力が使えるとは、正にポケモンと一心同体。

会えるのが楽しみだが、あいにくとナツメさんは療養中だと書いてあった事も覚えている。運が良ければ会えるかもしれないが、どうなのだろう。

「 ま、悩んでも仕方ないよね。行こうか、メロ、リン 」

「 スピ 」

「 …… 」

腕に抱えているメロンパンを抱き直して歩き出した。ヤマブキシティは流石シルフカンパニー本社があるだけあって、大きな街だ。マサラヤトキワなどの田舎の町とは違って、多くの住宅街が立ち並んでいる中心に、シルフのビルが建っている。石畳で整備された道

を歩くのは初めてだし、こんなにも高い建築物がズラズラと並んでいるのも初めて見る光景なので、道の端っこに寄ってキョロキョロしながら歩いた。

「でっかい……」

迷いそうだ。ゲートのところで人のよい警備員さんに貰ったヤマブキの地図を頼りに、とりあえず今夜の宿を探すことにした。それは良かったのだが

「こつちであつてるんだよね……」

「ここの角じゃない気が……」

「ええっ？満室ですか。すみません、他を当ります」

「こごご……いやいやここを右に曲がって左に……」

彷徨いに彷徨った結果。

「……迷った」

空はもう暗くなり始めており、そろそろ宿が見つかってないと非常にマズイ。入り組んだ路地を抜け、見た事のあるようないなような道を進んでいる。出会えた宿も数軒あるにはあるのだが、流石都会と言っべきだろうか。

値段が高い。

宿の値段が高い上に、手ごろな値段の宿は満室。更に地図の何処

らへんにいるのかも分からなくなってきている以上、これはもう野宿覚悟で一度ゲートに出る道を訊ねた方が良さだろう。近くに道を訊ねる事が出来そうなところを探すと、通りの向こう側に古い看板が傾いている道場が見えた。

道場という場所は初めて見るが、確か精神と肉体を鍛える場だと父さんが言っていた。なら、親切な人が多いんじゃないだろうか。精神的にゆとりのある人は親切だと相場が決まっているし。

そう考えると私は通りを横切つて、古い両開きの道場の扉に手をかけたが、そこで更に思い出した。こう言った歴史ある場所に入る時には、言うべきセリフがある。そう父さんは言っていた。確かにこの古さと言い、クモの巣の張り方と言い、近代的な街並みに似合わない木製の扉と言い、歴史を感じさせるものがある。私はメロンパンを一度モンスターボールに戻すと、息を整えて思いつき扉を開けはなつた。

「たのもーうッ！」

開け放つと同時に叫ぶと、道場中から殺気が飛んできた。

「きええーいッ！」

目の前に飛んできてくる足の裏。一步右に移動して避けると、背後で「ぎゃあああああ……」と小さくなっていく悲鳴と何かが道を擦って行く音が聞こえた。私は聞こえなかったふりをして次の人間を迎え撃つ。

「破ッ！」

「甘いッ！」

次に迫つたのは拳。即座に懐に踏み込んで腕を取り、胸倉を掴ん

で背負い投げ。「げふぁッ！」という呻き声と相手の背中が木張りの床に激突する音。それに構わず無言でメロンパンをコーヒープリンから受け取る。

「おらぁぁぁぁッ！」

「ふんッ！」

突撃してくる三人目の腹に向けて、真っ直ぐにメロンパンを向け体に加える。「うえええええッ!?」といいつつも止まらない相手は、そのまま差し出されたメロンパンに腹を激突させてくの字になる。悶絶している相手に目もくれず、向かってくる四人目に距離が縮まる前にメロンパンをブン投げた。

「ガッッ！」

そして最後に、私に向かってくる五人目。しかし私は何もせず、その場に立った。

「うおおおおおッ……うッ！」

「……」

コーヒープリンが右の針の切っ先を五人目の喉元に当てて、五人目はあえなく両手を上げる。だが心までは屈しないとばかりに、親の仇を見るような目で私を見る。

「おのれ……ッ！ 看板は貰って行っても構わん。しかし、ポケモン道場の心までは折れんからなッ！」

……えーと。

「あの……看板はいらないので、道を教えてもらえませんか？」

私が困ったようにそう言うと、五人目のおじさんは、目をパチクリさせた。

「……看板を取りに来た訳では、ないと？」

「貰っても困ります。旅の途中ですから、運ばませんし」

そういうと、おじさんはほっと胸を撫で下ろした。そして倒れた他の人たちを見てから、ガシツと私の両手を握って詰め寄る。

「このの……この師範になってくださいッ！」

「……はい？」

そして話は冒頭に至る。

「いやー！師範なんてやりませんー！」

「お願いだつてばあああッ！」

情けない顔で私の腰にひっついてるのは、ここの道場主であるタケノリさんだ。

この空手道場は、昔ナツメさんとヤマブキのジムの座をかけて勝負した事があるそうだ。3・4年くらい前の話なので私は知らなかったが、負けた後も返り咲く日を夢見て日々修業に修業を重ねていたとのこと。だけど、いつまでたってもナツメさんには勝てないし、門下生も続々減っていき経営は困難に。ここの道場も潰れる寸前と、状況は最悪だ。

だが、だからといって彼等は私に道場再興をして欲しいわけではない。彼らだつて部外者にそんなことを頼むのは常識外れだと分かっているのだろう。

でも全員に勝ったからって、「師範になつてくれ！」も十分常識外れだよ！

「入るぞ」

ぎゃーぎゃー中で騒いでいると、入り口の方から誰か入ってきたようだ。私は押さえつけてくるムキムキさん達に夢中で気がつかなかったが、その声が静かに告げた。

「フリーデイン、念力」

『うおおおおおおおっ！！？』

ペリペリと剥がれていくムキムキさん達と一緒に、私も宙に浮き上がる。浮き上がる身体で器用に空中で方向転換すると、入り口の人間が目に入った。

「げ」

うららかな春の木漏れ日の陽光のような金系の短髪。安っぽいビーズのついた三本のヘアピン。丸っこい大きな蜂蜜色の瞳に女顔。

「ようやく見つけたぞ。ユズル」

そこにいたのは、再会したくない人間ナンバーワン・私の幼馴染ことキリであった。

「放せー！下ろせー！」

「うるせー」

キリだと認識した瞬間から全力で暴れ出す。キリはそんな私を一睨みして道場に上がり込むと、ズンズンと私に近づいてきた。

「バーカ！ハーゲ！来んなー！！」

「うるさい」

私の数少ない暴言ボギャブラリーを駆使してキリを攻撃するが、キリは同じ言葉を言って無視する。ほかの浮いてる人間は皆下ろされたようだが私だけ浮いた状態だ。

てゆうか自由になったなら助けようよ！ 道場のムキムキさん達！！今私大ピンチ！助けてくれたらもしかしたら師範やつちゃうかもしれないんだよ！？ねえねえお得だよ！

「こつち来んな女顔ー！！」

「……」

やべ、地雷った。キリが無言だ。自業自得とはいえなんてことをしたんだ私！

キリはこちらを睨みつけたまま、私の目の前でぴたりと止まった。誰かがゴクリと喉を鳴らす。しばし無言でこちらを観察すると、キリは口を開いた。

「……ユズル」

「……」

キリは普段怒りながら説教するタイプなので、黙られると超怖い。久しぶりに本気で怒っているようだ。目を逸らすともっと怒られるので、無言で冷や汗を流しながらキリを見返す。

「……」
「……」

無言で睨みあう。何だこれなんの拷問。

そう感じながらも目は逸らさない。そうしていると、キリが突然動いた。

「……！」
「……わっ！？」

フーデインの念力は解けたが、私には別の意味で金縛りが生じている。物理的な意味と精神的な意味で身体が動きません。状況が理解できず、目が点になっている。ええっと、つまりですね、今現在、進行形で、

キリに抱きしめられています。

頭の中がぐるぐる混乱している。キリは人を抱きしめたりするよ
うなタイプではない。ならばこの状況は何だ。キリは私よりも5セ
ンチほど背が高いので、キリの胸に顔を埋めるというよりは、キリ
と頭が並ぶ感じになる。力強く、息ができなくなるんじゃないかと
思う程きつく抱きしめられていて、思考は完全に停止していた。

「………無事でよかった」

キリが安堵しきった声で呟いた。私は未だにグルグルしている。

至近距離でして、それ以前に全力で抱きしめられていまして、そ
れで旅しているので当然筋肉とかも男の子ですからついていてです

ね、キリは昔から基本的に暴言しか言わないのでここまで素直に言われたのも初めてで、その、あれ、えと

完全に限界だった。

「わあああああああああああああッ!!!」
「うわッ!?!」

私は全力を持ってキリを突き飛ばすと、キリは唾然とした顔で私を見ていた。これ以上ここにいと爆発しそうな気がした私はものすごい勢いで道場の扉を蹴破り走り去る。とにかくキリの顔を見たくない一心で飛び出すと、道場のすぐ隣に“GYM ヤマブキジム”と書いてある建物がある事に気づいた。すぐに飛び込んでジム中に響くような大声で叫ぶ。

「ジム戦してください!!」

私には、バトルしかない。バトルするしかないんだ!なんかバトルしたら落ち着きそうな気がする!!

私の叫び声は、暗いジムの中に響き渡った。ナツメさんがいなければジムも休みで、ここが暗いのも当たり前だ。それでも普通ジムにはジムリーダー以外のトレーナーもいるはずなので、私は構わず繰り返す。

「マサラタウンのユズルです!戦ってください!!」

もうナツメさんじゃなくてもいいからバトルしたい。バトルに熱中して何もかも忘れて遠いお空に旅立ってしまいたいんだ!!

「挑戦者か……運が良いようだな」

「え……?」

だが幸か不幸か。暗いジムの中から靴音を響かせて出てきたのは、ただのトレーナーじゃなかった。言葉と共にジムの明かりがひとりについて、相手の全貌が現れる。

黒くて艶やかな長い髪に鋭い瞳。彼女を支える逞しいフリーデイン。

「相手してやろう、挑戦者」

そこにいたのは正しく、ヤマブキジムジムリーダー・ナツメだった。

T o b e c o n t i n u e ?

第九話 ヤマブキシテイ・前編（後書き）

カスムによってキリの影が薄くなっていましたが、ここからはキリのターンなんだぜ！

第十話 ヤマブキシティ・後編

明るくなったジム、長方形の白線の中に彼女はゆっくりと入って行った。

黒く艶やかな黒髪は腰まであり、鋭い目に口は弧を描いている。体のラインが出るぴったりとした服を着ていて、フーデインもそれに続いてフィールドの中に入って行った。

「どうした。戦わないのか」

彼女 ナツメさんの威圧感に、私はすっかり冷えた頭でフィールドの中に慌てて入る。ナツメさんが指を鳴らすと、奥から審判の服を着た人も出てきた。

「これより、ヤマブキシジムリーダー・ナツメと挑戦者・ユズルの試合を開始します」

コーヒープリンが持っていてくれたメロンパンを受け取る。今回もメロンパンを使うつもりだが。

「……」

私には分かる。ひきこもっている時は基本無言なので分かりにくい。これは

「ゼー……」

NE・TE・RUッ！

「使用ポケモンは二体の入れ替え戦。ただし、一匹が戦闘不能となった時点で、戦闘不能にした方の勝利とします」

続いた審判の言葉に、私はそつとメロンパンをモンスターボールに戻した。

「この状況下で寝るとは……」

肝が座わっているのか座っていないのかわからん。

最近騒がしい日々が続いて、メロンパンも疲れているのだろうか。私はコーヒープリンの方を向いて訊ねた。

「リン、出してもらっていい？」

リンは頷くと、フィールド上に出ていく。

「試合　　開始！」

審判の声を合図にして、私はコーヒープリンに指示を出した。

「かげぶんしん！」

声と共に、コーヒープリンの姿がいくつもになってフリーデインを取り囲む。ここで「どれが本物か分かるかな？」と言えたら格好良いが、あいにくと私も分からないのでそんなこと言えない。

ナツメさんが動かないようなので、私は先手必勝とばかりに攻撃させてもらうことにした。

「どくばり！」

取り囲むコーヒープリン全員から、毒針が発射される。だけどフリーデインは慌てず騒がず、まだその場から動かない。全方位から迫る毒針に対して、じっとしているだけだ。

どうして動かない。

動かないという事は、何か狙いがあるということ。一瞬で思考を巡らせた私がフリーデインを見詰めていると、ジムの明かりを反射して、何かがキラリと輝いた。

「リフレクターか！」

澄んだ音をたてて、本物の毒針が弾かれた。それに反応してナツメさんが指示を出す。

「フリーデイン、サイケこうせん！」

「リン避けて！」

毒針の方向から辺りをつけたフリーデインが、輝くサイケこうせんを右手から発射する。的確にコーヒープリンを狙った一撃だったが、私の声に反応して紙一重でかわした。

「なかなかやるようだな」

余裕の笑みを浮かべるナツメさん。思い返してみれば、タケシさんもマチスさんも余裕の笑みを浮かべる事が多かったなあと思い返す。それに対して私はいつもギリギリだ。

「いとをはく！」
「サイケこうせん！」

フリーデインとコーヒープリンの間の直線を結ぶように、白い線が空中に引かれる。フリーデインはそれを避けると再びサイケこうせんを繰り出したが、避けるまでもなくそれは第三者によって弾かれてしまった。

「なッ！」
「えッ!?!」

飛来した黒いエネルギー球がサイケこうせんを弾き、ナツメさんと私は同時にジムの窓を振り仰いだ。そこに立っていたのは、真っ黒な毛並みに小柄な身体、身体のところかしこに入った黄色の円が特徴的な、見た事のないポケモン。

窓枠に立っているそのポケモンの横には、同じく小柄な姿がある。年のころは私と同じくらいだろうか。黒髪に全身びったりした黒服をきた可愛い女の子。黒いブーツに腕を包み込む黒い皮手袋。服には全て黄色い円のアクセントの入っていて、前髪にも黄色の染色で円が入っている。お尻にはポケモンとおそろいの尻尾がへたっていた。

「ブラッキー少女、登場だよ」

少女は右手のピースを横向きに右目にあてて、ウインクして見せた。その姿に私は無言でモンスターボールからメロンパンを繰り出して、右手に構える。

「ユズルちゃんのお助けに来ま……」
「スピン・アタアアアアック!!」

今までで一番良いカーブを描いてメロンパンが少女に飛来した。ポーズを取っているその頭に直撃し、「あああああああああ!?」と悲鳴を上げながら窓から落ちてジムの端に積んである機材に落下。その後を追うように黒いポケモンは優雅に床に着地する。私はメロンパンをキャッチすると、ぴくぴくしている少女に歩きよって機材から引きずり出す。痛みで頭を押さえている少女は反抗することなく引き摺られ、私は少女をフィールド横のセコンド席に座らせる。

「いきなり何するんだよ!痛いだろ!」

回復した少女は目を吊り上げて、さっきまでとは打って変わった男勝りな口調で言った。私はその言葉に、ピクリと片眉を上げる。

「いきなり……? それはこっちのセリフだよ!」

ジム中が震えるのではないかと思う程の音量で怒鳴ると、少女は目を丸くした。この少女が何を考えてジム戦の邪魔をしたのか知らないが、今はそんなことどうでもいい。

この少女が、私のジム戦に横槍を入れたという事実が重要なのだ。

「いきなり現れて! ジム戦の邪魔をして! 一体何考えてるの!」

少女は私のあまりの剣幕に、目を白黒させながら小さな声でもごもごと答えた。

「だって……ユズルちゃんのポケモンは一体ひきこもりだから、フ

「エアじゃないし……」

「フェアじゃない？ひきこもり？」

「ひきこもりだからフェアじゃないなんて、誰が決めたんだよ！使うポケモンは自由だし、ルールだって公正なはずじゃない！」

少女がどんな形にせよ、私の事を心配してくれてやったことだと分かったので、私は深呼吸をして怒りを抑えた。少女はまだびくびくしていたが、私は真っ直ぐに目を見てきっぱりと言う。

「誰かに強制された訳じゃない。私が自分の意思でメロンパンを使うと決めたんだ。だから、これは完全にフェアな試合なんだよ」

メロンパンを抱き直して、フィールドに戻る。待っていてくれたナツメさんに勢いよく頭を下げた。

「すみません、バトルを再開してください！」

私が怒った理由は神聖な対一のポケモンバトルの邪魔をされただけではない。もしかしたら怒ったナツメさんがバトルを放棄してしまうかもしれないという恐怖だった。今回のバトルは運よくナツメさんが療養から帰ったところだった。しかし、ここで帰られてしまっただけでは、いつバトル出来るか分からない。頭を下げたまま私は背中に冷や汗が流れるのを感じた。

「……いいだろう。ただし、ルールの変更と注文を一つつける」
「変更と注文？」

私が顔を上げると、ナツメさんは楽しそうに笑っていた。

「使用ポケモンは一体。私の使うポケモンはフーデインのままだが……そちらはゼニガメに交代してもらおう」
「なッ!？」

ナツメさんの言葉に、少女は焦りの声を上げ、噛みつくように抗議した。

「おかしいだろ！わざわざ不利な状況に追い込むなんて……っ俺が邪魔したんだから文句なら俺につけるよ!！」

ナツメさんは冷えた目で少女一瞥する。少女は怯まずに睨み返すが、どうにも威圧感に押されているようだった。

「バトル相手はこいつだ。不利にしたのはお前だがな？」
「ッ！クソッ！そんなつもりじゃ……」

少女が泣きそうな顔で私をちらりと見て、すぐに目を逸らす。私はコーヒープリンを後ろに引かせると、メロンパンを抱きしめ直した。

「どうする。このままバトルをせずに終わるか、僅かな可能性にかけてバトルするか」

クスクスと笑いながら問いかけてくるナツメさん。しかし私の腹はとっくの昔に決まっていた。

「それで構いません。お願いします」

もう一度、フーデインと対峙する。一点だけ違うのは、コーヒ―

プリンじゃなくてメロンパンがフリーデインの相手だという点だ。私たちが使える技は一つしかない。私は大きく振りかぶった。

「いつけええええええッ！」

思いつきフリーデインに向けてメロンパンを投げた。渾身の一球。マチスさんのところで進化した、ロイヤル・スピン・アタックだ。ものすごいスピードでフリーデインとの距離を縮めていくメロンパン。フリーデインは右手をメロンパンに向け、ナツメさんが一言発した。

「念力」

「！」

メロンパンが空中で静止した。ナツメさんが心底愉しそうに口元を歪める。

「二進も三進もいかないとは、正にこの事だろうな。さて、マチスには効いたようだが、私には効かないようだ」

「え……」

ナツメさんはマチスさんの事を知っているようだ。だったら、私がこの技を使うと知っていてメロンパンを指定したのだろうか。

浮いているメロンパンを見て、私は唇を噛んだ。戻って来るのならまだしも、止められてしまっただけはどうしようもない。でも、だからと言ってただやられていく様子も見たくない。

「ッ！ メロンパン……メロンパアアアンツッ！！」

耐えきれず、メロンパンの名前を叫ぶ。すると、メロンパンの姿が光り始めた。全身が光に包まれ、その形状が変化していく。頭に羽のようなシルエツト、お尻に尻尾のようなものがついて

「メ……メロン、パン？」

形状が完全に変化して光が一段と強くなった姿に、恐る恐る声をかける。すると、少しだけ低くなった鳴き声が返って来た。

「カメエエエエツッ！！」

鳴き声と共に光の粒子が弾ける。そこにいたのはメロンパン改めゼニガメではなく、ふさふさの頭の羽根と尻尾のついた、カメールの姿だった。

「このタイミングで進化しただと……！」

「メロンパン、お前……」

ナツメさんが目を見開き、少女が感嘆の声を漏らした。しかし私だけは、慎重にメロンパンを見据えている。

3人が注目する中で、メロンパンはフーデインの方を向いた。メロンパンは大きくなった身体を一度ぐつと最大まで伸ばす。そして、

メロンパンのからにこもる！

メロンパンは防御力が上がった！

……やはりなのか。

私は予想通りのメロンパンの反応に脱力した。

「メロンパアアアアアンツ！ おまつ！ もうちょっと頑張れよ！
俺の感動を返せ！！」

「やはりひきこもりはひきこもりだということか……」

さつきとは逆の順番で、それぞれがコメントする。

さつきのはメロンパンの精神的成長によって、恐らく進化したのだらうが、ひきこもりから一足飛びにバトルまではやはり無理があった。間にほかのポケモンとの活発な交流とか、普段からひきこもらないとか、もう2・3段階挟まないとダメだ。

「メロンパン……」

「……」

状況は依然として悪いままだという事かと、肩を落としていると、「フデイツ！？」と悲鳴が聞こえた。

「フーデイン！」

「……へ？」

メロンパンのこうそくスピもどきを受けて、まともに吹っ飛ばすフーデイン。状況が良く掴めないが、多分メロンパンが後ろ向きに水の放出を行って推進力を得て念力を打ち破り、油断してたフーデインに増した体重で突撃した、ということの良いのだろうか。

「……えっと」

「……」

からにこもったまま無言のメロンパンに、私は頬を掻いた。見てなかったという事で、メロンパンから無言の圧力のようなものを感じる気がする。

審判さんと目が合うと、にこやかに笑って私の手を取った。

「勝者、挑戦者ユズル！」

「……わーい？」

微妙な気分で歓声っぽいものをあげ、メロンパンの回収に向かう私だった。

「終わったみたいだな」

私と同じく微妙な顔をしていたナツメさんからゴールドバッジをありがたく受け取って、ジムを出ようとすると、入り口にはキリがいた。

もう完全に落ち着いた私は、キリに突き飛ばした事を謝る。

「いきなり突き飛ばしてごめん……あと、心配かけてごめんなさい」
「……」

キリと別れたあの後、キリが何であんなにかたくなだったのかちよいちよい考えた。酷い事ばかり言っていたけれど、冷静に考えて見ると、結局のところキリは心配してくれていたのだ。あの道場の一件で、完全に理解できた。

『……無事でよかった』

道場での言葉。あれには万感の思いが籠っていて、もしかしたら勘違いかもしれないけれど、キリが本当に私の事を心配してくれていたのだと分かる一言じゃないだろうか。

「……僕は別に、実力も伴ってない癖に勝手に旅に出て、勝手に怪我されても面倒だと思っただけだ」

ふいつと顔を逸らしてキリは呟いた。それに「やっぱり私の勘違いだったのかもしれないなあ」と人の心の複雑さに遠い目をしていると、後ろから声がかかった。

「ユズルちゃん！」

振り向くと、そこにはさっきの少女が立っていて、キリがキッと睨んだ。私の一歩前に出て、間に立ちふさがる。

「……何のようだ」

「お前に用はねーよ。用があるのはユズルちゃんにだ」

ムツとした顔で少女がキリを押しつけ、申し訳なさそうな顔で何度も頭を下げた。

「本当に今日のごめん。俺のせいで大変な事になって……」

それは確かに事実だとは思う。小さな親切大きなお世話という言葉も。

けれど私は、たとえ迷惑を被ったとしても、目の前の少女の好意に対して「迷惑だ」と言う気にはなれなかった。

「いいよ。もう済んだことだし、見方を変えれば君のおかげでメロパンは進化したとも言えるよ」

人の好意は伝わりづらいから、失敗だつてする。けれどその思い自体は、きつととても温かいものだ。

「ありがとう、ユズルちゃん」

泣きそうな顔でお礼を言う少女に、なんだかこっちも申し訳ない気分になって頭を下げ合う。そんな中で、キリを盗み見て私は思うのだ。

仏頂面で、毒吐き。それでもちゃんと（多分）私の事を何処かで気にかけてくれている。

今頃何処かを歩いている、カスムも。

そして私だつて、彼らの事を何処かで気にかけていた。

誰かが誰かを大切に思う心は、分かりにくくて目に見えない。

だからこそ私はそれに気づくたびに嬉しくなって、大切にしたいとついつい思ってしまうのだろうか。

To be continue ?

第十話 ヤマブキシティ・後編（後書き）

ヤマブキ編は難産でした……結局、キャラ達に引っ張ってもらおう形で書きちゃいましたから、ユズル達は特にねぎらってあげないです。お疲れさまでした！

閑話 PMSW掲示板より抜粋・そのいち

マサラタウンに住んでるんだが(347)

1：名無しさん、君に決めた！

俺の近所に住んでるガキが家出したらしい

2：名無しさん、君に決めた！

それがどうしたよ

3：名無しさん、君に決めた！

マサラタウンとかマジ裏山

4：名無しさん、君に決めた！

1

「ポケモンマスターになるんだ！」とか言ってる世間知らずな子供が飛び出すのは良くある話だろ

そのうち現実知って帰って来るからほっとけ

5：名無しさん、君に決めた！

青春真つ盛りな訳だ

6：名無しさん、君に決めた！

4

そしてお前も現実を知った訳か

7：名無しさん、君に決めた！

6

死ね

8：名無しさん、君に決めた！

7

お前が死ね

9：名無しさん、君に決めた！

8

いやお前こそ死ね

10：名無しさん、君に決めた！

9

お前こそが死ぬべき

11：名無しさん、君に決めた！

お前らいい加減にしるよ

俺が審判やってやつから、バトルでケリつけて来い

12：名無しさん、君に決めた！

11

何処でバトルするんだよ

13：名無しさん、君に決めた！

まさかの乗り気WWW

14：名無しさん、君に決めた！

ちょWWWオマエら落ち着けWWW

15：名無しさん、君に決めた！

WWW

16：名無しさん、君に決めた！

結果報告よろ

17：名無しさん、君に決めた！

11

何処に住んでるんだ？

18：名無しさん、君に決めた！

17

玉虫

19：名無しさん、君に決めた！

18

俺ミナモんだけど

20：名無しさん、君に決めた！

19

おれはブラックシティ

21：名無しさん、君に決めた！

ブラックとかwwwwww
俺が悪かった。心がささくれだっただんだな

22：名無しさん、君に決めた！

いや噛みついて悪かったな

23：名無しさん、君に決めた！

まさかの仲直りwww
外で待ってた俺は一体……

24：名無しさん、君に決めた！

23

とりあえず帰ってこい

25：名無しさん、君に決めた！

1

で？いつ帰って来たんだ？

26：名無しさん、君に決めた！

25

蒸し返すな馬鹿

クソスレ埋めにバトル考察でもしようぜ

27：名無しさん、君に決めた！

26

どれくらいで帰って来るか気になるだろ

ちなみに俺は最初のジム戦で負けて家帰った。ジムリーダー強す

ぎワロタwww

ワロ……タ……orz

28：名無しさん、君に決めた！

27

まだ帰ってきてない。探しに行ったレッドさんが親と話してた。

29：名無しさん、君に決めた！

！？

30：名無しさん、君に決めた！

28

k w s k

31：名無しさん、君に決めた！

これは期待できそうだな

32：名無しさん、君に決めた！

27

元氣出せ

33：名無しさん、君に決めた！

マサラ内じゃ有名な奴で、10歳になる前にポケモン持ってたんだ
でも親が旅に反対らしい

161

34：名無しさん、君に決めた！

33

なんでそんなに詳しいんだよWWW
本人なんじゃないのWWW

35：名無しさん、君に決めた！

確かに

36：名無しさん、君に決めた！

33

むしろ妄想の産物

37：名無しさん、君に決めた！

36

いや俺もマサラに住んでるけど、本当だぜ

38：名無しさん、君に決めた！

37

自演乙

39：名無しさん、君に決めた！

33

とりあえず妄想でも何でもいいから話せ
いま暇だから待ってやる

40：名無しさん、君に決めた！

39

暇ならバトルでもしてこいよ自宅警備員
W
W
W
W

4 1 : 名無しさん、君に決めた！

4 0

俺の持ちポケの二匹がいま交尾中だからムリ

4 2 : 名無しさん、君に決めた！

4 1

持ちポケがラブラブになったりすると、死にたくなってくるよな

4 3 : 名無しさん、君に決めた！

4 1

交尾中とかww確かにムリだwwwwwwwwww

4 4 : 名無しさん、君に決めた！

4 2

自分の家なのに気まずくて、いま外にいるんだ

4 5 : 名無しさん、君に決めた！

4 4 の現状に、全俺が泣いた

46：名無しさん、君に決めた！

44

そういうことにならないためにも、俺はオスで統一してるぜ！

47：名無しさん、君に決めた！

46

謝れ。オスで統一したのにホモになりやがった持ちポケを持つて
る俺に超謝れ

48：名無しさん、君に決めた！

47

ちょｗｗオス同士でとかあるんだなｗｗｗｗ

49：名無しさん、君に決めた！

47

正直すまんかった

50：名無しさん、君に決めた！

続き投下するけど、いいか？

51：名無しさん、君に決めた！

さっさとしろよカス

52：名無しさん、君に決めた！

早くしろお願いします

53：名無しさん、君に決めた！

で、家出した訳なんだが

連れてるのがひきこもりのゼニガメ一体WWW

54：名無しさん、君に決めた！

終わったな

55：名無しさん、君に決めた！

「臨終です

56：名無しさん、君に決めた！

それなんて死亡フラグWWW

57：名無しさん、君に決めた！

現実を知る前に現実が終わったか

58：名無しさん、君に決めた！

53

トレーナーのスペックうp

59：名無しさん、君に決めた！

ロリコンか

60：名無しさん、君に決めた！

ちげーよwww

ちよつと気になる事があったんだよ

61：名無しさん、君に決めた！

58

10歳の女の子で、ポニーテールの顔は中の上

62：名無しさん、君に決めた！

名前もしかして3文字で頭がY？

63：名無しさん、君に決めた！

なんで分かったんだ。見たのか？

64：名無しさん、君に決めた！

ニビでタケシとバトルしてた

65：名無しさん、君に決めた！

よく予選勝ちぬけたな

66：名無しさん、君に決めた！

もしかしたら俺も見たかも

67：名無しさん、君に決めた！

俺はトキワで見たかもしれん

68：名無しさん、君に決めた！

64

ニビで戦った奴か。あれはインパクトあったよな
たまたま観戦してただけど、吹いた

69：名無しさん、君に決めた！

俺も見たかも

70：名無しさん、君に決めた！

なんでこんなに目撃情報があるんだよWWW

71：名無しさん、君に決めた！

68

何やったんだ。詳しく頼む

72：名無しさん、君に決めた！

タケシのイワークにゼニガメブン投げて勝った

73：名無しさん、君に決めた！

読んだ瞬間吹いた

74：名無しさん、君に決めた！

マジかよ……ゼニガメ確か10キロはあるよな

75：名無しさん、君に決めた！

正確には9キロ

76：名無しさん、君に決めた！

子供がイシツブテ合戦やるこの世界では結構いけるぞ

77：名無しさん、君に決めた！

ちよつとゼニガメ捕まえてくる

78：名無しさん、君に決めた！

落ち着け。まず投げられるか考えろ

79：名無しさん、君に決めた！

その前にそれで勝ったことに突っ込めよWWW

イワーク弱すぎワロた

80：名無しさん、君に決めた！

イワークは岩タイプの面汚し

81：名無しさん、君に決めた！

ハガネールに進化しても、使えるかどうか微妙だよな

82：名無しさん、君に決めた！

おいお前ら。あんまりイワークとかハガネール馬鹿にしてると俺
みたいな事になるぞ

使えないなりに何とかしようと思パルタったら、逃げよった
しかも帰ってきたら俺を攻撃してきて、家が全壊するし

83：名無しさん、君に決めた！

イワークの反乱wwww

84：名無しさん、君に決めた！

まさかの反逆wwwwwwwwww

85：名無しさん、君に決めた！

イワークじゃなくてハガネールだけだな
カントーの奴らビビらそうと思って連れて来たんだけど、クチバ
付近で大脱走だぜ

86：名無しさん、君に決めた！

82

お前のせいでスパルタ出来なくなったじゃねーかどうしてくれんだ

87：名無しさん、君に決めた！

志村、後ろ後ろ！

88：名無しさん、君に決めた！

何言ってるんだ、反逆が怖くてスパルタなんて……うわ何すやめ

89：名無しさん、君に決めた！

アッー！！

90：名無しさん、君に決めた！

(((。 □ 。 ;))) ガタガタ

91 : 名無しさん、君に決めた！

72

もしかしたらクチバで見た奴と同一かも
マチスさんのライチュウにゼニガメブン投げて勝ってた

92 : 名無しさん、君に決めた！

マWWWチWWWスWWW

93 : 名無しさん、君に決めた！

ちょWWW何やってんすかWWW

94 : 名無しさん、君に決めた！

電気タイプの癖に水タイプに負けるとかWWW

95 : 名無しさん、君に決めた！

てか、どうしてニビからクチバに行くんだよWW普通ハナダだろ

jk

96：名無しさん、君に決めた！

デイグダの穴通ったんじゃないか？

97：名無しさん、君に決めた！

その手があったか

98：名無しさん、君に決めた！

91

今は何処にいるんだ？クチバでのバトルいつやったんだ

99：名無しさん、君に決めた！

ヤマブキじゃないか？クチバからジム目指すんだったら

100：名無しさん、君に決めた！

タمامシにこないかな

101：名無しさん、君に決めた！

シオンタウン来てくれ

102：名無しさん、君に決めた！

98

4日くらい前の話だ。場所は知らん

103：名無しさん、君に決めた！

98

今ヤマブキにいる。ヤマブキでゲートの警備員やってるんだが、
昼ごろ通過した

104：名無しさん、君に決めた！

マジでか。俺ヤマブキにいるから、ちょっとジムに行ってくる

コスプレして

105：名無しさん、君に決めた！

何でコスプレしてんだよwwwwww

106：名無しさん、君に決めた！

何のコスプレだ

107：名無しさん、君に決めた！

ブラッキー。相棒のブラッキーと、転生しておにゃのこになった俺が行くぜ！！

108：名無しさん、君に決めた！

TSした奴か。TSは自分の性別を受け入れないとおかしくなるよな

109：名無しさん、君に決めた！

アタシは認められなかったから、オカマになったわよ！

110：名無しさん、君に決めた！

俺はゲイになっただぜ！

111：名無しさん、君に決めた！

俺はレズになった。ノーマルな友達が辛い

112：名無しさん、君に決めた！

TSも辛いだろが、トリップした奴も悲惨だぞ
金なし宿なし天涯孤独だからな

113：名無しさん、君に決めた！

転生でイケメンに生まれ変わった俺は勝ち組

114：名無しさん、君に決めた！

113を狩りに行こうと思うんだけど、他に狩りたい奴いるか？

115：名無しさん、君に決めた！

7歳児になんてことしようとしてんだwww
ぶっちゃけ男の娘だから、女の子より男にもてるんだよorz

116：名無しさん、君に決めた！

114

俺もいく。モンジャラで触手プレイしてやんよ

117：名無しさん、君に決めた！

じゃ、俺はベロベルト連れてってべたべたにしてやる

118：名無しさん、君に決めた！

ならば俺はムウマージで黒い眼差し

119：名無しさん、君に決めた！

金縛りを抜かすなよ

120：名無しさん、君に決めた！

やれやれ、仕方ないからカメラマンで我慢してやるよ

121：名無しさん、君に決めた！

お前ら何しに行くつもりなんだよ
W W W W W W W

122：名無しさん、君に決めた！

とりあえず狩りでない事は確かだな

(以上、PMSW揭示板より抜粋)

T o b e c o n t i n u e ?

閑話 PMSW掲示板より抜粋・そのいち（後書き）

ちよつと更新が遅くなりましたが、お待たせしました！

合宿から帰ってきたばかりで、3時まで爆酔してました……

今回の話のUPで、タグを増やしときます。

某大型掲示板を知っている人はニヤリとしたと思います。

ちなみに補足ですが、ブラックシティはポケモンの世界にある、なんか黒い都市です。住人が一人しかいません。

第十一話 タمامシシティ・前編

輝くビル群、水の噴き出す噴水、舗装のされた道。

「こ、これが……タمامシシティ………ッ!!」

眼前に広がる街並みは、正に近代都市。ヤマブキシテイも中々だったが、目の前に広がっているタمامシシティには及ばない。背の高いビルが立ち並び、大通りと細い裏道が交差し合い、大勢のトレーナーや買い物客でにぎわう道々。夜になれば、ちかちかと光るネオンサイトでまた違った顔を覗かせるのである。

私は目をキラキラさせて、町の入り口から走りだそうとした。そのとたん、すぐに伸ばされた手が私のポニーテールを引っ張る。

「痛い痛い痛い!」

「また迷いたいのか馬鹿」

背後から聞こえた声に、立ち止まって涙目で振り返る。キリが呆れかえった顔で私のポニーテールを掴んでいた。

私が立ち止まったためポニーテールから手を放したキリに向かって、全力で抗議の声を上げた。

「なんでポニテばかり掴むの!」

「動きやすい位置でびよんぴよん動いてるからじゃないのか?」

私の抗議にキリは口元を上げて即答した。その答えに何かデジャウを感じて首を傾げたが、すぐに思い出して手を叩いた。

『痛い痛い痛い！なんで髪ばっかり引つ張るの！』

『そりゃ掴みやすい位置でぴよこぴよこ動いとるからやないの？』

私はキリの顔をじつと見つめた。まさか見ていたわけじゃあるまいし、ここまで同じセリフと行動を取るとは。

「……なんだよ」

「いや、キリとカスムって仲良いなあと思って」

「はあ！？」

私の一言に、みるみるうちに不機嫌になっていく。苦虫を噛み潰したような顔で、私に向かってすごい勢いで叫んだ。

「僕はいつが大っ嫌いだ！！ 仲が良いだって？ 何をどう曲解したらそうなるんだよ！！」

そのままキリは肩を怒らせて、タマムシの街中に向けて歩き出す。私はその後ろ姿を追いかけながら、困ったような苦笑を口元に浮かばせるのだった。

ヤマブキシティでのバトルの後、キリはカスムの言った通り、私の旅をもう止めなかった。ドキドキしながら身構えていた私は、キリの「連れ戻さない」という言葉にホッと胸を撫で下ろした。

「良かったああああ……今度は逃げ切れるか分からないし」

「僕は実力のないポケモンを連れていると危ないと言ったんであって、バッジを手に行ける程の実力を持っているなら、問題ないと考えたまえだ」

「またそういうこと言う」

「事実を述べたまえだ」

「実力の無い」のくだりでメロンパンを横目で見たキリに、ムツとしながら反論すると、きっぱりと返された。黙って聞いていた自称ブラッキー少女がむすつとした顔で私の後に続いて反論をする。

「進化できる程に力を持てたんだから、そろそろ認めても良いはずだろ。アツタマ固いよなあアンタ」

私は昨夜、ブラッキー少女の家に泊まった。家と言っても少女の両親がホテルの経営者で、少女がバトルの邪魔をしたお詫びにとただで止めてくれたのだ。最初は辞退したのだが、少女が「それじゃ俺の気が済まないよ！」と言ってきたのでお言葉に甘えさせてもらった。昨夜は遅くまで話し込んで、私たちはすっかり仲好くなっていた。

何で私の事を知っていたのかについては、言葉を濁されたので深く突っ込まなかったが。

そして今は、他の宿に泊まっていたキリとヤマブキの公園で話している訳である。

「進化してようが、ひきこもってたら意味無いだろうが」

「それは確かにそうだけど、頑張りには評価してやっても良いはずだ。貶すばっかじゃ伸びねえよ」

「……」

少女の言葉に、キリは無言でメロンパンを見た。思案するように顎にしばらく手を当てていたかと思うと、ぼつりと言つ。

「……まあ、進化したことは認めてやつても良いがな」
「え……」

キリがメロンパンを褒めたことに、私は目を見開いた。ブラッキ―少女もダメものつもりだったのか、びっくりしたような顔をしている。キリは少しだけ恥ずかしくなったのか、そつぽを向いて咳払いをした。

「それはそうとして、お前はそのまま他のジムも目指すんだろ。それだったらタママシに向かうのが良い」
「それはそうだけど……」
「だったら、僕もついていく」
「……へ？」

キリの思つてもみなかつた言葉に、私はポカンとした顔になった。少女がそれにすごい勢いで反発する。

「何言つてんだ！ お前が行くんだつたら俺も行く！！」
「ええっ！？」
「……構わないが、親の許可は取れるのか？ 明らかにまだ10歳にはなつてないだろう」
「う……」

キリの冷静な突っ込みに、少女は言葉を詰まらせた。そのまま首を捻つてうんうん考え込んでいたが、やがてうなだれた。

「無理だ……てか、なんでお前はユズルちゃんと一緒に行こうと思っただよ。その年で不純異性交遊なんてお母さんは認めませんよ！」

ふじゅんいせいこーゆーってなんだ？

難しい言葉に私が悩んでいると、顔を真っ赤にしたキリが少女のほっぺたを目一杯に引っ張った。

「誰がするかそんなもん！　そしていつからお前は僕の母親になったんだ！！」

「ひででででででッ！　いひゃいひゃいひゃい！！」

べしべし少女がキリの手を叩くと、キリはぱっと手を放す。赤くなったほっぺたを擦っている少女はキリをキラリと睨んだが、何も言わなかった。

「僕がついていこうと思ったのは、タマムシに僕も用事があったからだ。ついでだついで」

「ぶっうくん？　ついで、ねえ……」

「……なんだその含みは」
「べっつにー」

少女が怪しむ様にキリを見上げると、キリは目を逸らした。少女はくるりと振り返って私の方を向くと、手をがしっと握りしめる。

「ユズルちゃん、男はけだものだから気をつけてね！」

「けだもの？」

「変な事を吹き込むんじゃないッ！！」

キリは少女からひったくるようにして私を少女から遠ざけると、当社比2割増くらいに眉間のしわを増やして、今度は青くなっていた。赤くなったり青くなったり、忙しい事だ。

「話をいちいち脱線させるんじゃない！とにかく、ユズルは僕と一緒にタマムシへ向かう。子供は家で留守番でもしてろ」

「へえへえ……あ、そうだユズルちゃん」

「なに？」

少女がポケットから何かを取りだして、私に渡す。しずくの形をした白い入れ物に、とても澄んだ色の水が入っていて、キラキラ光っている。その輝きに目を奪われていると、少女が得意げに笑って見せた。

「それさ、“しんぴのしずく”って言って、水タイプの技の効果を高めてくれるんだ。いつかメロンパンのひきこもりが治った時、つけて上げると良いよ」

「いいの？ こんな高価そうなもの貰っても……」

「いいよいいよ。俺はブラッキーしか使うつもりないから必要ないし、メロンパンが使うまではユズルちゃんがつけてて」

少女に貰ったしんぴのしずくを首から下げると、少女は嬉しそうな顔で頷いて、キリに向かってニヤリと笑った。キリがそれに反応して眉間のしわをますます深くする。強引に私の腕を取ると、ピジョットを繰り出した。

「さつさとタマムシに行くぞ！ 来い！」

「ええええええっ！？ 急ぎすぎじゃないの!？」

「そうだよ！ 男の嫉妬は見苦しいぞー？」

「誰が嫉妬だ！ もう黙れお前!！」

少女が茶化すと、キリは爆発しそうなほど顔を赤くして怒鳴った。無理やりピジヨットの背中に私を乗せると、ひらりと自分も乗る。

「ピジヨット、タمامシまで飛べるか？」

「ピジヨット！」

ピジヨットは力強く声を返し、すぐに飛び立とうとする。羽ばたこうとするピジヨットの周りに風が発生し、私は慣れない感覚にびくびくしながらも、初めてポケモンで空を飛ぶということに胸が高鳴った。

「ユズルちゃん、じゃあね！ またヤマブキにも来てくれよ！！！」

「うん！ 絶対行くからね！」

風に巻かれて黒髪を風になびかせる少女は、だんだんと小さくなっていく。こうして私はキリのピジヨットで、タمامシシティに向かったのだった。

と言う訳で、現在に至る訳だが。私とキリはエリカさんのいるタمامシジムに、キリの案内で来ていた。一度宿でチェックインしてから、エリカさんのいる時間に連れてきてもらった。エリカさんはタمامシ大学で教鞭もとっている忙しい方だが、出来るだけ挑戦者の相手を出来るようにと、いつも決まった時間にはジムにいるらしい。キリはもうタمامシのバッジはゲットしたらしく、分かりにくい位置にいるタمامシジムの場所を知っていた。

「ここがタمامシジムだ」

「……キリ」

「何だ」

私はタمامシジムの前にいる人物を凝視した。枯れ木のような身体に、ラフな格好。頭髪はとくに失われたらしく、僅かに残った毛が白く染まっている。

「あのおじいさん、何やってるの？」

老人は「フヒヒ」とにやつきながら、タمامシジムの中を覗いていた。

「覗きだろ。気にすることはない」

いや、気にするって。

「タمامシジムの方からも何度か注意したらしいがな。相手が老人だから強く出る事も出来ず、もう諦めているそうだ」

諦めちゃいけない事もあると思うんだが。

微妙な顔をしている私に、キリは達観した目できっぱりと言った。

「気にするな。気にしたら終わりだ」

「……分かったよ」

私はなんだか微妙な気分になりながら、タمامシジムに入っていた。

……なんだか後ろで「今日はポニテの女の子も見れるのか！ ええのう」とか聞こえた気がするけど、気にしちやいけない。

「こんにちは！ タمامシジムに挑戦にきた、マサラタウンのユズルですー！」

ジムの入り口で声を張り上げると、奥から「はい」と女の人の声が出て、こここのトレーナーであろう人が出てきた。

「挑戦者ですね……って、キリくんだー！！」
「げっ！」

長い髪の女の人はキリの名前を叫ぶと、逃げだそうとしたキリの首根っこを高速で掴んで奥に向かって大声で叫んだ。

「みんなー！ キリくんだよー！！ 来て来てー！！」

声に反応して、色々な女性の声が奥から返ってきて、数人が急いで飛び出してきた。

「え？ キリくん！？」「ほんと！？」「うっそお！」「待って待つて今行く！」「お化粧品道具つくろつとくわ！」「ちよつどよかつたわね」「買った物した後だったしね」「この服とか良いんじゃない？」「きゃあ可愛い！ 絶対似合うー！！」「ちよつと行ってくる」

「放せ！ 今すぐ放せーッ！！」

キリがじたばたと暴れているが、女性は「めんどくさいなあ」と言って、バタフリーを繰り出した。

「バタフリー、ねむりごな」

「なにす……ッ……すー……」

「これで大人しくなった」

女性はねむりこけているキリに満足そうな顔で頷く。私はものすごい勢いで流れていく展開についていけず啞然としていたが、そこでやっとハツとして、キリを奥へ連れて行こうとしている女性陣を引きとめた。

「ちよ、ちよつと何しようとしてるんですか!？」

「あら、挑戦者の子ね。申し訳無いけど、エリカさんはもうちよつと待ってね。すぐ来るそうよ」

「あ、どうも……じゃなくて!！」

女性の言葉に流しかけたが、幼馴染を見捨てるのは人としてアレなので、慌ててキリを引っ張っている女性の肩を掴んだ。キリはねむりごなでぐっすり眠ってるし、いつも通り私の斜め後ろで無言で控えているコーヒープリンは助ける気ゼロ。ここは私が何とかしないといけなさそうだ。

「大丈夫ですよ。彼の事は」

後ろから綺麗な声が聞こえて、私は勢いよく振り返った。肩口で切りそろえられた黒髪に、柔和な頬笑み、上品な物腰。まさに淑女といった雰囲気、私は女性の肩を掴んでいた手を思わず放す。なんか後ろの方でキリが運ばれていったが、私は気にしている余裕はなかった。なんだか女性としての理想形を見ている気分で、顔を少し赤くして姿勢を正し、ぺこっと頭を下げる。

「マサラタウンのユズルです。タمامシジムジムリーダー・エリカさんですよね？」

「ええ、そうですよ。本日の挑戦者ですね。こちらへ」

にこやかに笑って私の手を取り、バトルフィールドへと連れて行く。私はほわーとその歩き方まで優雅な様子に感動を覚えながらも、運ばれて行ったキリの事を思い出して、エリカさんに訊ねた。

「あの……キリは大丈夫なんでしょうか」

「はい、大丈夫です。ごめんなさいね、彼女達キリくんがお気に入りになってしまったようで……」

「いや、それはいいんですけど……」

まあ、エリカさんが大丈夫だと言っているのだ。本当に問題は無いのだろう。

このタمامシジムは綺麗な女の人がたくさんいるし、連れて行かれた（というか拉致）キリも男の子なんだから、綺麗なお姉さんに囲まれて悪い気はしないだろうし。

バトルフィールドに着くと、審判の女の人がエリカさんに頭を下げる。エリカさんは私の事を軽く紹介すると、バトルフィールドに入って行った。私もそれに続く。

「これより、タمامシジムジムリーダー・エリカVS挑戦者・ユズルの試合を開始します」

私はコーヒープリンに振り返って訊ねた。

「リン、出たい？」

コーヒープリンは無言で首を横に振る。出る気は無いらしい。

「使用ポケモンは2体の入れ替え戦。一匹が戦闘不能になった時点で試合終了とし、戦闘不能にした方の勝利とします」

私はメロンパンのモンスターボールを腰からとった。しかし、そこでふと我に帰る。

| | | |
|----------|----------|-----------|
| メロンパン進化前 | 体長・0.5m、 | 体重・9.0キロ |
| メロンパン進化後 | 体長・1.0m、 | 体重・22.5キロ |

……………投げられるだろうか。

冷たい汗が背中を流れた。しかし、試合はもう始まってしまつてしまつた。今更そんなことを考えても遅いと、私は覚悟を決めた。

「試合　　開始！」

私はメロンパンを繰り出す。相変わらずのひきこもりっぷりに涙が出そうだ。エリカさんは「まあ……………」と少しだけ驚いた顔をしていたが、すぐに余裕の笑みに戻る。

「タケシから聞いていますわ。何でも、変わったトレーナーが現れた、と」

「変わったトレーナー、ですか」

なんだか変な評価を受けている気がする。

「ふふ、楽しみにしてますよ。私の使うポケモンは　　これです！」

エリカさんが高くモンスターボールを投げる。空中で軽やかな音をたててモンスターボールが開かれ、中からポケモンが飛び出す。私はそのポケモンを見た瞬間、思考が停止した。

私の背丈よりも大きな、黄色いつぼ状の身体。

ピンク色の口元。

大きな3枚の葉っぱ。

くねる長いツル。

「あ……ああ……あああああ……」

足ががくがくと震え、顔からは汗が噴き出した。血の気が引いて真っ青になる私の脳裏に、あの出来事が蘇る。私の目の前にいる、あの、ポケモン、は

『ギョエエエエエエエッ！』

『キョエエエエエエエッ！……』

正しく、ウツボット。

「ぎゃあああああああああああああああああああッ
……！！」

ジム中を揺るがすのではないかと思われるほどの絶叫が口から飛

び出す。

トキワの森の悪夢の、再来だった。

T o b e c o n t i n u e . . . ?

第十一話 タムムシティ・前編（後書き）

悪夢再来のエリカ戦。はたして主人公の運命やいかに！

第十二話 タマムシシティ・中編

足ががくがくと震えて、奥歯がカチカチとなっていた。胸に何か石のようなものでも入っているのかと思う程に、ズンと重くなる。

上手く呼吸が、出来ない。

「……………どうなさいましたか？」

「……………あ……………」

エリカさんの声に、ハツとした。

今はバトル中だ。「そのポケモンが怖いから別のポケモンにしてください」なんてふざけたこと、言えるはずがない。ましてや、まともな状態で戦えないとなつては、バトルが中止になってしまうかもしれない。

嫌だ。それだけは絶対に。

「なん、でも……………ありません。問題もありません。バトルを始めてもらつて、結構です」

「本当に、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですッ！ 問題ありません！！」

エリカさんが心配そうな顔で訊いてきたが、震える拳を握りしめて悲鳴のように返事をした。しかしエリカさんは真つ青な顔の私に、ただ事ではないと思つたのか、審判に告げた。

「バトルは少し待って下さいな。大丈夫そうには見えません、休憩室の方に行きましょう」

気遣ってくれるのは嬉しいが、多分これは休んだからといって落ち着くものではない。

記憶に刻まれたトラウマは大きくて、根深い。むしろ時を空ければ空ける程、緊張と恐怖は肥大していくのではないだろうか。

「休憩はいりません。お願いします」

「ですが……」

未だ引く様子の無いエリカさんの目を真っ直ぐに見る。声は震えていたが、私はハッキリと言った。

「バトルを、してください」

エリカさんが、じっと私を見つめ返す。長い沈黙の時間に、冷や汗が流れた。

「……分かりました」

エリカさんが真剣な顔で頷いた。審判に向かってもう一度頷き、元の立ち位置に帰って行く。そして私の方をもう一度見ると、言葉を付け加えた。

「ただし、不味いと判断したらすぐにバトルは中止にします。いいですね？」

「はい」

私が頷くと、審判の人がサツと旗を上げて宣言をした。

「試合

開始！」

その宣言と共に、私は本能的にメロンパンを抱えて走りだした。その判断は正しかったらしく、すぐにエリカさんの声がジムの中に響いた。

「ツルのムチ！」

一瞬前までいた場所を幾条ものツルが叩いた。何重にも重なって聞こえる床と激突する音は、ヒットした時のことを想像するだけで痛そうだ。

私はメロンパンを抱えて走るが、背後から追いかけてくるツルのムチの方が早い。これが進化前だったのならまだ大丈夫だったのだろうが、今は持っているだけで手が震えて、走る速度が落ちる。

「キョエエエエエエエツ！」

「ッ！」

視界に入れないようにしていたウツボットが奇声を発した。その声に呼応するかのようになり、耳に張りついた音が、声が、蘇ってくる。

肉を裂く音、何かを絞り取るような不快な断続音、先の見えない闇のような瞳

頭を振ってその声を振り払う。早く投げなければ。ズシリと重いメロンパンを振りかぶろうとして、よろよろと片手に持ち替えたが、汗によって手をすり抜けて床に落下した。

「あ……ッ！」

固い甲羅と床が激突する。慌てて取ろうとした私の前に影が差し

た。身体が石になったかのように動けなくなった私と、落ちたメロパンにかかる影の主は、大きく吼えた。

「キョエエエエエエエツッ！」

忘れられるはずがない。振り払えるはずがない。

身体の芯まで刻まれたトラウマから、逃げられるはずもない。

「キョエエエエエエエイツッ！」

『キョエエエエエエエイツッ！』

壊れたテープレコーダーのように、耳元で聞こえないはずの音が何度も再生される。

「……ッ！ア……ッあア！！」

たまらず目を閉じて、耳を両手で塞いだ。消えない音、耳に残る肉を裂く音、あの恐怖。身体から力が抜け、カクンツと膝が折れてその場にへたり込む。噛みあわない奥歯がカチカチカチと止まらない震えを訴え、浅い呼吸に息苦しさを覚えた。

「キョエエエエエエエイツッ！」

『キョエエエエエエエイツッ！』

ガリガリと耳を引っ掻いた。こんな耳いらぬ。聞こえないはずのあの声を捉えるこんな耳、無くなってしまえばいい。血が出ようと、激痛が走ろうと、筆り取ってしまえばいい。消えてしまえ、こんな声、音。

「キョエエエエエエエイツッ！」

『キョエエエエエエエイツ！』

消えない、消えない、消えない！

耳に残るあの音が、消えないんだ！！

「いやあああああああああああああッ！！」
「ユズルさん！」

エリカさんの声を最後に、私は意識を失った。

「おい」
「……」

キリがため息をつくのが聞こえたが、私はそれを無視して膝を抱える。頭の中は後悔と敗北感で一杯で、どうにもならない思いがぐるぐると渦潮のようになっていた。

なんで。

どっしって。

どっしいたらいいんだ。

それらの言葉が、頭の中を何度も行ったり来たりしているけれど、まるで答えなんて見つからなかった。タケシさんに勝って、マチスさんに勝って、ナツメさんに勝って、負けることなんてあり得ないと心の何処かで感じ始めていたのだろう。今の私はキノコが生えていてもおかしくないほどに落ち込んでいた。

タمامシシティの中心部にある、公園。噴水の周りのベンチに座っているはずなのに、何処か遠くで噴水の水が流れているように感じた。何もかも、遠い。走りまわる子供の声も、若いトレーナーの声も、続くポケモンの鳴き声も。

遠い。

「おい、いい加減にしろ。いつまでそうしてる気だ」
「……」

二人の間に流れた沈黙を破って、キリが怒ったように、そして少しだけ困ったように私に言った。それでも私は無言でうずくまったまま。

あの時、エリカさんとのバトルで、私は気絶した。

顔は真っ白で血の気がなく、掻きすぎた耳からは血が出ていたそうだ。メロンパンで戦うどころか投げることすらできず、無理を言っただけでもらったバトルは、まともなバトルにすら成らなかった。メロンパンをモンスターボールに戻し、気絶した私を背負ってキリはタمامシのジムを出た。そして、私は公園で目を覚ました。

移動してくれたキリには、お礼の言いようがない。エリカさんはジムで休むことを提案したそうだが、あのままあそこにいればまた同じことになっていただろう。

キリがジュースを飲み終えたらしく、缶をゴミ箱に捨てる音がした。ここを去るつもりなのだろうか。そう思った矢先、モンスターボールから何かが飛び出す音がした。

「フリーデイン、念力」

「っ!?! わああああああああああああっ!?!」

その声と共に私の身体がふわりと浮き上がり、うずくまっていたらなくなつた。バタバタと空中で暴れるが、念力がそんなことで解けるはずもない。キリは私が完全に浮かび上がったのを確認すると、フリーデインを引き連れてスタスタと何処かへ向けて歩き始めた。

「……………何処行くの」

抗う気力も無かつた私が疲れ切つた声で訊ねると、キリは振り返らずに短く答えた。

「お前の家」

「……………はあ!?!」

私の意識は一気に浮上した。家に帰る? ここまで来て、連れもどされる?

「じよ、冗談じゃないよ!」

私はバタバタと全力でフリーデインの念力に抵抗した。どうにもならない事なんて分かつてるけど、このまま大人しく連れ帰られるなんてまっぴらごめんだ!

コーヒープリンも同じ気持ちだと思つて見つめるが、予想に反してキリを止めなかつた。感情の読めない赤い眼差しで、キリを見て

いるだけだ。

「そのままにいるんだったら、旅なんてできない。家にいても同じだろ」

「そんなことない！」

私は何とか空中遊泳して、浮きながらもキリの胸倉をつかみ上げる。コーヒープリンが助けに来てくれないなら、自分で何とかするしかない。キリは真顔で私を見返した。

あの時のトキワで見たのと同じ、冷えた眼差しだった。

「私は、ニビで勝った！」

「そうだな」

キリが淡々と答えた。

「クチバだって、マチスさんに勝った！」

「ああ」

胸倉をつかむ手に、込められるだけの力を込める。キリの声音は変わらない。

「ナツメさんにも何とか勝って、ここまで来たんだ！」

「その通りだな」

「それがどうした」と言わんばかりのキリの態度に、頭が沸騰しそうなほどに怒りを覚えた。どうして連れ戻すのだと言っただ。やっこの思いでここまで来た。死にかけて事も、恥ずかしかった事も、もうだめかと思っただ事もあった。

それでも、私たちは勝ち抜いてきた。

「だから、エリカさんにも必ず勝つ！」

私が噛みつかん勢いで叫ぶと、キリのフーデインがふわりと私を下ろした。突然地面に下ろされた私は思わず転びかけたが、キリがよたついた私の腕を取って自分の方へと顔を向かせた。

「だったら、こんなところでいつまでも落ち込んでいる暇はない」

キリは真剣な顔をしていたが、直後にニヤリと笑った。私はそんなキリをポカンとしながら見上げる。

「勝つんだろ」

キリの言葉に、私は顔を引き締めて笑い返した。

「当然！」

「そのポニテの女の子。俺とバトルしてくれないか？」
「へ？」

キリ流の慰め（本人は否定したので多分だが）に寄って回復した私だったが、いきなりおじさんに声をかけられた。短く刈り込まれた黒髪に、Ｔシャツとジーパンのさっぱりした格好の人だ。私は唐

突過ぎて驚いていたが、キリはおじさんに向かって一歩前に出た。

「悪いがこいつは今不調だ。オッサンの相手なら僕がしてやるよ」「オッサン……………」

おじさんがキリの言葉にうなだれる。そんなにオッサン呼ばわりがショックだったのだろうか。

「せめてこいつの事は、お兄さんと呼んであげてくれないか？」

おじさんの後ろから、小さな姿が飛び出す。こちら黒髪黒目をした、背の低い少年。大柄なおじさんと比べると、親子のように見える。

「息子にいいところを見せたいとかいうところか？」

「息子オツ！？ こいつが！？」

更にダメージを受けたらしく、おじさんはジメジメとしたオーラを纏いながら、膝を抱え始めた。「俺なんて………… オッサンだよ………… どうせ…………」とぶつぶつ呟いているおじさんを一回りも年が違いそうな少年が「元気出しなよ…………」と慰める様子は、かなりシニールだ。

「やるのか、やらないのか。早くしろ」

しびれを切らしたキリがいらいらした様子でおじさんに言った。しばらく復活してこなさそうなおじさんに代わって、少年が答えた。

「悪いけど、君じゃ意味がないんだ。ひきこもりのゼニガメを連れて彼女じゃないと」

「わ、私？」

戸惑いながら自分を指差すと、少年が頷いた。キリは何か引つかかったらしく片眉を上げる。

「なんでこいつのゼニガメがひきこもりだと知ってる」

「さてね。少なくとも俺たちは敵ではないよ」

「どうだか」

キリは納得がいかないとばかりに、冷やかに吐き捨てた。少年はやけに芝居がかった口調で、やれやれと肩をすくめて見せる。

「敵じゃない……俺は」

ようやく復活したらしく、おじさんがよろよろと立ちあがった。3人全員が注目する中、おじさんは魂の込めて叫けぶ。

「元ひきこもりとして、ひきこもりの手助けをしたいだけだーッ！」

キリが硬直した。私は何を言ったのか直後には理解できず、目をパチパチさせる。少年は顔に手を当てていた。

「ひきこもりですって……」「やあねえ」「なんてことを叫んでるんだ……」「良い年にもなって」「ポケモンは良いけど人間は……」「漢だ……」「何考えてるんだ？」

叫んだおじさんに、一気に公園中の視線が集中する。普通ならあまりのいたたまれなさに、逃げ出すはずなのだが、おじさんは一味違っていた。

「ふ、ふふふふふふ………ははははははははははッ！」

笑っていたのだ。公園のと真ん中で、腰に手を当てて。

「緊張が極限にまで達して、ハイテンションになってやがる………」

反対に、少年の方は真っ赤になってしゃがみこんでいた。かなり恥ずかしいらしく、耳まで真っ赤になっているのが良く分かる。

「ポニテ少女！ いや、ユズル！！」

「はい！」

おじさんが、まだ名のつてないはずなのに私の名前を叫んで、私をものすごい勢いで指差した。「なんだなんだ」とこの騒ぎに集まって来た人たちも合わせて、私にもものすごい数の視線が突き刺さった。

どうしよう。逃げたいけど逃げたらいけない気がする。

さっきまでならともかくとして、このハイテンションな状態のおじさんだったら、高笑いを上げながら何処までも追いかけてきそうだ。正直言つて怖すぎるし、そんなことになるくらいだったらここで大人しくバトルを受けた方が百倍マシだ。

「だれかあっ！お客様の前に審判様はいらっしゃいませんかー！」

お客様で。審判様で。

変な聞き方をするおじさんの声に反応して、観衆の中から手がい

くつか上がった。その中で私たちの一番近くにいた女の人が、和の中に飛び込んでくる。

「はい！ 私審判やります！」

「おっしやあつ！ 美人！！」

おじさんがガッツポーズを決めると、少年はますます縮こまった。彼も既に観衆の注目を集めているので逃げるわけにもいかないらしい。まあ逃げる以前に、同じくものすごく恥ずかしいキリが彼のきていた上着のフードをがっちりつかんでいるので逃げられるはずもないのだが。死なばもろともということのようだ。

「使用ポケモンは一体！ どちらかが倒れたらそこで試合終了だ！」

おじさんが高らかにルールを告げる。今はメロンパンを投げる事が出来ないので、コーヒープリンで行くしかない。だが私がコーヒープリンに声をかけるよりも先に、おじさんが条件を追加した。

「ただし、ユズルにはカメールを使用してもらう！」

「ええッ!？」

おじさんの言葉に驚いていると、彼はなんだかいつちゃってるが真剣な眼差しで続けた。

「これはひきこもりを何とかするためのバトルだ。カメールに出てもらわなくては困る」

「でも……」

確かにそうなのだけど、まだ私はどうしたらいいか分かっていな

い。それなのにメロンパンを戦わせる訳にはいかなかった。

「切羽詰まってこそ出る考えもあるだろう！ 考えてるだけじゃ、何も分らないぞ！」

「！」

おじさんの言葉に私は目を見開いた。思い返してみれば、確かにそうかもしれない。タケシさんと戦ったときの高速スピンドって、その時に思いついた技だ。

おじさんは更に拳を振り上げて熱く語った。

「走り出せ！ 考えてる暇なんてない。戦うしかないんだ！！」

「はい！」

その熱さに私は何かを感じて、同じように拳を振り上げる。そしてメロンパンの入っているモンスターボールを手にとると、大きく放った。おじさんも同じようにモンスターボールを放る。

うなる熱気が公園を支配する。審判のお姉さんもニヒルに笑って、その手を高く上げて宣言した。

「試合 開始！！」

To be continue ?

第十二話 タムムシティ・中編（後書き）

なんだかウツボットが怖くなる人が出そうですね。私は結構好きなんですけど……ウツボット。

第十三話 タمامシシティ・後編

ここに足を踏み入れるのは、二度目だ。

私はタمامシジムを見上げ、拳をきつく握った。一度目の挑戦の時、これ以上ないほど無様に負けて、キリに連れ帰られたこの場所。ウツボットはまだ怖い、けど。メロンパンが頑張ってくれた。コーヒープリンだつてついでる。

「……覚悟は決めたか？」

右隣に並ぶ、キリが訊ねる。

「“訊くまでもない” って顔かな」

左隣に並ぶ、少年が気取って言った。

「行くぞ、ユズル！」

私の前で手を差し出した、おじさん。私は深呼吸をしてから、その手をしっかりと握った。

「はい、師匠！」

今度は、負けない。

「試合 開始！」

その合図と共に、お互いのモンスターボールが大きく放られる。私のモンスターボールからは当然カメールが、そしておじさんのモンスターボールからは、ベトベターが飛び出した。テンション高めのおじさんは誇らしげにベトベターを紹介する。

「俺とこいつの友情は誰にも負けんぞ！ 雨の日も、風の日も、共に苦しみ、共に泣き、そして乗り越えてきたんだ！！」
「実際そうだよな。ホームレス時代からの付き合いだし」

おじさんが涙を流しながら力説する言葉に、少年が疲れた顔で付け加えた。ホームレスという言葉くらい、私でも意味を知っている。おじさんは一体何をやったんだろう。

「おじさん、一体貴方の人生に何があつたんですかー！」

私がおじさん呼びかけると、おじさんは更に拳を握りしめてベトベターと抱き合った。

「よくぞ聞いてくれた！ 俺とエドモンドの出会いはな、俺がトリップしたて「うわあああああつ！ わー！ あんなところにミュウがっ！！！」

語りだしたおじさんの言葉を遮って、少年がものすごい勢いで空を指差した。それにつられて空を振り仰いだ人も何人かいたようだが、大半の人は私も含め、同じ疑問を抱いているようだった。

「ミュウ？　どんなポケモンだ？」

少年を捕らえているキリが代表して少年に問いかける。少年は「しまった！」という顔で、脂汗を流しながらあらぬ方向に視線を飛ばし始めた。

「あー、うー、ええつと……」

「……最初から怪しいと思っていたが、どうにも変だなお前」

キリが半眼で少年に顔を近づけた。少年は必死で目を逸らしているが、キリの妙に圧迫感の感じる問いかけに、滝のような汗が止まらないようだ。

「俺の話を聞けええええつ！！」

しかし、少年が口を割る前におじさんが絶叫した。観衆の注目とキリや私の視線がおじさんに戻る。横目で少年を見ると、ほっとしたように胸を撫で下ろしていた。

「俺とエドモンドの友情は、誰にも破らせん。かかってこい、ユズルよー！」

おじさんのベトベターの名前は、エドモンドと言っらしい。おじさんは拳を私の方に突きだして、エドモンドに指示を飛ばした。

「ゆけえツ！　エドモンド、ヘドロ爆弾！！」

「！」

しまった、反応が遅れた！

メロンパンを狙って次々とヘッド爆弾が向かってくる。抱えて走りだすには遅すぎる。私はメロンパンに覆いかぶさるように抱きしめた。

「わあああああああつ！！」
「ユズル！」

キリが叫ぶ声が聞こえた。石畳に、背中に、頭に、雨のように降り注ぐヘッド爆弾が熱い。時間にして数秒の出来事だったのだろうが、私には数時間のようにも感じられた。

煙をあげる石畳に、熱を持つ背中。鞭で叩かれた後に唐辛子でも擦り込まれたような激痛が走った。よろけながらも何とかメロンパンを抱き上げて立ち上がるが、視界が恐ろしくぶれる。目の前にいるはずのおじさんが何人もいるように見え、地面が揺れている。

「邪魔をするなコーヒープリン！」
「……」

視界の端で、鬼気迫った顔つきのキリと無言のコーヒープリンが、戦っているのが見えた気がする。良く見えないが、どうやらコーヒープリンがキリを糸でグルグル巻きにして抑え込んでいるようだ。

「おいやりすぎなんじゃ」「立て、ユズル！」

焦る少年の声を押しつけておじさんがまたも叫んだ。その声に少しだけクリアになってきた頭を振っておじさんを見据える。

「メロンパンを構えろ。お前なら、まだ投げる事自体は出来るはずだ」

「それは」

確かに、投げる事自体は可能だ。けれど相手に攻撃が加えられるほどに、スピードを乗せられるかと言えば話は別だった。

私がためらっていると、おじさんは今度はややきつい口調で言い放った。

「投げるんだ、ユズル！」

「っはい！」

その声につられて、思いっきり両手でメロンパンをベトベターに向かって投げる。だが当然スピードなんて出せるはずもなく、高速スピンというよりはただ投げただけの形でメロンパンはベトベターの身体に突き刺さった。

「ああ……ッメロンパン！」

「……」

メロンパンは無言のまま、少しずつベトベターの身体に沈んでいく。そんなメロンパンを見ながら、おじさんはまたも言った。

「このままでいいのか、メロンパン」

「……」

メロンパンは答えない。そのままベトベターの中に沈んで行くだけだ。私が思わず助けようと走りだすと、少年がモンスターボールから何かを取り出した。

「え……」

「キョエエエエエッ！」

聞き覚えのある声に、私は思わず立ち止った。視界の端にうつるあの姿は、間違いない。

ウツボット。

「いやああああああああっ!!」

私はその場にしゃがみこんだ。そんな私を一瞥した後、おじさんはメロンパンに語りかけ続ける。

「ひきこもりの気持ちは誰よりも知っている。だから、“出て来い”なんて残酷な事は言わん。だが、ひきこもっていても出来ることはあるはずだ」

早く、早く助けなければと自分を叱咤するが、身体が動かない。言う事を聞いてくれない。そうしている間に、トプンっと、メロンパンの身体がベトベターに完全に沈みこんだ。

もう聞こえているかどうかも怪しいのに、おじさんは沈みこんだメロンパンに最後の言葉を言った。

「漢を見せて見る! メロンパン!!」

その言葉に呼応するように、ベトベターの身体が突然大きく膨れ上がった。中から何かに押されているようで、一瞬後には、その身体から水流が迸った。

「カメエエエエエエツ!!」

叫びと共に、メロンパンが回転しながらベトベターの身体から飛び出した。まさか出てこれるとは思わなかった為、私は目を見開く。

メロンパンが放った水流は噴水のように観衆やバトルしている私たちにも降り注ぎ、その冷たさに頭が完全にクリアになった。

「メロンパン！」

「カメツ！」

メロンパンは身体の四つの穴から水流を迸らせて回転し、石畳に着地するとギョルギョルと水流を減らしていつて止まった。からはこもったまま、身体を出さずに返事をするメロンパンに、私は無事を確認して張りつめていた息を吐いた。

「……ッ！ ベト……ベ……」

体の内側からの攻撃に耐えきれなかったらしいベトベターが、穴だらけの身体を一度大きく震わせる。目を回しながらその身体がどろりと広がって、動かなくなった。それを見とめると、お姉さんはサツと手を上げて宣言した。

「勝者、ユズル！」

ワアアアアアアアアアアッ！！

その宣言と共に、少年がウツボットに指示を出した。

「もう戻っていいぞ、メタモン」

「……メタモン？」

私はその言葉に目を丸くして、ウツボットから目を逸らすのを止める。ウツボットの身体はもこもことピンク色に染まっていき、不定形になっていく。元の姿に戻ると、くりくりとした可愛い瞳

を動かして、少年に笑顔っぽいものを向ける。

「メタ」

「え？ 嘘、メタモン！？」

ウツボットではないと分かったとたん、私の身体に力が戻ってくる。まだ背中はひりひりするが、メロンパンの放った水流の一部を被ったおかげでマシになった。

「ユズル！」

おじさんがエドモンドをモンスターボールに戻して、私を見た。その目はやりきった顔で、とてもすっきりしている。

「どうしても苦手なものは苦手なままでいいんだ。一人で戦おうと思っいな」

私がよろけながらも着地したメロンパンに駆け寄ると、おじさんもゆつくりとこちらに歩み寄って来た。メロンパンを抱きしめながらへたり込んだ私の頭を撫でると、おじさんはこれ以上なく優しく笑う。

「そんなお前を助けるために、仲間がいるんだから」

頭を撫でられて、私の目から涙がこぼれた。そのまま泣きじゃくる私の頭をおじさんは撫で続ける。

「ひつく、うえ……うえええええん………」

止まらない涙が、後から後から零れてくる。そのまま私は涙が止

まるまでおじさんに、頭を撫でられ続けたのだった。

ジムの中に入っていくと、エリカさんが出迎えてくれた。驚いている私に何も言わず、エリカさんは私の手を引いてバトルフィールドへと先導した。

フィールドの所定の位置にエリカさんが着いたのを見て、私も無言で自分の位置につく。前と同じ、まったく変わっていない景色。けれど今は負ける気がしなかった。

「今度は大丈夫ですか？」

「はい！」

エリカさんの問いかけに、私はすっかりとした声音で答える。そんな私の顔から何かを感じ取ったのか、エリカさんが上品に笑った。

「ひとつ、ふっきれたようですね。これで私も安心して戦えます」

照れたように笑い返すと、エリカさんは審判に目配せする。その時に初めて気がついたのだが、審判のお姉さんはおじさんと戦った時の人と同じだった。

「今回もよろしくね。ユズルちゃん」

お姉さんはウィンクすると大きく息を吸って、お決まりの言葉を宣言した。

「使用ポケモンは二体の入れ替え戦。ただし、一体が戦闘不能となった時点で、戦闘不能にした方の勝利とします」

私とエリカさんがモンスターボールを構える。一瞬だけ振りかえると、そこにはおじさんと少年がいて心強く感じた。ちなみにキリはまた攫われたのでいないよ！

「試合　　開始！」

お互いのモンスターボールが、同時に空中で開かれる。エリカさんも私も前回と同じように、ウツボットとカメール。

「キョエエエエエッ！」

ウツボットが奇声を上げる。その声を恐ろしいとは感じるもの、不思議と落ち着いている私が出た。

「……………」

ポケモンを出したまま、無言で睨みあうエリカさんと私。お互いに、勝負は一瞬で決まると感じているようだ。

私の心はとても澄んでいた。視界にははつきりとウツボットが収まっているというのに、私は全く動揺していない。このエリカさんとのにらみ合いの時間を、むしろ心地よいとも感じていた。これまでにない高揚感が胸を支配している。

沈黙の時間を破ったのは、同時だった。

「ウツボット、ハツパクター！」

私は感極まった声を上げて、メロンパンに駆け寄った。メロンパンを抱きしめようとするが、そこでメロンパンの様子が少しおかしい事に気がつく。

「……………」

「メロン……パン？」

メロンパンは立ったポーズのまま動かない。動かないというか、石のように固まっている。そうつとその頭を小突いてみると、そのままのポーズで後ろに転がった。

「いい勝負でしたわ。ジムバッチを……あら？」

さすががしい笑みを浮かべて歩み寄って来たエリカさんも、訝しげな目をしてメロンパンを見る。少年とおじさんも私たちの様子がおかしい事に気がついて、駆け寄って来た。

おじさんはメロンパンを見て言った。

「…………… 気力を振り絞りすぎて、気絶しているようだな」

「…………… 八八」

私は渴いた笑いを上げてその場に座り込んだ。頑張ってくれたメロンパンを撫でていると、コーヒープリンが私を見詰めていることに気がつく。

「見守ってくれてありがとう、リン」

「スピ」

コーヒープリンは恐らく、私が乗り越えなければいけない事を理

解し、見守っててくれた。それはきつと、手を出すよりも精神力のいる事だったのではないだろうか。

私は今まで、気負いすぎていたのだと思う。しっかりとしなければ、私が何とかしなければと、無理をして大人になろうとしていた。

一人で頑張る事はすごい事かも知れないが、絶対に何処かで無理が出てしまう。確かに人に頼むということは、一人で頑張るのと同じくらい勇気のいることかもしれない。

それでも一緒に戦うことを選ぶのなら、きつと私たちは何処にだって行ける事だろう。

T o b e c o n t i n u e ?

第十三話 タムムシティ・後編（後書き）

書き終わったー！こいつらものっそい青春してますね。何処まで爽やかなんだ。

第十四話 セキチクシティ・前編

「おにーさあーん。私達どーなるんでしょーねえー」

「兄さん知らねえ」

私は隣に座っているお兄さんに声をかけたが、お兄さんは投げやり
りに返答した。

「このままだとどうなるんですかね」

「さあな」

会話終了。

「お兄さん、もっと会話のキャッチボールしませんか」

「しねえ」

ピチョンつと、洞穴の天井から垂れてきた水が入り口で跳ねた。私
たちはそのまま無言でその場に座り続ける。続かない会話に寂し
くなってきた私だったが、お腹も寂しくなってきたので、ポケ
ットから潰れたおにぎりを取りだした。

右手に梅、左手に昆布！

「ぶがほじつはぐ」

「……兄さん人語しか理解できないんだけど」

おにぎりに欲望のままかぶりつき、お兄さんにもう一つを差しだ
す。しかしお兄さんはひらひらと手を振った。

「あー……。いらな「ぐー」……。何だその効果音」

おにぎりを飲み込んだ後、お兄さんの言葉を遮って私はお腹の音の声真似をした。お兄さんは呆れた顔になる。

「お兄さんの腹の音」

「いや、ユウ坊が自分で言っただろ」

「予想音だから間違ってないよ」

間髪いれずに指摘すると、お兄さんの腹が同意するように盛大になった。お兄さんはため息を一つつくと、私に右手を向ける。

「……くれ」

「どっぞー」

大人しくおにぎりを要求したお兄さんに、私は笑顔で手渡した。

“セキチクは ピンク 華やかな色”

「セキチクシティ、とうちャーく！」

「スピッ！」

横でブブブブと飛んでいるスパアが返事をしてくれる。メロパンはカメールに進化してから持って歩くのが困難になったから、モンスターボールの中でお休みです。

タمامシティでエリカさんとのバトルに勝ち、おじさんと少年

に見送られてタمامシを出てから、一週間。流石にタمامシからセキチクは遠い。キリのピジョットに乗せてもらえればよかったのだけれど、「言っただろう。タمامシに用があったただけだ」と言っ
てあっという間に飛び去ってしまった。ドライな奴だ。

そして劇的なバトルを繰り広げてくれたメロンパンですが……。

ひきこもりは治ってません。

メロンパンは根性出したけど、気力を使い尽くしてバタンキュー。目覚めたらまたひきこもり生活に戻って行きました。もうひきこもりが染みついてしまっているのかもしれないと、恐ろしい考えに頭を横に振る。いやいや、大丈夫だってば。

まあ何はともあれ、やってまいりましたセキチクシティ！ とい
う訳でジムに私は突撃していった訳なのだが

「ジムリーダーが不在？」

眉を潜めると、ジムの近くに住んでいるお姉さんは困った顔で言
った。

「そうよ。何でも“武者修行に行ってくるでござる！”とか言っ
てアンズさん、ジョウトの方に出かけちゃってるのよ」

「じゃあジム戦は……」

「出来そうにないわよ」

そんな馬鹿な。

私があつくりと肩を落とした。ジョウトの何処らへんにアンズさん
がいるかなんて分からない。気長に帰ってくるのを待つしかないの
だろうか。しかし武者修行というからには、ちょっとやそつとじゃ

帰ってこない気もする。

私があまりにも落ち込んでいるため、お姉さんは慌てて付け加えた。

「あつても代理の方はいらっしやるわ！ 長くジムリーダーが不在になる時は、代理をたてる事があるのよ。その人に会ってきたらどうかしら？」

「本当ですか!？」

ものすごい勢いで顔を上げ、鬼気迫る表情でお姉さんに詰め寄る。お姉さんは顔を引き攣らせながらも、頷いてくれた。

「え……ええ。ケンゾウさんっていうんだけど、今ならサファリにいるんじゃないかしら」

「了解！ 感謝します!!」

「え、ちょ」

お姉さんの制止の言葉も聞かず、私は走りだした。目指すはサファリパーク。ジムに来る途中で看板を見かけたから、そこまで戻っていけばいい。サファリパークはバトル不可だけど、珍しいポケモンが取り放題の施設のことだ。

“ サファリパーク ”

「こっちか！」

案内板にそってサファリへ猛ダッシュする。しばらく走ると“レアポケモン捕まえるならサファリパーク！”という看板を見つけたので、その横の入り口に飛び込んだ。

「すみません、ケンゾウさんいますか!？」

「サファリパークへようこそ！ 捕獲コースになさいますか？ 観覧コースになさいますか？」
「ケンゾウさんコースで！」

案内のお姉さんは笑顔で私に対応する。反射的に答えると、にっこり笑顔で繰り返してきた。

「捕獲コースになさいますか？ 観覧コースになさいますか？」
「いやあの……ケンゾウさんいらっしやっていますか？」

その妙な迫力に押されて、やや声を小さくしてもう一度訊ねる。今度はお姉さんも問いを繰り返したりせず、答えてくれた。

「ケンゾウさんなら、観覧コースにいらっしやいますよ」
「ありがとうございます！」

お礼を言ってまたも走りだそうとすると、お姉さんに服の端を掴まれた。何かと思って振り返ると、にこにこ笑いながら掌を見せて一言。

「通行料」
「……はい」

私はきっちり500円払い、ポケモンも預けてサファリの観覧コースに入って行った。

「どーしてこーなるのっ」
「ユウ坊が考えなしに突っ込んだからだろうな」

お兄さんの冷たいお言葉に涙が出そうです。いや確かに私が悪かったんですけど。

サファリの観覧コースに入ってしばらくすると、森の中に男の人の姿が見えた。工事のあんちゃんよろしく、手ぬぐいで頭を覆っていて、薄汚れたツナギに白いランニングシャツ。観覧コースは人が森の中に入れないようになってはいるはずだから、ケンゾウさんと瞬時に判断して私は手を振った。

「おい！ ケンゾーさんっ！」

タイミングが最悪だったことにも気付かずに。

「ッ馬鹿！」

「え？」

その時だった、ケンゾウさん（仮）の向こう側の木々がベキベキと音をたてて倒れたかと思うと、大きなポケモンが姿を現す。薄鼠色の身体に装甲のような身体、一本の大きな角が特徴的なサイドン。

「ゴオオオオオオッ！」

サイドンが大きく足を上げて、大地に下ろすのを繰り返す。“じしん”だ。地面が大きく揺れ、同じく揺れる乗り物から私はほっぴり出された。

『んきゃあああああッ!?』
『ッ!』

そしてお兄さんに抱きとめられ、今に至る。ちなみにお兄さんのポケモンだけど、一体しか持ってきてなかった上に、サイドンが去り際にモンスターボールを回収していくという頭脳プレイしたから、今はないんだよ!しかもモンスターボールから手を放しちゃったのは私を抱きとめるため、お兄さんはケンゾウさんじゃなくてその兄ケンサクさんだったというオチつきさ!

「その節は大変ご迷惑をおかけいたしました」
「なんでいきなり土下座ってるんだ」

お兄さんが食べ終わるまで自分の行動を振りかえっていたら、死にたくなってきただけです。

「過ぎた事言っても仕方ねえだろ」

ああああああつ! 良い人だけに罪悪感がひしひしと!!

私が罪悪感に苛まれて沈んでいる間に、お兄さんはおにぎりの残りを嚙下した。私の様子を見て、またため息をつく。

「俺たちが戻らねえとなれば、救助隊もくるだろうよ。たかがそれまでの辛抱だ。めんどくさいから落ち込むんじゃねえよ」

「……はい」

め、めんどくさい……。そこまで言われては、もう迷惑はかけたくない私は落ち込むのを止めるしかない。ほっぺたを叩いて気持ち

を切り替えると、お兄さんも頷いた。

「じゃあとりあえず、ここで」

お兄さんが何か言いかけて、動きを止めた。その様子に嫌な予感を覚えた私は、そうつと後ろを振り返る。そこには当って欲しくない予想通り、サイドンさんがいらっしやった。

「こ、こんにちはー………?」

へらつと笑うと、サイドンもへらりと笑い返す。「あ、これもしかしたらイケるかも?」と思ったのも束の間、サイドンはものすごい勢いで咆哮した。

「ゴオオオオオオオオッ!」

追いかけてっこinnサファリの開始の合図だった。

「逃げるぞ!」

お兄さんがとっさに私の手を掴んで走りだす。転びそうになりながらも必死についていくが、後ろからズシンズシンと予想外に早いペースの足音がついてきていた。悲鳴が出そうになるが、ちよつと早いだけで問題はない。このまま走りつづければ逃げ切れる!

と、思っていた時期が私にもありました。

「ゴオッ!」

サイドンは大きく吼えると、地面を大きく揺らし始めた。ただで

さえ足場の悪い森の中だ。私とお兄さんは揺れに耐えきれず一緒に転んでしまう。

「わあああああつ!?!」

「くそっ!」

お兄さんの手が放れ、ごろんごろんと私は転がって行く。サイドンは私にターゲットを決めているようで、真っ直ぐに私に向かって走って来た。このまま死ぬ気はさらさらない私は、転がり落ちた先で即座に起き上がる。だがサイドンは既に目の前まで来ていて、脳内に“サファリ内で少女死す! サファリ園長はこの問題を重く受け止め ” という嫌な一面トップがよぎった。

「ユウ坊!」

お兄さんが走ってこちらにこようとするが、サイドンの目がギリりと光った。私はほぼ直感的にお兄さんに叫ぶ。

「止まれ!」

「ゴオオツ!」

お兄さんは私の言葉に反射的に止まり、その直後にサイドンがきたい岩石をいくつもお兄さんに向かって飛ばした。

「うわっ!?!」

「お兄さん!」

サイドンのロックブラストによって、お兄さんのさっきまでの進行方向は岩石に埋まった。その様子にぞっとすると同時に、お兄さんが無事であることに胸を撫で下ろす。反応が後一秒でも遅かった

のなら、お兄さんは間違いなく生き埋めになっていたことだろう。

「ユウ坊！　すぐ行くから心配すんな！！」

お兄さんが心強い言葉をかけてくれるが、その言葉はすぐに実現不可能となった。サイドンが近くの木という木をへし折ると、次々とお兄さんと私の間に放り投げ、壁を作り上げたからだ。なんだこの頭脳プレイ。作為的なものを感じるよ！

「お兄さん！　生きてますかあああつ！！」

「死んでたまるか！」

一応壁の向こうからお兄さんに声をかけると、返事がすぐに帰って来たから大丈夫そうだ。ふう、と息をついていると私の周りが突然暗くなった。「あ、嫌な予感」と思つて顔を上げれば、そこにはサイドンいて、静かに私を見下ろしていた。

やられるのだろうか。そう思ったが、その目を見ているうちに私は何か違和感のようなものを覚えた。違和感と既視感。その両方が混在した瞳。私は何処かでこれと似たような目を見た事があるような気がする。

「……………」

ゆっくりと見つめ合う。記憶を遡って行くが、中々見つからない。既視感の正体は掴めないが、違和感の意味を何となく感じ取った私は、気がつけばその意味を言葉にしていた。

「ねえ君　　本当は傷つける気、ないんじゃない？」

その言葉にサイドンの身体が一瞬だけ揺れる。サイドンの瞳には、

トキワの森でのウツボット達や、デイグダの穴でのハガネールのよ
うな敵意をまったく感じなかった。だから私は多分、違和感を覚え
たんだと思う。

「……………」

「……………」

数秒だけ、沈黙の時間が訪れる。私は真っ直ぐにサイドンの瞳だ
けを見詰めていた。

「……………ん？」

沈黙が流れていたその時、なにかが回転するような音が聞こえて
きて、私は首を傾げる。何の音だかすぐには判断できなかったが、
目一杯首を捻ると答えが見つかって手を叩いた。

ああ、ドリルが回転する音だ！

その思考に至ったとたん、私の頭脳は停止した。ドリルが回転、
ここにあるドリルは一つしかない。

ゆっくりゆっくり視線をサイドンの頭に移動させていく。その間
もギューンギューンという音は続いていたが、私は「違っていてく
れ」と低い可能性にかけてドリルを視界に収めた。

「……………本日は余計に回しておりませう」

期待を裏切って、いやある意味期待通りに、ドリルは回転してい
た。それを理解した直後、私は全力で走りだす。

「グウオオオオオオオオオオオオッ！！！」

背後に響く凄まじい破壊音。何かが決られていく音。決られたのは岩か地面か。下手したら自分が決られていたかもしれない未来に、今生きている現在を喜ばしく感じる。

「本当は傷つける気ないんじゃない？」とか、ふざけたこと言ってますみませんでした!!

走りながら、「今日は厄日に違いない」と強く思う私だった。

T o b e c o n t i n u e ?

第十四話 セキチクシティ・前編（後書き）

セキチクシティ到着。さて、生きて帰れるのか？ユズル。

第十五話 セキチクシティ・後編

「ぎゃあああああああ！」

悲鳴を上げながら走る私と追って来るサイドン。しかしそこで少し冷静になっている部分が囁いた。このまま逃げ続けられる訳がない。このサイドンは妙に頭が切れるのだ。それに私だけならともかく、ここには巻き込んでしまったお兄さんもいる。

私が責任もって、何とかしなければいけないんだ。

肩越しに後ろを見ると、追いかけてきているサイドンが目に映る。その右手に握られたお兄さんのモンスターボール。あれさえ取り返す事が出来れば、何とかなるかもしれない。

「っでえええええええい！」

「グオツ!？」

私は突如として方向転換し、今までとは正反対にサイドンに向かって走り始めた。サイドンは一瞬驚いたようだが、向かってくる私に向かって角ドリルを繰り出した。

「遅い！」

突きだされた角を避けてサイドンの背後に回り込む。これならトキワの森でのコーヒープリンの乱れ突きの方がよっぽど速かった。あれは本気で怖かった。

サイドンの後ろに回り込むと、角ドリルをするために前かがみに

なっていたサイドンの背中にしがみついて登っていく。

「ゴオオオオッ！　ゴオオッ！！」

「くぬぬぬっ！！」

私を振り払おうと身体を振るサイドンだが、私も負けじと耳にしがみついて離れない。そのうちに今度は尻尾で背中を叩き始めて、これには私も焦った。

「ゴオッ！　ゴッ！　ゴゴオッ！！」

「はっ！　うわっ！　うひっ！！」

傍から見るとコントのように見えるだろうが、両者とも必死である。数分ほど格闘していたが、尻尾を動かすのには体力がいるらしいサイドンと、また耳にしがみついたまま器用に避けていた私は、すっかり疲れ切っていた。

「はー……はー……」

「ゴオ……」

お互いに息を整える呼吸音だけが場を支配する。手が痺れてきている私は限界が近い。角ドリルを喰らわないためにサイドンによじ登ったのは良かったが、そこから先を全く考えていなかった。

「ゴオッ！！」

サイドンが動く。反応が遅れた私は息を呑んだが、直後に覚えのある声が聞こえた。

「ユウ坊！！」

壁の向こうから迂回してきたらしいお兄さんが、全身葉っぱや木の枝だらけにして現れた。サイドンの尻尾が声に反応して動きを止める。その瞬間に私はサイドンの耳を引っ張って口元に寄せた。

「わっ！！」

「グルオツ！？」

思いつきり腹の底から声を出して耳元で叫んでやると、サイドンは身体を大きく揺らした。鼓膜が破れるかと思っただ事だろう、その右手からモンスターボールが滑り落ちたのを私は見逃さなかった。

「てやっ！！」

ふらふらしながら頭を振っているサイドンの背中から飛び降りて、モンスターボールを掴んだ。

「お兄さん！」

「わっ……と！　ありがとよ！！」

お兄さんに向かってモンスターボールを投げ渡すと、危なっかしく受け取ったお兄さんがお礼を返してくる。

「出て来い！　ヤドラン！！！」

お兄さんがモンスターボールを放ると、中からおっとりしたような、とぼけたような顔をしたヤドランが飛び出した。出て来るなりお兄さんの方を振り返って、首を傾げる。

「…………ヤド？」

……大丈夫だろうか。

「ゴオオオオオオッ！！」

首を傾げてるヤドランにサイドンの角ドリルが迫る。はらはらしている私とは反対に、お兄さんは落ち着いて指示を飛ばした。

「金縛りからバブルこうせんだ！」

ヤドランの身体が淡く光ると、サイドンの身体が止まった。その直後にヤドランからバブルこうせんが放たれる。

「グルオオオオオッ！」

バブルこうせんに苦しむサイドン。角ドリルを金縛りで封じられる事によって産まれた時間のロス。その隙を狙った完璧なタイムイングだった。

「終わりだ」

お兄さんはモンスターボールを疲弊しているサイドンに向かって投げる。しかしサイドンは右手でボールを弾いた。

「……？ ヤドラン、もう一度バブルこうせんだ！」

訝しげにお兄さんはヤドランに指示する。サイドンはよたつきながらも避けようとしたが、ダメージを受けた体で避けきれぬはずもなく、もう一度受けてしまった。

「グ……ウウウ……」
「もう一度！」

お兄さんが再度ボールを投げたが、再び弾かれる。もう体力は限界なはずなのに、サイドンはボールを拒み続けた。流石にお兄さんもイラつき始めたようで、サイドンを睨みつけた。

「おい、なんで捕まろうとしない。後で解放してやるから、今は捕まってるよ！」
「……」

最早声も出ないのか、目だけをぎらつかせるサイドン。その瞳を見ているうちに何かと重なって見えて、気がつけばお兄さんにしがみついていた。

「何すんだユウ坊！」
「ごめんお兄さん！」
「はあ！？」

困惑していたお兄さんだったが、サイドンの様子に攻撃を止めても問題ないと判断してくれたらしい。ヤドランに攻撃を止めるように言った。

私は荒い息をつきながらもその場に立ち続けるサイドンに向き合
うと、慎重に語りかけた。

「……何かしなければいけない事が、君にはあるの？」
「……」

サイドンは答えない。その代わりに尻尾で、弾かれたボールをこちらに転がしてきた。言いたい事が何となく分かった私は、しゃが

んでボールを掴んだ。空のボールを持ったまま、もう一度確認するようにサイドンに語りかけた。

「本当に私と一緒にでなければ、できない事なの？」

「……ゴオオオオオオオオオオオオツ！！」

サイドンはスツと息を吸うと、大地が震えるのではないかと思える程の声で吠えた。

「……分かった」

私はモンスターボールをサイドンに向かって投げる。今度は弾かれる事無く、サイドンは大人しくボールに収まった。黙って見ていたお兄さんが慥然とした顔をする。

「お前その目的とやらに付き合う気なのか？」

「人はポケモンに助けられてる。だったら人がポケモンを助けるのだって当然でしょ？」

私もお兄さんもボロボロだったけど、笑顔を見せて答えた。お兄さんはため息をついて「モノ好きな奴だ……」と呟く。私は苦笑いをしながらも、否定せずにモンスターボールを握りしめた。

「じゃあそろそろ帰るぞ」

「え？ どうやって？」

お兄さんが伸びをしながらあっけらかんと答えるので、私は驚く。お兄さんはヤドランに口を空に向けてるように言い、ヤドランも特に疑問を抱くことなく従う。

「空は快晴。良い具合に鳥ポケも少ないと……ヤドラン、破壊光線！」

「ヤド」

ヤドランの口に集束していくエネルギー、ギリギリまでため込んで発射されたそれは、雲を引き裂き鳥ポケモンを驚かせ、天空の彼方へと消えていった。

「な、な……何やってるんですか!？」

「合図送ってんだけど」

狼狽しながら訊ねると、お兄さんは淡々と答えた。

今の破壊光線が合図!? 確かに分かりやすいけど、何処かずれてるよお兄さん!

そして合図というのは本当だったようで十分後、救助の人たちに保護されたのだった。

「無事に帰れて良かった……」

「こつちとしても問題になる前で助かった」

お兄さんと一緒にサファリ本部の休憩所でお茶を飲む。そこでふとお兄さんが何か思い出したように自分の鞆を探り始めた。鞆は私を抱きとめたときにモンスターボールと一緒に落としていたのだが、救助の人が発見してくれていたので助かった。

「あったあった。ほらよ」

「……？ どう、も！？」

バッグから出てきたケースを開け、そこから放って寄せられたものを見て目を丸くする。目を擦ってからもう一度よく見て見るが、間違いない。これは

「ピ、ピンクバッジ！？」

「おー」

お兄さんがお茶の湯呑を傾けながら応える。そして呑み終わった湯呑を机に置くと更にぶっちゃけた。

「ケンサクは嘘だ、いねーよそんな奴。で、俺がケンゾウだ」

「ええええええっ！？ 嘘だったんですか！？」

あわあわしながらピンクバッジとお兄さん、いやケンゾウさんを見比べる。渡されたという事は、受け取って良いのだろうか。いやしかし。

迷っている私を見て、ケンゾウさんは言葉を静かに続けた。

「サイドンの思いを汲み取って、面倒な事をわざわざ引き受けただらう」

「それはさつきも言った通りの事ですよ」

人が困っていればポケモンが助けしてくれるように、ポケモンが困っているのならば人が助ける。そうやって何百年、何千年と人とポケモンは一緒にやってきたのだ。ならばあの行為だって当たり前のことじゃないだらうか。

「生きてたから良いものの、サイドンのおかげで死ぬ思いしたじゃ

ねえか」

「……」

いや死ぬような目に合うのは慣れたというか。本当は慣れたくないけれど。

「そんな目に合わせた相手の頼みを聞くなんて、生半可な度量じゃ出来ない。ましてやサイドンとお前は会ったばかりだ。サイドンの望みを叶える代わりに、お前は何をサイドンに望む？」

望みと言われても思いつかない。強いて言うのならば、短い間だけでも旅の連れが増えたら楽しいな。くらいにしか思っていないかった。

「特に何も、としか言えないのですが」

「これだからお人よしは……。そういう訳で、貰っとけ」

私の返答に対して、ケンゾウさんは呆れ切った口調で言った。しかしサイドンの望みを聞いたと言っても、バトルもせずにピンクバツジを受け取って良いものだろうか。私はまだ悩んでいた。ケンゾウさんは私の背中をバシンと強くたたく。

「アンズには俺が認めた奴に渡せばいいって言われてるんだ。俺の目が曇ってるって言いたいのか？」

「……ありがとうございます」

照れたように笑って大事にケースにしまうと、ケンゾウさんも快活に笑い返してくれた。

「 という訳で今はセキチクにいるよ」

『 そうか、とうとうそこまで来たんだな』

画面に映っているのは父さんと母さんだ。タمامシシティでキリが「偶には連絡してやれ」というまですっかり連絡するのを忘れていた。当然連絡を取った最初は怒られたが、ここまで来たという実績に折れてくれて、今はこれまでの報告を行っている。

報告にはポケモンセンターに数台設置されている物を使えばいい。本当に便利な世の中だ。

『 母さん心臓が止まりかけたけど、無事でよかったわ』

「 うん、色々あったけど順調だよ！」

“無事”という言葉に少しだけ冷や汗が流れる。母さん父さんが卒倒しかねないので、トキワの森の事やデイグダの穴、タمامシでのエリカさんとのバトルの部分は所々カットして話した。

『 レッドさんにも報告しておくんだぞ。根気よく説明してくれたんだからな』

「 うん、父さんと母さんに報告し終わったら、レッドさんやイエローさんにも連絡を取ろうと思ってたんだ」

レッドさんには特に報告しておきたい。もう少しでバッジが集まりきるんだし、レッドさんはトキワジム就任試験を受けるつもりだと言っていた。レッドさんなら間違いなく合格できるだろうから、必然的に戦うことになるだろう。

イエローさんは、トキワシティであいさつしていこうと思ったの

にキリに捕まっただけで出来なかった。ブルーさんに関しては、私はまだポケギアを持っていないので連絡がつかないし、グリーンさんも同じだ。

父さん母さんへの報告を終えて、レッドさんのアドレスを打ち込んで回線を繋げる。呼びだしのマークが数分間出ていたが、レッドさんが出た。

「レッドさん！」

『よお。元気そうだな』

久しぶりに会話するレッドさんに、興奮気味に旅で起こったことをかいつまんで話す。レッドさんは笑いながら聞いていて、レッドさんの方のポケモンの様子も変わりないようだった。ただタケシさんに関しては、バトル内容を既に聞いていたらしく、爆笑したそうだが。

「ジムリーダー就任試験はいつになるんですか？」

『明日だよ。タケシやカスミもビデオ貸してくれたし、対策はばっちりだ』

一番気になっていた事を訊ねると、自信満々に答えてくれた。この分なら問題もなさそうで、最後のジム戦がレッドさんになるのは間違いなさそうだ。

しかし就任試験バトルか。見たいなあ……無理だけど。

「見にいけなくて残念です……」

『ビデオはあるから、また帰った時にでも貸してあげるよ』

「本当ですか！？ありがとうございます……！」

私が満面の笑みでお礼を言うと、レッドさんは「そんなに喜ばれ

ると照れるな」と返した。

「レッドさんがジムリーダーになったら、勝てる気がしません」

『気が早いなあ。まだ試験やってすらいないんだから』

「レッドさんなら大丈夫ですよ！……それではそろそろ失礼しますね」

『ああ、ユズルも頑張れよ』

「もちろんですよ！ レッドさんこそ頑張ってください！」

『サンキュ、じゃな』

レッドさんとの回線を切り、最後にイエローさんに繋げる。イエローさんも家にいたらしく、すぐに応答が出た。

「お久しぶりですイエローさん！」

画面に映っているのは、金髪の可愛らしい少女。画面の端ではポニーテールが揺れている。ぱっと見私よりも年下に見えるが、立派に年上だ。イエローさんにはっこりと笑って返事をしてくれる。

『こちらこそお久しぶりですユズルさん！ 家出したって聞いてボク、びつくりしましたよ』

「ははは……その節はご心配をおかけしました」

『無事で何よりです。今はどの辺にいるんですか？』

「今はですね」

イエローさんは年上年下関係なく敬語を使う人なので、なんだか恐縮してしまう。何度か「イエローさんの方が年上なんですから、敬語を使わないください」といったら難しい顔をされてしまった。

『それでボクはレッドさんの就任試験を見終わったら、ジヨウトに

行こうと思ってるんですよ」

「ジョウトですか。見た事無いポケモンもたくさんいるそうですね」

『うん、どんなポケモンに会えるか楽しみです』

「気をつけて行ってくださいね。と、そういえばイエローさん」

『なんですか？』

「レッドさんにはまだ言っていないんですか？」

イエローさんはレッドさんを助けに行く時、男装していた。そのせいで未だにレッドさんはイエローさんの事を男だと思っている。

その事を指摘すると、イエローさんは面白いくらい顔を真っ赤にして俯いた。

『言っていない……です』

うーん、まだ進展はなしか。レッドさんの事を敬愛はしていても、異性としての好きからは程遠いところにいる私は、レッドさんがイエローさんの性別を知った時の反応がものすごく気になっていた。

私の知っている限り、レッドさんの女性の友人はブルーさん、イエローさん、カスミさん、エリカさん、ナナミさん。ブルーさんはレッドさんよりオーキド博士ラブに見えるし、ナナミさんは近所の子供を見ているような感じでレッドさんを見ている節がある。エリカさん、カスミさんはあまりマサラに来る訳じゃないから何とも言えない。イエローさんは面白いほどはつきりレッドさんを意識しているように見えるのだが。

「とりあえず、頑張ってくださいイエローさん！」

『うええええええっ！？ 何を！？』

真っ赤なままおろおろするイエローさんを見ると、しばらく進展は来ないなと思う私だった。

そう言えばキリとカスムは好きな子とかいないだろうか？ 気になる子の一人二人くらいいてもいいと思うのだが、まったくそういった話を聞いた覚えがない。キリはそこらへんで突くと後が怖い、意外な一面を知れるかもしれない。カスムに関してはあの冷静な顔が、慌てふためく顔に変わるとか面白そうだ。今度二人に会ったら訊いてみよう。

母さん父さん、レッドさん、そしてイエローさんへの連絡を終えた私は、難しい顔で椅子に背中を預けた。考える事は無論、レッドさんのジムリーダー就任に関するものである。

レッドさんに勝てるだろうか。

私の中でずっと頂点であり、憧れのトレーナーだったレッドさん。強くて優しい、最強にして最高のトレーナー。そして同じく、所有するグリーンさん、ブルーさん。レッドさんを助けるために、ピカを連れて巨大な敵に立ち向かったイエローさん。彼らと同じ場所に立ちたいと強く思うけれど、同時に自分のような未熟者が立てるような場所だろうかと気後れしてしまう。

今のままじゃレッドさんには勝てない。憧れのままでは絶対に。

「考えても仕方ない事だとは思っけど……」

背中を追うのではなく、彼らと共に在りたいと願うのならば。同じフィールドに立つ以上、対等なバトル相手として見なくてはいけない。

「……仕方ない事なら、その時考えるか」

私は考える事を放棄して、テーブルに置かれたお茶を飲んだ。その横に転がっている3つのモンスターボールの1つが目につく。サイドンの入ったボールを手にとって、顔を近づけた。

3匹目の仲間もまた一癖ありそうなポケモンになってしまったが、元々人もポケモンもそれぞれ複雑な事情の1つや2つ抱えているものだ。サイドンが私の手を必要とするのならば、手を貸すまで。最初はそれくらいの関係で構わない。

そうやって付き合っていく中で、少しずつ信頼しあえるようになってきたら良いじゃないか。

「よろしくね」

私が囁くと、ボールの中でサイドンが頷いた。

T o b e c o n t i n u e ?

第十五話 セキチクシティ・後編（後書き）

ちよいと風邪気味なので、少しの間更新時間がずれます。ごめんなさい。

閑話 闇の中で・そのに

闇だ。夜に星が、月が現れるよりも昔、黒が支配する世界。

「……なんとなく、ここがどこなのか分かってきた気がする」

私は体を起して、闇を見渡した。離れたところに、微かな光が感じられる。あそこに多分、彼等はある。

闇を駆ける。光は近づいてくるが弱弱しく、闇を照らす月明かりのようだ。変わらない景色の中、唯一といえる変化に安心感を覚えた。光のそばには人影が見える。焼けてない、現実感ない金髪に、黒と黄色の服。私は彼の名前を叫んだ。

「おい！ コーヒープリンー！！」

名前を呼ばれた彼、コーヒープリンが振りかえる。全くの無表情は相変わらずだったが、光を映す赤い瞳はゆらゆらと揺れて見えた。

「……あんたか」

「だからあんたじゃないよ。ユズルだってば」

開口一番、前回会った時に名乗った名ではなく、あんた呼ばわりしてくるコーヒープリンの言葉に訂正を加えた。しかしコーヒープリンはふいっと私から目を逸らして、静かに言い放った。

「慣れ合うつもりはない。だからあんたでいいんだ」

「慣れ合うつもりはないって……せつかく仲間になったんだし、仲良くしようぜよ」

突き放したような言葉に壁を感じていると、コーヒープリンは光の元を見ながら短く拒絶した。

「結構だ」

いつも色々なところで助けてくれるし、なんだかんだでいくつもの町と一緒に回ってきた。だからもう少し仲良くしてくれてもいいと思うのだが、そうそう簡単に距離は縮まらないようである。

「邪魔していいかね」

背後から低くて重厚な、年月を感じさせる声がした。振り向いた瞬間、私は目を点にする。

「フル装備ですか」

上から下まで映画でしか見た事のない、全身甲冑のような鎧をまとった大柄なおじさんがいた。一歩歩くごとにガチャガチャと音をたて、如何にも重そうだ。おじさんは嘆息して、私と反対側のコーヒープリンの隣に座る。

「動きにくくてかなわんよ。ちょっとうるさいが、勘弁してくれ」

「それは構いませんが……貴方は誰ですか？」

名前を訊ねると、おじさんは困ったように笑った。

「名前、か。まだ君からもらっていないのだが……」

貰うって……親じゃないんだから私がつける必要はないのでは？

「だったら種族名でいいだろう」

コーヒープリンがサラリと聞き逃せない一言を放った。

「……種族名？」

「そうだな、種族名はサイドンだ」

私がおじさんの方を見て目をパチパチさせていると、おじさんは納得したようにサイドンと名乗った。

いや、サイドン？え？

「サイドンンンッ!？」

驚愕のあまり絶叫する。コーヒープリンに引き続き、今度はサイドン？おじさんは鎧を鳴らしながら頷いた。

「そうだ。短い付き合いになるが、名前を貰いたいのだが」

「え、う……うん。名前ならもう考えてあったけど……」

寝る前に色々考えて、明日サイドンに教えてあげようと思った名前が。

「どんなだね？」

「ナツツクツキー」

時が止まった。

「……ぞ、斬新な名前だね」

「コイツの頭の中は喰い物の事しかない」

笑顔のまま微妙なコメントをするおじさんと、あくまでも淡々としているコーヒープリン。気に入らなかつたのだろうか。

「……いやだった？」

「いやいやそんなことはない！　ありがたく頂戴するよ」

おじさんは慌てて首を横に振ると、懐かしむように私を見た。

「それにしても……見た目が変わってもネーミングセンスといい、中身はそっくりだな」

「え？　誰に？」

サイドン改めナッツクッキーの一言に首を傾げると、コーヒープリンがナッツクッキーに噛みついた。

「こいつと主殿を一緒にするな。主殿のセンスの方が……まあ、一風変つてはいたが、少なくとも菓子には走っていないかった」
「相変わらずの主至上主義だな」

コーヒープリンに対して苦笑いを浮かべるナッツクッキー。主が誰だか分からないが、2人（2匹？）がどうも知り合いらしいということは分かった。

それである時、既視感を覚えたのか。

ナッツクッキーの瞳の奥に感じた既視感。あれは「旅を続けてくれ」といった時のコーヒープリンの目に良く似ていた。一人ようやく納得した私は「大体お前は甘すぎるんだ昔から。もっとだな……」とか「お前は周りが見えなさすぎる。一人を信頼しきるのも……」とか昔話に花を咲かせている二人を尻目に、目の前の白い布団を見

る。布団の中には相変わらず誰かが入っていて、私はそれが誰だかもう分かっていた。

前に見たときよりも、少しだけ大きくなっている布団を撫でて中の人の名前を呼んだ。

「メロンパン、だよね？」

「……………」

ピク、塊が反応した。横で話しているコーヒープリンの袖をひっぱり、確認するように視線を送る。コーヒープリンは頷いて、またナツクッキとの会話に戻って行く。予想は大当たりだったようだ。

「やっぱりメロンパンだ！メロンパンも人型になってるってことは、喋れるんだよね？」

「……………」

興奮した私は、メロンパンの布団をポフポフ叩いて訊ねた。メロンパンはしばらく無言だったが、辛抱強く返答を待つ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「うん」

すると長い長い、ものすごく長い沈黙の後、蚊の鳴くような声で返事をしてくれた。

「ねえ、だったら話して！ どうしてひきこもったの？ 何があったの？」

「おい！」

矢継ぎ早に質問を投げかける私をコーヒープリンが制止しようとする。けれどその声が最早聞こえなくなっていた私は、メロンパンの入っている布団をゆすって次々と疑問をぶつけた。

「君は最初からひきこもっていたよね？ 小さい頃に何かあったの？」

「……」

メロンパンと出会ったのはオーキド研究所だった。手伝いに来て研究所の扉を開けた時、すごい勢いで飛び出してきたメロンパンを宥めたのが始まりだ。何かに怯えるようにしがみついていたメロンパンを落ち着かせた私を見て、オーキド博士は私にメロンパンを預けた。

「それとも理由なんてないの？ 何故オーキド研究所にいたの？」

「……」

普通に捕まったんだったら、あんなにも怯える必要はない。どういった経緯で研究所に来たのかは、オーキド博士は言葉を濁して教えてくれなかった。

「どうして戦う事を恐れるの？ どうして外が苦手なの？」

「……」

メロンパンが恐れた相手は分かり易く、オーキド博士のきていた白衣。オーキド博士が白衣を脱いで見せたら、一応落ち着いた。け

ど何故白衣に怯えるのだろう。

「どうして白衣が怖いのか？ どうしてトレーナーが怖いのか？」
「……」

メロンパンは答えない。沈黙だけが返ってくる。

果たして答える事が出来ないのか、答える気がないのか。いつもの私だったらもう少し落ち着いていただろうが、今は言葉が止まらなかった。どうしても私は知りたいのだ。出会ったときからずっと疑問に思っていた事が、本人の口から聞けるかもしれない絶好の機会。このタイミングを逃したら次はいつ会えるか分からないし、会えるのかどうかすら怪しい。

一切答えようとしなないメロンパンに痺れを切らした私は、布団を強く掴んだ。

「答えてよ！ どうして黙ってるの！」
「……っ」

その時、私の腕をコーヒープリンが掴んで布団から引きはがした。噛みつかん勢いで振り返った私の目に、赤い色が飛び込んでくる。

「その辺にしてやれ」
「離して！」
「流石に哀れだ。止める」

哀れ？

コーヒープリンの言葉に眉を寄せた私は、メロンパンの入っている布団を見た。布団はガタガタと震えている。酷く怯えているようだ。言葉の意味を理解した私は、頭から冷水をかけられたように一

気に冷静になった。力が抜けて、興奮で浮いていた下半身が元の位置に戻って行く。

「わ…………私……………」

大人しくなった私の腕をコーヒープリンが放した。呆然として自分の顔を両手で覆う。メロンパンが震えている。ずっとずっと、傷つけないように、おびえさせないように、大切にしてきた私のパートナーが私を怖がっている。

「ごめ、ん…………ごめん…………ごめんメロンパン……………」

もう長い事一緒にいたから、怯えられたのなんて久しぶりだった。目からぼろぼろと涙が零れて、私は嗚咽を上げながら泣いた。

拒絶されたという事実には、私は予想以上に深くダメージを負っていた。自分でも、なんでこんなにショックを受けたのか、傷ついたのか分からないくらい悲しい。でもそれ以上に、メロンパンを傷つけたという事実の方が重くのしかかっていた。

止まらない涙をぬぐっていると、そつと膝に何か触れる。潤む視界のまま見ると、布団から出た手が膝に乗っていた。

「メロンパン…………？」

その手に自分の手を恐る恐る重ねると、ためらいがちに、しっかりと握り返してきた。それが嬉しくて握り返すと、さっきよりも少しだけ強めに握り返してくれる。

「……………」

.....
.....
「ごめん.....ね.....」

小さい声が聞こえた。本当に小さくて、ともすれば聞き逃してしまいそうなほど小さな声。しかし私にはちゃんと聞こえている。泣き笑いのような顔になって、私もそつと囁き返した。

「.....ありがとう」

しっかりと握った手は、これ以上なく温かくて優しかった。

T o b e c o n t i n u e ?

閑話 闇の中で・それに(後書き)

メインヒロイン ユズル

メインヒーロー

王道 キリ

期待大 カスム

禁断? メロンパン

大穴 コーヒープリン

むしろ誰かとくつつくのだろうか作者でさえ疑問。

第十六話 ふたご島・前編

「ここは何処だ」

「ゴオオ」

隣にいるナツクツキに訊ねて見るが、ナツクツキはどこ吹く風。荒れ果てた岩肌。民家なんて一軒も見あたらない。近くに唯一ある人工物、看板に駆け寄って書いてある文字を確認する。

“ふたご島”

裏側を確認する。

“フリーザ様ゲットだぜ!”

「…………フリーザ?」

フリーザってどんなポケモンだろう。書かれた落書きに首を傾げるが、世界はまだまだ広いのだ。私の知らないポケモンの100体や200体くらいいるだろうと自己完結する。

ナツクツキがグレン島までの道を知っているというし、なみのりも使えたので任せたのだが、違う島に辿りついてしまった。

「ナツクツキ…………ここグレン島じゃないみたいだし、もう少し行ってみようよ」

「ゴ」

ナツクツキは「嫌だ」とでも言うように首を横に振る。私の

身体をぐいぐいとふたご島に向けて押してくる。

「え？ え？ え？」「ここに用があるの？」

「ゴォ」

ナツツクツキ が肯定する。私はふたご島をもう一度見るが、なんだかとても怖そうだ。冷気っぽいものも感じて、鳥肌も立っていた。

「……………どうしても行かなきゃダメ？」

コクコクと頷くナツツクツキ に、私は諦めて足を踏み出すのだった。

「……………またあの変な夢」

宿のベッドの上で、私は髪が爆発している頭を振って呟いた。

どうにも、ハッキリしない。ポケモン達が人間の姿になってたことや、色々話をしたことは鮮明に覚えているのだが、大事なところが曖昧だ。例えばナツツクツキーが人の姿になっていて名前をあげた事や、メロンパンに酷い事をしてしまったけど仲直りしたこと。そう言ったことは覚えていても細かく何を話したとか、既視感の正体や、ナツツクツキーとコーヒープリンが何を話していたとかはもやもやしている。

「……………準備するか」

いくら頭を捻ったところで、内容は思い出せない。とくれば仕方ないと私は思考を放棄して、もそもそと布団から出て朝の準備を行った。窓から注ぐ日差しはまだ弱く、早い時間。着替えて顔を洗って髪を梳いて、宿の部屋を出てモーニングを取ると、部屋に戻って歯を磨いてリュックを背負い、ポケモン達にもポケモンフーズを用意して食べ終わったら戻して、モンスターボールを腰につけ準備完了。

宿を出て眩しい太陽に目を細めていると、毎度のことながらモンスターボールから勝手にコーヒープリンが飛び出す。

「スピ」

「アハハ……今日もよろしくお願いします」

コーヒープリンの護衛は今日も行われるようだ。旅の必需品の補給は昨日のうちに行ったので、今日はこのまま次の町に向かう。タウンマップを取りだして、セキチクシティからクチバシティへの道を確認する。なみのりという、ポケモンがトレーナーを連れて海を渡る技を持っているポケモンが入れば良かったのだが、確かいなかったと思う。更に私はなみのりの秘伝マシン　ポケモンに技を覚えさせる道具　を持っていない。とくれば、グレン島に向かうにはクチバから出ている定期便を利用するしかなかった。

「結構距離あるなあ……セキチクからも船が出ればいいのに。え、あれ？」

「ゴオオオオオッ！」

悩んでいるとモンスターボールからナツクツキ　が飛び出した。大きく鳴くと、私に何かを伝えるように、身体を動かして見せる。

「えっと……何かの踊り？」

「ゴ」

「あてっ！　じゃ、じゃあ、バトルしたいの？」

「ゴ」

「わっ！　何が言いたいの？　さっぱりだし頭もこれ以上叩かれたら馬鹿になっちゃうよ！」

答えるたびに、「違う！」と頭を軽く叩くナツクツキー。残念だが私には何を言いたいのか全く分からない。

首を捻っていると、ナツクツキーは私を抱え上げて、海に向かって走り出した。日差しを反射して海はキラキラと輝いている。早朝なので人が少なく、とても綺麗だ。

「……青春？」

「ゴ」

「あたっ！」

浮かんだ一言を答えたが、また違ったらしい。

「ゴオ！」

「え、ちよ」

ナツクツキーは私を海辺に下ろすと、そのまま海に飛び込んだ！　ナツクツキーは明らかに見た目からして岩タイプなのに、何を考えているんだ！！

「ゴオ」

「……嘘」

と思ったのだが、ナツクツキーは全く問題なく、海を

気持ちよさそうに、私に見せびらかすように軽やかに泳いでいる。私は夢を見ているのだろうか。

「スピッツ！」

「痛い！ すみません夢じゃないんですよね！」

コーヒープリンが私のほっぺたに軽く針を突き刺す。つねる手間は省けたがもつと穏便なやり方は無かったのだろうか。頬をさすりながら未だに泳いでいるナツツクッキーを見て、私は訊ねた。

「……もしかしてナツツクッキー、なみのりが使えるの？」

「ゴオオオオオッ！」

同意するように大きく鳴く。ぱっと私は笑顔になってタウンマップをもう一度確認した。

「じゃあ、このままグレンに迎えそうだね！」

そしてそのままグレン島になみのりで向かうことになったのだがタウンマップで確認して指示する前にナツツクッキーは正しい道に進んでいくので、一度訊ねた。

「グレン島への道、知ってるの？」

「コ」

という訳で、完全ナツツクッキーに任せる事になったのだ。

「それが何故かふたご島探検……」

ナツクツキーはモンスターボールに戻し、今はコーヒープリンを引き連れて洞窟の中を歩いている。まあナツクツキーには目的達成に協力すると約束したので、これは必要なことなのだろう。

「それは良いとして、入り組んでるなあこの島」

ふたご島は洞窟と違って、内部には光が所々差しこんでいるのでそこそこ明るい。フラッシュは使えないので助かったが、やたらと入り組んだ作りになっていた。しかも寒い。救いはここが前人未到の島などではなく、既に人が手を加えた島だという点だろうか。

「ナツクツキー、今度はどっち？」

分かれ道に差しかったり、分からなくなるたびにボールの中のナツクツキーに訊ねる。ナツクツキーは用があるだけあって、一度ここに来た事があるようだった。訊ねるたびにすぐ答えてくれる。

「う、わー！」

下へ下へと進んでいくと、海水に浸っている場所も増え、寒さも増していくように感じられた。いや、本気で冷気のようなものを感じる。

とうとう海水で進めないと言うところまで辿りついて、私は不安になりながらナツクツキーをボールから出した。

「本当にあってるんだよね？」

「ゴ」

ナツクツキーが強く頷く。それを信じて背中に飛び乗った。ここまで来て今更帰るなんて言えるものか。最後まで付き合おう。その時だった、何処からか叫ぶ声が聞こえた。

「スターミー！ スピードスター！！」

「え？ わあッ！」

声に振りかえると、目の前に無数の星が回転しながら迫ってきた。あまりのスピードに避ける事も出来ず、まともに攻撃を受ける。キラキラと目に優しくない星が服や顔、腕を軽く切り裂き、私は反射的にコーヒープリンに指示を飛ばした。

「リン、ミサイルバリ！」

「スピッ！」

コーヒープリンが即座に反応して、幾本もの鋭い針を発射する。スターミーに乗った誰かに向かって真っ直ぐに針は飛んでいき、その人物は悲鳴を上げた。

「きゃあああああッ！？ 何するのよ！ 危ないじゃない！！」

それはこっちのセリフだ！

私は突然攻撃してきた人物をキッと睨みつける。二匹のスターミーを連れた彼女は、私よりも年上のお姉さんでビキニ姿だった。私はそのスタイルに戦慄する。

「な…… ナイスバディ……ッ！」

「あら、なんだかよく分からないけど、ありがとう」

お姉さんが綺麗に微笑んだ。私はわなわなと震えながらそっと自分の胸を触ってみる。

「……………」

無言で拳を握りしめた。お姉さんが慌てたようにフォローを入れる。

「ま、まああなたまだ小さいし！ これから大きくなるわよ！」

「ホント!？」

「そうよそうよ。今何歳？」

「11歳」

旅だったのが10歳のときで、最近誕生日を迎えた。お姉さんは年齢を聞くとふんふんと納得する。

「それだったら大丈夫よ。もう少ししたら二次性徴が始まるから。……………って待って。君、10歳って言った……………？」

それがどうかしたのだろうか。そう思いながらも「うん」と答えると、お姉さんは目を丸くしてぶつぶつと呟き始めた。

「11歳？ 11歳ですって？ 旅に出るのは10歳からなのに、11歳にしてふたご島の最深階近くまでいける実力って何処のチートオリ主よ。貴方まさか、「マサラタウン出身です」とか言わないわよね？」

「なんで知ってるんですか？」

「うそん!？ 誰か嘘だと言って！ オリ主なんて冗談じゃないわ

！ 沈みなさい、うずしお！！」
「わああああああああつ！？」

スターミーによって起こされた渦潮に引き込まれ、ナツツクッキ
ーはグルグルとした回転の中心部へと引き寄せられていく。ナツツ
クッキーは流れに逆らって抜け出そうとするが、お姉さんは二体目
のスターミーにも指示を飛ばした。

「ぼくのかんがえたさいきょうのとれーなー」だとしても、二体
分のうずしおには敵わないはずよ。飲みこまれない！」

「わああああああああああああ……………！！」

加速した流れに逆らえず、一気に中心部まで押し込まれて水中へ
と引き摺りこまれる。息を止める暇さえもなく、口に鼻にと侵入し
てくる海水にせき込むが、せき込んだ分だけ新たに流れ込んできて、
急速に意識が遠のいていった。

「が……………がぼ……………ッ！……………」

ブラック・アウト。

私の意識は、そこで途切れた。

暗い場所にいた。暗くて、寒くて、寂しい場所。

「
」
声が出ない。気泡が出ていっただけ。それでも苦しくはなかった。

「
」
光が見える。ずっと遠い、遠くて高い場所に、光が見える。
あそこに行きたい。ここは暗くて、冷たくて、悲しい。

『人の命とは、儂いものだねえ』

水を揺らして、誰かの声がした。女の人の声だ、優美で、艶のある声。聞き覚えのあるような、ないような。

光が少し、遠のいた。

『主殿は死んでなどいない！ ふざけるな！！』

青年の声がした。さっきよりも強く揺れた水。聞き覚えは当然ある。

「
」
何度も聞いたその声に返事をしようとして、気泡が登っていった。

光に伸ばした手が、意思に反してゆっくりと下がる。

『……探したうちが良く知つとる。あん人は、もう』

悲しみに彩られた少女の声。この声も聞き覚えがあるようでない声。

誰だ。誰か分からないけれど、悲しそうな声につられて泣きそうになる。

「
」

声が出ない。あちらからの言葉はこの耳に届いているというのに、何故こちらの言葉を届ける事が出来ない。

『このまま終わる事など、出来るものか』

重厚な声。ああ、彼はとても落ち着いている。また聞こえた聞き覚えのある声に、更にもがいた。次々と現れては登って行く気泡。それらは上がっていきけるというのに、私はそれに反して、どんどん底へ底へと沈んでいった。

どうして、上がれない？

『なあ、何とかならないのかよお前！ 何でも願いを叶える事が出来るんだろ！？』

少年の声が、必死になって懇願している。

「
」

少年の声が水を揺らしたとたん、闇が一段と濃くなった。何一つない海底に向けて、どんとんと身体が沈み込んでいく。光が見えない、闇しかない。

「

助けて。

「

こんなところで、終われないんだ。まだ足りないんだ。

「

“私”と“あたし”の意識が混じり合って、想いが溢れて流れ込んでくる。

孤独な玉座なんていらなかった。けれど自ら下る気もしないんだ。

だって此処は最強のトレーナーが座る場所でしょう？

最強の称号は一人だけ。けれどバトルには二人必要。

最後にバトルに高揚感を抱いたのは、いつだっただろうか？ 忘れた。

戦って、戦って、戦って、まだまだ足りない。もっと頑張つてよ。

こんなもんじゃないでしょ、まだ戦えるでしょ。ふざけないで。

ああ退屈だ、退屈だ。

誰でもいい、ここから引き摺り落としてよ。

『ボクにはこれだけしかできない。あとは、彼女次第だよ』

幼い声が水に波紋を落として、広がって行く。

上昇する泡沫に交じって、数滴の滴が昇って消えた。

T o b e c o n t i n u e ?

第十六話 ふたご島・前編（後書き）

ユズルは断崖絶壁です。小学生ですからね、今後に期待。

第十七話 ふたご島・中編

海底に向けて、少女の体が沈みつつあった。髪を結ぶ紐が外れ、長い髪が幽鬼のように揺らめく。その口からはもはや気泡さえも出ず、青い顔には生気が感じられない。

彼女を見守るように、岩のような大きな体のポケモン　　ナツクツキーが、少女をじっと見つめていた。助けるわけでもなく、何かを待つように、ただただ見守るのみ。

少女の腰のモンスターボールから、一条の光が走った。海中に飛び出したメロンパンは、一瞬ナツクツキーを困惑の眼差しで見だが、すぐに少女の手を取って海上に向けて泳ぎ始めた。

「！」

メロンパンの行く手を阻む様に、ナツクツキーが海中で角を突くを繰り返した。慌てて避けるメロンパンだが、その顔は恐怖と混乱で一杯になる。彼には訳が分からなかった。何故ナツクツキーがユズルを助けないどころか、自らを攻撃してくるのか。

避けられたことを理解すると同時に、今度は乱れ突きをメロンパンに繰り返すナツクツキー。だがバトルに対する恐怖はあるとはいえ、メロンパンに分があった。乱れ突きを反射的に避ける。だが逸れた乱れ突きは掴んでいたユズルの腕に当り、ゆらゆらと赤い色が海中に立ち上った。

「……………ゆ……………ゆず、る」

その赤い色に怯えを示し、とたんに鈍る動き。その隙を逃さず、

またも乱れ突きを繰り出してくるナツクッキーに、メロンパンはまともに反応すらできず、まともに攻撃を受けた。その目は苦悶の表情に染まり、大きな目からは幾滴もの涙が海水に溶けていく。何故、とその目はナツクッキーに強く問いかけていた。

『……見定めねば、ならんのだよ』

ナツクッキーが、感情を押し殺したような声音で吐いた。メロンパンにはその言葉の意味が全く分からない。分からないけれど、ナツクッキーがユズルを殺そうとしているのではないかとは思った。

『沈んでから1・2分は経っている。早くしなければ死ぬぞ』

メロンパンの目が驚愕に見開かれた。先程の乱れ突きをまた数回受けてしまっているユズルの体からは、数本の赤い線が立ち上っている。ピクリともしない冷たい体と、揺れる髪。その姿に“死”という未来を容易く想像してしまったメロンパンは、真っ青になってナツクッキーを見た。

『此処まで来てなお反撃はおるか、睨みつける事さえ出来んとは』

ナツクッキーは僅かに失望の色を覗かせた。その言葉にメロンパンの体が揺れる。状況的に見れば、ナツクッキーは明らかにメロンパンに敵対していた。だと言うのに、メロンパンは未だ反撃すらできず、あるうことがまだ相手が自ら剣を収める事を、何処かで期待していた。

『手遅れになるぞ、お前のせいだ』

『……………ぼく……………は……………』

メロンパンは言葉の重さに泣きそうだった。海中だからコーヒープリンは助けに來れない。ナツクッキーは明らかに助ける気がない。ユズル本人は死の淵に瀕して意識がない今、ユズルを守れるのは自分しかいなかった。

体が震えて力が出ない。目の前のナツクッキーは自分よりも一回りも大きくて、百戦錬磨の威圧感に押しつぶされそうになった。

ダメだ。勝てる相手じゃない。

メロンパンはそう思った。自分が勝っている様子など、欠片も想像できない。いつもそばでユズルが助けてくれた。けどそのユズルは今助けられないから、自分の力しか頼れるものはない。

ユズルがいてくれたから勝てた。ぼくなんか、一人で何か出来るはずない。

『助けて』と、無意識のうちにユズルの顔をメロンパンは見た。揺れる白い顔のユズルは答えるはずもない。刻一刻と迫る命のカウントダウンに、メロンパンは心臓を握りしめられたような感じがした。息が苦しくなつて、頭がぐちゃぐちゃにかき混ぜられていくようだ。逃げたい、助けたい、無理だ、ユズルが死んじゃう、勝てない、まだ間に合う

役立たず。

メロンパンの脳裏に、言葉と同時に蘇る自分の姿。生まれたときから戦い続け、傷だらけで横たわる同類の数々を冷淡に見下ろす、背の高い男。男は何の興味も示さず、戦い続けたメロンパンを見て、ただ一言だけ言った。

ハズレか。廃棄しろ、次だ。

ゆら、と水が揺れた。固まっているメロンパンに何かを諦めたように、ナツツクツキーが角を回転させ始めた。角の回転に従って水流が発生する。小規模の渦潮を纏った角ドリルは、容赦なくメロンパンに襲いかかって来た。焦点の合わない目をしたメロンパンの視界に、一瞬だけオレンジ色の巨体が走る。

『何故、邪魔をする！』

ナツツクツキーの鋭い声に、メロンパンの意識が返ってくる。角ドリルは横合いから放たれた、海水を揺らす衝撃波によって弾かれていた。ナツツクツキーの問いかけには答えず、再び現れた巨体之間に立ちはだかつて叫んだ。

『さっさと行きなさい腰抜け！ それくらいできるでしょ！！』
『……………！』

その声に背中を押される形で、メロンパンはユズルを引つ張って海上へと浮上していく。メロンパンの背後では、2匹が火花を散ら

さん勢いで睨みあっている。

『何のつもりだ、カイリユー』

『馬鹿なことは止めろっていつてんのよ!』

ナツツクッキーが角ドリルを繰り出し、カイリユーがひらりと避けて尻尾で叩きつける。しかしその尻尾を掴みナツツクッキーはカイリユーを振り回そうとした。カイリユーが吹っ飛んでナツツクッキーはメロンパンを追いかけようとしたが、またも放たれた衝撃波に、海中の岩を砕きながら吹っ飛んだ。

『何人トレーナーを試したところで、合格なんて出来るはずないじゃない』

『黙れ』

ナツツクッキーがカイリユーを睨みつける。カイリユーは頭が痛いとはかりに横に振ると、ナツツクッキーに向けて凄まじい勢いで海中を飛来した。

『メグルの代わりなんて、何処にもいないのよ!』

『黙れえええええつ!!!』

海上を目指すメロンパンの背後で、2匹のポケモンがぶつかり合う音がした。音に震えながらも、メロンパンはただ上を目指す。

自分の弱さに、吐き気さえ覚えながら。

温かい。唇に柔らかくてぬるい感触。流れ込んでくる空気と胸を押す痛さに、私の意識は浮上した。

「う……が……っ、げほげほッガほッげほ……は、はぁ……は……っ」

酸素を求めて激しく呼吸をする。私が意識を取り戻したことで、唇の感触は離れていた。鼻の奥がツンとする感じがして、肺が圧迫されているようだ。浅い呼吸を繰り返した後に口元に垂れる海水とか唾液を袖で拭った。

「まさかこんなところであなたに会うとはね……」

かけられた声に、ぼんやりとしていた脳内が一気にクリアになる。この声は、聞いたことがある。私は顔をあげた。

茶色の長い髪、両耳のピアス、黒が中心の服装、年齢に見合わない大人びた顔つき。その人は困ったように、それでいて安心した顔で笑っていた。

「ま、無事息を吹き返したようで良かったわ」

「ブルーさん！」

私は久しぶりに見たブルーさんに飛びつこうとしたが、自分の服を顧みて止めた。私の服は海水を含んでぐっしりと濡れており、とても人にくっついったりする気にはなれない。

「ポケモン達は!？」

まず気になったことを叫んでから、慌てて自分の周りを見渡す。腰のモンスターボールを確認するが、全部空になっていて真っ青になった。誰もいない。何処にもいない！

「他のポケモンはともかく、カメールならそこよ」

ブルーさんが示した方を見ると、そこにはいつも通りからにこもったメロンパンがいた。とりあえずメロンパンだけでもいたことに胸を撫で下ろす。私はメロンパンを抱きしめて、深く息をついた。

「良かった……」

「あんた他にはどんなポケモン連れてたの？　もしかしたら見かけたかもしれないし……」

「他には……スピアーとサイドンを連れてました」

ブルーさんは思い返すように眉を寄せたが、数秒考えて首を横に振った。

「……残念ながらアタシは見てないわ。でもスピアーなら空中に逃げる事が出来るし、サイドンはなみのりが使えるから、何とかなるわよ。心配しても仕方ないわ」

「……はい」

ブルーさんの言葉はもつともだ。心配しても仕方ない。

「よしー！」

私は頬を強くたたいた。彼等も私達を探しているだろうし、私ここで立ち止まっても進展はない。なんでもいいから歩きださないと。私は軽く服を脱いで絞るとまた着て、立ち上がった。

「メロンパン、戻ってね」

メロンパンに声をかけて、ボールに戻そうとする。しかし、メロンパンは素早くからから手足だけ出すと、ささっと横に移動して赤い光線を避けた。

「メロンパン？ どうしたの？」

「……」

黙ったまま、動かないメロンパン。こんなこと初めてで、私は困惑しながらメロンパンの横に膝をついた。

「ボールに、戻りたくないの？ 何かあったの？」

「……」

メロンパンはすぽっと顔を出して立ち上がった。じつとメロンパンを見て返答を待つ私を、大きな瞳で見つめ返してくる。何のリアクションも返してくれないメロンパンに、私は何となく微笑んでみた。

「……ッ！」

「ええっ!？」

メロンパンは大粒の涙を流して泣きだした。次から次へと溢れてくる涙に驚いた私は、おろおろしながらブルーさんにアイコンタクトを送った。

『ど、どうしたらいいんでしょうか!？』

『アタシには、どうしようもないわ』

ブルーさーん!!

ブルーさんに投げられた私が慌てていると、メロンパンがよたよたと近づいてきて、私の服の裾を掴んだ。掴んだまま顔をふせて泣き続けるメロンパンに、私はとりあえずその頭をそつと撫でてみる。メロンパンは一瞬びくつと震えたが、大人しく撫でられ続ける。撫でることに成功したのは良いが、ここからどうしたらいいのかが全く分からない。

私が何をしたというのだ。誰か教えてください。

メロンパンが落ち着いた後、ブルーさんにくつついていくことになった。うずしおで下の階への海中直線コースを進んだため、ここはふたご島の最深階近くになっている。地上の道を進んできた訳ではない私は迷う可能性が高かったし、メロンパンはなみのりが使えない。でも他のポケモン達も探したい。私が無理と迷惑を承知でブルーさんに仲間の探索協力を土下座で頼み込むと、ブルーさんは苦笑いして了承してくれた。

それはそれとして纏まったのだが

「メロンパン、大丈夫？ 戻りたくなったらすぐに言うんだよ？」

「……」

心配そうに問いかける私に向かって、メロンパンは無言で頷いて

少し前を歩く。

マサラタウンにいたころは、二人きりなら時偶に出てきてくれていた。だが今はブルーさんという他の人間がいるのに、こうやって自らの意思でメロンパンが歩いている。どういった心境の変化か、心の成長か。私が気を失っている間にどんなドラマがあったのか詳しく語って欲しい。確かに嬉しいけど、そんなにすぐに成長されても私は困っちゃうよ！

「ポケモンだってあんたの知らないところで、いつの間にか成長してるもんよ。温かく見守ってあげなさい、ユズル」

「そんなこと言っても……ブルーさあああん」

先行して歩いているブルーさんはざっくり言うが、私は付き合いが長かった分、どうしたらいいのか逆に分からない。それに、少し前を歩くメロンパンの揺れる尻尾を見て、どうにも私はどこか強い不安を感じていた。

メロンパンのひきこもりは一見治ったように見えるが、果たして本当にそうなのだろうか？ 私が溺れて気を失っている間に、確実に何かがあったことは間違いない。そもそも一緒に渦潮に巻き込まれたはずのナツツクッキーは何故いないのか。メロンパンが一鳴きすらもせず、無言を貫くのは何で？ いつもだったらもう少しくらい返事があってもいいはずなのに。

疑問が脳内を堂々めぐりして、答が見つからない。ああ頭が爆発しそうだ。私は元々考えるのがそんな得意な方ではなくて、むしろ感覚で動くタイプだ。こういった頭脳戦はカスムの方が得意なのに、そのカスムはいない。キリは私寄りの人間だからいても役に立たない。いや少なくとも私よりは頭が良いから、もしかしたら分かるかもしれないが、キリもないからやっぱり意味ない。

「……なに、考え込んでんのよ」

「うわたッ!？」

頭から湯気が出そうな勢いで悩んでいると、ブルーさんがいつの間にか目の前にいて、額を突っついた。ため息について私に指を突きつける。

「何度も言ったでしょ。考えても仕方ない事なら考えないでいいの! それ以上にアンタは、考えて動くような人間じゃないでしょうが!！」

ぼかんとした顔で目をパチパチさせていると、ブルーさんが真っ直ぐに私を見据えた。疑問が頭から一気に抜けて、シンプルな解答だけが残る。

私は今、どうしたい？

みんなを見つけて、また旅を続けたい。一匹も欠けることなく、みんな一緒に。

「ごめんなさい、難しく考えすぎてたみたいです」

照れながら笑うと、ブルーさんは突きつけてた指を下ろして同じように笑った。

「そうそう。“馬鹿の考え休むに似たり”って言うでしょ」

「ブルーさんそれは酷いです」

「あーら。“うたう”って技を知らなくて、ぷりりの歌で眠ったら

ブルーさんが言うと同時に、通路が終わって開けた場所に出る。続く私だったが、ふと一っただけ疑問が頭をかすめた。

そう言えばフリーザーはともかくとして、フリーザーってなんだったんだろう？

答えの出ない問いは一瞬だけで、私の頭を悩ますことなくすぐに消えていった。

T o b e c o n t i n u e ?

第十七話 ふたご島・中編（後書き）

前半シリアス後半ギャグ。でもナツツクツキーも色々あるので、嫌わないでやってくださいな。

第十八話 ふたご島・後編

「ギャーオオオオオオオオオオオオツ!!」

飛び込んだその先にいたのは、大きな美しい鳥ポケモンだった。深い青色の体、滑らかな長い尻尾、怒りに震えているとはいえ攻撃する姿までも息を呑む程美麗。

百聞は一見に如かずというか、想像をはるかに超えたその姿に私は圧倒されるばかりだ。

「流石伝説なだけあるわね!」

フリーザーと相対しながら、スターミーに乗ったお姉さんが叫ぶ。その姿に見覚えのあった私は、ブルーさんが何か言うよりも先に叫んだ。

「あああああつ! 渦潮お姉さん!!」

「……は?」

私を海の底へと引き摺りこんだお姉さんである。此処で会ったが百年目!

「リン、ミサイルバリ!!」

って、コーヒープリンは今いないんだつたああああツ!!

反射的に指示を飛ばしてしまったが、その一瞬後にコーヒープリンは今いない事を思い出し、私は頭を抱えた。

「きゃあああああッ!？」

「へ?」

しかし何処からともなくミサイルバリがお姉さんに飛来し、お姉さんはバランスを崩してスターミーから落ちた。お姉さんが海面に落ちるとフリーザーは隙を逃さず追撃としてふぶきを放った。海面に降り注ぐ勢いの強い雪にお姉さんの姿がかき消える。

お姉さんがどうなったのか気になったが、それよりもミサイルバリが飛んできた事の方に驚いた私は、飛んできた方向に目を向けた。

「スピ」

「コーヒープリン!？」

予想通り黄色と黒の姿がそこにあって、驚きと喜びに目を丸くした。何故ここにコーヒープリンがいるのか分からないが、とりあえず見つかったのなら何でもいい。コーヒープリンはこちらに向かつて飛んできて、いつも通り護衛するようにそばに寄り添った。

「ぶあッ!! けほっ助かったわ!」

ふぶきの直撃を受けて沈んだはずのお姉さんの声がして、続けて今度は男の人の声がした。けだるげなやる気のない声だ。

「ゲーム通りにはいかないもんなあ……」

滑らかな身体の黄色と水色の体のポケモンに乗ったお兄さんは、お姉さんを抱えていた。そこそ大きな体のポケモンは頭に球体を二つつけていてチカチカと発光を繰り返す。どうもお兄さんはお姉さんがふぶきを喰らう直前に、お姉さんを海中に引き摺りこんで凌

いだようだ。張り付く前髪をつつとおしそつに片手で掻きあげると、ブルーさんと私に目を向ける。その顔が一瞬強張った気がしたのは気のせいだろうか。

「あー……。まさかの原作キャラかよ……………」

ぼつりと呟いたその言葉が私達の耳に届く前に、フリーザーが凍てつくれいとうビームを空中から放った。それに即座に反応したお兄さんは、ポケモンに指示を飛ばす。

「ランターン、10万ボルトだ」

ランターンと呼ばれたそのポケモンは、10万ボルトを飛ばす。紫電を纏うエネルギー球はれいとうビームとぶつかり合って大量の水蒸気を発生させた。白い霧に包まれる空間に、お兄さんとお姉さんが言い争う声が微かに聞こえてくる。

「原作介入は無しだ。引くぞ」

「嫌よ！ 私はフリーザ様をゲットするまでは帰らないのよおおお
おッ！！」

「我慢しろ我慢。俺は原作介入なんてまっぴらごめんなんだよ」

「原作はブレイクしてこそ……………」

「あーはいはい、続きは後でな。ネイティ、テレポート」

「いーやあああああ……………」

声が遠のいていき、霧が薄くなるころには二人の姿はなかった。さっきの声から判断するにテレポートしたのだろうが、原作とかフリーザとか、一体何を言っているのかさっぱりだった。隣で静観していたブルーさんも呆れたような顔をしている。

「何の用だったのかしらね。……ま、邪魔ものが消えたのなら何でもいいわ」

ブルーさんはすぐにフリーザーに意識を切り替えて対峙する。フリーザーはあの二人が消えたことで多少落ち着きを取り戻していたが、それでも私達への警戒心は非常に強く感じる。

ブルーさんがポケモンを出さず、じっとフリーザーを見据える。ブルーさんの目には恐怖と葛藤が見え隠れしていて、私はその時になって初めてブルーさんが鳥ポケモンが苦手であることを思い出した。

「ブルーさん、大丈夫ですか……？」
「……」

ブルーさんは答えない。無言のままにフリーザーと見つめあっているだけだ。おもむろに口を開くと、フリーザーに語りかけ始めた。

「ある男の計画を阻止するために……アタシには貴方が必要よ。アタシと一緒に戦って頂戴。フリーザー」

その声は震えていて、それでも覚悟に満ちた言葉だった。フリーザーはゆらりと体を揺らすと、その口元にエネルギーを溜め始める。ブルーさんはチャットとモンスターボールを構えて臨戦態勢に入った。その時、ガタガタと腰のモンスターボールのメロンパンが暴れて、私は驚いてモンスターボールを手を取った。

「メロンパン出たいの？ でも危ないよ？」

伝説のポケモン・フリーザーVS前回のセキエイリーグ3位・ブルーさんの戦いなんて、私にはレベルが違いすぎる。足手まといに

なる自分の姿しか浮かばなくて、メロンパンに一言だけ言って腰に戻した。

「足手まといになるだけだから、手を出しちゃだめだよ」

此処は邪魔にならないようにしているのが一番だろう。飛べるコーヒープリンはともかくとして、メロンパンは下手すればはぐれる可能性もある。現にナツクツキーとも合流出来ていないし、これ以上仲間とはぐれるのは避けなかった。

メロンパンは私の一言にピタリと暴れるのを止めて大人しくなる。メロンパンがモンスターボールから飛び出してきたらどうしようと思っていたので、私はほつと胸を撫で下ろした。

「行って、カメちゃん！」

「カメエエエックス！」

カメックスのカメちゃんがモンスターボールから出て、ブルーさんを守るように立ちはだかった。フリーザーはカメックスに向けてれいとうビームを放つ。ブルーさんはカメックスに既に指示を出していたようで、同時にハイドロポンプが放たれた。

「ギヤ オオオオオオオオオオオオッ！」

「ゴオオオオオオオオッ！」

れいとうビームとハイドロポンプがお互いにぶつかりあおうとする。だがその二つがぶつかり合う直前、海中から天に向けて光が一直線に走った。その2つを弾いて、なお天井を突き破って行った光線に唾然としてみると、大きな水柱があがりオレンジ色の巨体とナツクツキーが現れた。

ないかと思う程の声で叫んでいた。

「馬鹿な真似はやめなさあああああいつ!!」

その一声で、2匹は金縛りでも受けたかのように硬直した。カイリユーは信じられないものを聞いたかのように私を見て目をパチパチさせ、ナツクツキーはゆっくりとこちらを凝視する。硬直して2匹の動きが止まったことよって、激しい戦闘の音が止む。だが一気に静まったはずの空間に地響きの音がまだ響いていて、私は首を傾げた。

「……………何の音？」

直後にブルーさんが真つ青な顔になって、悲鳴のような声をあげた。

「崩れてんのよ！ 逃げるわよ!!」

「え？ ……あつ！ ああああああッ!!」

その言葉の意味を一拍置いて理解する。あれだけ破壊光線やらなみのりやらぶつ放したのなら、崩壊が始まるのは当然のことだ。大きくなっていく地響きにブルーさんが私の手を引きかけて、ハツとした顔でフリーザーを振り返った。

「フリーザー、あんた地上へ出る道知ってるんじゃないの？」

それはもつともな質問だった。フリーザーのような大型の鳥ポケモンが、階段や入り組んだ場所を通らないような通路を使用するとは考えづらい。とくれば、鳥ポケモンだけが入ってこれる、ここから地上への直通路があると考えるのが自然だった。

「ギヤオッ！」

フリーザーは短く鳴くと、ブルーさんと私が乗りやすいように体を寄せた。この状況下で脱出にフリーザーの協力が得られるのはありがたい事だ。私はブルーさんと一緒にフリーザーの背中に乗りこむと、ナツクッキーとコーヒープリンに向けてモンスターボールの赤い光線を放つ。コーヒープリンは当然大人しく収まり、ナツクッキーはというと一瞬カイリユーを見たが、やはりボールにちゃんと戻ってくれて私はほっとした。カイリユーも既に落ち着いているようだし、後は

「フリーザー、お願い！」

「お願いします！！！」

私がポケモンを回収し終わったのを確認すると、フリーザーはすぐに飛び立った。その間も崩壊は進んでおり、天井から次々と崩れ落ちた岩が私達を襲った。迫る数々の落盤に私は肝を冷やしていたが、ブルーさんはあくまでも表面上は冷静に状況を観察して、フリーザーに指示を飛ばしていた。

「フリーザー、右！」

「ギヤア！」

「左下！」

「ギヤ！」

「右斜め下47度！」

「ギヤアアッ！！！」

「すごい……！」

即席とは思えないほどの息の合いように、私はだんだんと恐怖が

薄らぎ始めていた。すぐそばに落ち着いている人がいるので、それに感化されたのかもしれない。そのうちに体は震えていても、状況のある程度観察できるようになっていた。肩越しに振り返るとすぐ後ろについてきているカイリユウの姿に、目を疑った。

「な、何でついてきてるの!？」

まさかナツツクッキーとのバトルを中断されたから怒っているのだろうか。私の悲鳴にブルーさんは一瞬だけ背後を振りかえり、舌打ちした。

「ユズル、カイリユウは頼んだわ!」

「ええええええええっ!？」

ブルーさんのまさかのパスに、私はこれまでで一番大きな驚愕の声をあげる。口をパクパクさせながらブルーさんとカイリユウを見比べるが、確かにブルーさんはカイリユウにまで手を回せる状態じゃない。ならば私が相手をしなければならぬのだから、冷や汗が止まらなかつた。海の化身、ドラゴンタイプ、知能も人間に匹敵するほど良いと言われている上、さつきまで血みどろの戦いを繰り広げたカイリユウを相手にするとか無理無理無理!! 凶鑑で呼んだ限りでは、“海で溺れている人を助けるため、広い海をいつも飛び回っているという”とか“広い海のどこかに住処があると言われる”。難破した船を陸まで導いてくれる”とか人間に対してかなり好意的に書かれていたが、先のバトルからはとてもじゃないが想像できない。

私は戦々恐々としながらカイリユウをもう一度振り返った。フリーザーに狙える隙がないのか、カイリユウも落盤相手に手いっぱいなのかは分からないが、いつ攻撃してくるとも限らないのであればカイリユウに意識を集中するしかない。

「……？」

カイリユーも飛びながら私を見ていたらしく、ぱっちり目が合った。その瞬間、私の中にあつた恐怖とか怯えが一気に吹っ飛んでいく。カイリユーの瞳に映る色はごく最近見たものにそっくりで、それでいて少しだけ違ったものだった。全く感じられない敵意に既視感、そして

僅かな懐かしさと悲しみの色。

「君は、」

カイリユーに向かって踏み出した一步。不安定な足場で立ち上ればどうなるか分かっていたはずなのに、私はカイリユーの瞳の意味を知りたいとだけ感じていた。理由は分からないけど、心よりもっと奥の奥、魂のどこかから飢えるほどに求める感覚。

分からないけれど知りたい。

分からないから知りたいと思うのか、本当は分かっているからこそ知りたいと思うのか。

そんなこと、もうどっちでもいい

「右、右上、し……ッユズル!？」

踏み出した一步は、容易に体を中空へと投げ出させた。崩れゆく

岩壁もブルーさんの声も、視界の端に流れていくフリーザーのしなやかな身体も、私には関係ない。

……いや、本当に関係ないか？

夢を見ているような状態だった私の脳内が、突如としてクリアになる。落ちている。間違いなく私は落ちていた。フリーザーの体から落ちて、容赦なく現実を突きつける落下の感覚。

「ぎゃあああああああああああああああッ!？」

悲鳴が喉を引き裂いた。

「バウッ!」

カイリユートの鳴き声が聞こえて、私はあの世まっしぐらの尖った岩肌ではなく、柔らかい何かに着地する。反射的にその身体にしがみつき、ほっと息をついた。

「……カイリユート？」

「バウッ!」

どうも私を見事にキャッチしてくれたのはカイリユートだったらしい。柔らかな毛並みの体に必死でしがみつかながら首を傾げた私に、カイリユートは元気よく返事をしてくれた。

「ユズルーツ！ 生きてる！？」

先行するブルーさんが声を張り上げた。「大丈夫ですーッ！」と叫び返すと、カイリユウの背中で乗りやすいところを探して慎重に動く。カイリユウは器用に岩壁を避け、フリーザーの後を追う。さっきの見詰めあいによつて、私はほぼ本能的にこのカイリユウは敵ではないと判断していた。

「……あ！」

前方に光が見える。すぐに光は大きくなって、心地の良い風が解けたままの髪を撫でた。髪を結んでいた紐は溺れたときに無くしてしまったので、塩気を含むものの既に乾ききった髪が後方に流れていく。それをくすぐったく思いながら、この地獄のレースの終了に、体の力が抜けていくのを感じていた。

「ア・ン・タ・は・なあにを考えてるのよッ！！」
「いひゃいひゃいひゃいひゃい！ ほめんなひゃい！！」

ふたご島の頂上近くの草はらで、私はブルーさんに厳しい折檻を受けていた。理由は当然、フリーザーの背中からふらふら飛び降りたことについてだ。

あれから私たちはふたご島のてっぺんの入り口から出て、少し降りたところに着地していた。一人、一匹たりとも欠けることなく脱出出来たのは正に奇跡なのではないだろうか。降りてすぐにブルーさんは私にお説教を開始した。ほっぺたをつねりながらブルーさん

は黒い微笑みを浮かばせる。

「オホホホホホ。このほっぺたは何処まで伸びるのかしらねええええ……！」

「いひやいれす！ もうのりないれすふふふふ！！」

精神も体も、もう擦り切れそうだというのに、これ以上攻撃しないでええええ。

ブルーさんの言いたいことは良くわかるので反論はしない。それでも痛いものは痛いのでこれくらいで許してブルーさん！

「ったく！ ま、この辺で許してあげるわ。十分反省もしたでしょうしね」

パチンつと引っ張っていた手を放し、ブルーさんからほっぺたが解放される。確実に赤くなっているであろうほっぺたを擦りながら私は頭を下げた。

「ご心配おかけしました……」

ブルーさんは「本当にね」と言うと、フリーザーに向き直った。フリーザーとカイリユーは並んで待っていて、迫力はあるのだが威圧感とかは感じなかった。フリーザーはじつとブルーさんを見ていて、ブルーさんはふつと笑うとモンスターボールをフリーザーに向けて投げた。フリーザーは身じろぎ一つせず、モンスターボールに収まって行った。

「……ありがと、よろしくね。フリーザー」

ブルーさんはフリーザーの収まったモンスターボールにキスを落とすと、次にカイリユーを見て、何故か私を見た。

「ユズル、カイリユーをどうするの？」

「どうすると言われても……」

私がチラリとカイリユーを見るとカイリユーは一鳴きして私の顔を舐めた。

「うひゃっ!」

カイリユーは何かを期待するように私を見詰める。これは、つまりゲットして欲しいということでもいいのだろうか？

「何迷ってんのよ。カイリユーがゲットして欲しそうなのは、一目瞭然でしょうに」

「バウ」

私はカイリユーが「その通り!」と鳴いた様な気がした。空のモンスターボールを投げると、カイリユーはすぐに吸い込まれていてモンスターボールは草原に落ちる。それを拾い上げて、私はカイリユーに笑いかけた。

「仲間になってくれてありがとう。ようこそ、カイリユー」

見慣れているはずの青い空は、その時ばかりは息をのむほどに美しく感じた。

生きていくって、素晴らしい！！

To be continue.....?

第十八話 ふたご島・後編（後書き）

ぎりぎり今日中にアップ完了ー！！お疲れ様でした私！眠い！！寝ます！！

第十九話 グレン島・前編

窓から注ぎ込む月光は薄く、室内を照らしだす。ベッドと小さな机くらいしかない狭い宿の一室。ベッド横には汚れたバッグが置かれ、机の上にはモンスタールボールが数個転がっている。

部屋の床に、メロンパンが座っていた。窓からぼんやりとした目で夜空を見上げていて、白い尻尾はゆらゆらと揺れている。

「……………」

しばらく空を見ていたかと思うと、おもむろにベッドに目を向けた。ベッドの上では、長い黒髪の少女が小さな寝息をたてて眠っている。メロンパンはじつとその顔を見詰めていたが、そのうちに立ち上がって部屋の扉へと歩き出した。

「……………」

部屋の扉を開ける。廊下から細く光が漏れ、少女は少しだけ身じろいだ。メロンパンは体を揺らして少女を振りかえったが、少女は起きる気配はない。ほっとしながらも、メロンパンは少女から目を放す事が出来なかった。未練を振り払うかのように頭を横に振ると、部屋から出て扉を閉める。

夜は静かに、更けていった。

「あれ？」

いつもの朝を迎えたはずだったのに、その日は何かが違っていた。モンスターボールもリュックも、何もかも寝る前と同じだが、決定的に違ってある朝。

メロンパンがない。

メロンパンはいつも同じ布団で寝ている。朝起きたらメロンパンがいるのは最早当然のことだったのだが、今朝に限ってメロンパンはいなかった。

まあその時は「そのうち帰ってくるだろう」くらいに受け止めていつも通り朝の準備を開始した。しかし全て完了して、ポケモン達にもポケモンフーズを与えて、部屋で待っていたのだが。それでもメロンパンは帰ってこなかった。

「……？」

胸騒ぎがする。私は荷物をまとめると、部屋を出た。その間も胸騒ぎが止まず、どんどん不安が大きくなっていく。

何かがメロンパンの身に起こっている気がする。コーヒープリンを伴って私は通りがかった宿の人を捕まえると、焦るままに問いかけた。

「メロンパン知りませんか!？」

宿の人は何故か「え？ ええー……」という表情をすると、宿の出口を指差して答えた。

「真っ直ぐ行ってすぐの角を曲がって、右手だよ」

「真っ直ぐ行ってすぐの角を曲がって右ですね！ ありがとうございます！
います！！」

頭を下げた走り出す。後ろの方で「まだ開いてないよー」と聞こえた気がしたが、何が開いてないと言うのだから。心か！ 心なのか！ それなら最初からシエルターにINしてるから問題ナツシングのノープロブレムですよ！

映画で良く使われる英語くらいだったら分かるよ！ 意味は詳しく知らないけど、大体「問題ない」の意味だった気がする。

宿を出て真っ直ぐに走る。メロンパンを見つけなければいけないという思いのままに、すぐに見えた角を曲がり右手を見た。目に飛び込んでくる大きな看板。

“タナカベーカリー”

入り口にかけられた“CLOSE”とベーカリーの意味は知らないが、とりあえず私は扉を開けて中に入る。コーヒープリンは店の前で待機だ。暗めの店内に眠そうな目をしたお姉さんが立っている。お姉さんは目を擦りながら「待つて下さあい」と間延びした声でいうと、あくびをした。私は息を切らしながら問いかける。

「め、メロンパンいませんか！？」

お姉さんは「ううん」とゆっくり首を傾げると、のんびりと答えた。

「まだ焼きあがってないから、待つてねえ」

焼きあがっていない……だと……！！？

それはアレか！ メロンパンをかまどで焼き殺し終わってないか

ら待てと言っているのか！ メロンパンをカリッと焼きメロンパンにするというのかあああああッ！！

「なんてことをしようとしてるんですか！ 貴方は鬼だ！ 悪魔だ
あああー！！」

私は思わずお姉さんの両肩を掴んだ。両手にむにとした柔らかい感触。おおう、これはなかなか……じゃない！

「ひぎゃああああああつー！！」

私は真っ赤になってお姉さんの胸から手を放して飛びのいた。なんとという弾力、なんとというボリューム、それでいてマシユマロのように優しく……この胸は逆セクハラに値する一品、こんな胸が存在するとは私は認めない！ 私は自らの悲しき大平原を抱きしめると、キツとお姉さんを睨んだ。

「く……ッ！ これで勝ったと思わないでください！」

お姉さんはやはりゆっくりと手を口元に当てると、思案気な表情で自分のふたご山と私の大平原を見比べる。見ているうちにその目が更にとろんとして、頬を赤く染めた。

「ううん……やっぱり貧乳ロリータはいいわあ」

……何か恐ろしい一言を聞いた気がする。

これ以上ここにしていると危険だと感知した私は、お姉さんを押しつけて店の奥に走った。カウンターの向こう側の扉を開け放つと、厨房がすぐに続く。厨房のいくつつかのかまどでは、何かを焼いているらしく良い匂いが漂っていた。そこには今度は清潔感のあるおじさ

んが立っていて、こちらを困惑の眼差しで見てる。

「ダメだよ、君。待ちきれないのは分かるが、今はまだ開店してないんだから」

「か……っ」

回転だつて!? メロンパンをかまどの中で回転させているのか！ 焼き残しの無いように回転させながら炎熱地獄を与え続けているのかああああああ!?

マサラタウンの母さん父さん、グレンタウンは怖いところです！ ポケモンを堂々と焼き殺す発言をする外道がごろごろいるようです!!

いや待て。もしかしたらこの二人が特殊なだけで、本当は良いひとが一杯なのかもしれない。だとしたら私はなんて勘違いをしようとしていたんだ！ 冷静に状況を把握することを忘れて熱くなるなんて、ポケモントレーナー失格だぞユズル!!

「了解です。落ちついてみます」

「まあ落ち着いてくれたのなら良かった。外で待つてね」

「はい」

厨房を出て、店内で掃除を始めたお姉さんの横を通って店を出る。店の前で待つていたコーヒープリンには待機を伝えて、もう一度、今度は小さく言葉にしながら情報を整理した。

まず、メロンパンが消えたのだ。そして、メロンパンはここにいないと言っていた。店に入ってみるとお姉さんが「まだ焼きあがっていない」と答え、奥の厨房でエプロンをつけたおじさんが「開店まで待つてくれ」と言う。

ここから導き出される、真実とは？ あくまで冷静に、考えて見

た。

「……………」

私は無言で、店の扉に向き合う。

結論は出た。大きく息を吸って、扉を蹴破った。

「このポケモン殺しどもおおおおおおおおおお！！！」

「スピッツ！」

「ぎゃああああああああつ！！！」

入ったとたんにコーヒープリンが私の後頭部にその両手の針を突き刺した。倒れて沈黙する私。コーヒープリンは私のリュックサックに針を引っ掛けると、そのままずると店の外まで引っ張って行った。パタム、と静かに扉が風で閉まる。

十分後。

そこには地に額を擦り付けて謝罪する私と、苦笑いする店主の姿があったそうなの。

落ち着いた私は、メロンパン搜索を再開した。頭からダクダクと血が流れて少々貧血気味だが、血が上った頭にはちょうどいい。なんだか視界がかすんでいるような気がするが、些細な事である。

搜索に関しては「メロンパンを知りませんか？」と訊ねたのがどうもいけなかつたらしい。今度はちゃんと、「カメラを見ませんでしたか？」と訊ねることとする。

だが、町中の搜索には懸念が一つある。メロンパンが水タイプであるからだ。メロンパンに外海に泳ぎだす根性があるとは思えないが、万が一と言う事もあるだろう。

「ナツツクツキー、ソルトアイス、二匹とも出てきて!!」

モンスターボールを中空に放り出すと、軽やかな音をたてて中から二匹が現れた。ソルトアイスは昨日のうちにカイリユーにつけた名前だ。モンスターボールから出たとたん、睨み合いを再開した。しかしそんなことに構っている暇はない私は、単刀直入に二匹に話を切り出す。

「あのねメロンパン」

「バウウウウウウ!!」

「ゴオオオオオオ!!」

「あの二匹と」

「ウウウウウウウ!!」

「コオオオオオオ!!」

「だか」

「バウッ!!」

「ゴオオオオ!!」

……プチッ

「リン、全力でミサイルバリ」
「スピ」

とりあえず二匹を沈黙させた。

「……と言うことで、メロンパンが見つからないので探すのに協力してね」

「ゴ」
「バウ」

私の言葉に応じて、ソルトアイスは空高く舞い上がり、ナッツクッキーは海へと走り出す。ソルトアイスには上空から探してもらい、ナッツクッキーには一応周辺の海を探索してもらおうという事だ。コーヒープリンはもしメロンパンを見つけた時、速やかに捕獲出来るように私についてきてもらう。

二匹が探索を開始するのに合わせて、私達も町の中心部へと向けて走り出す。

「……急がないと」

止まない不安が、私の胸を支配していた。

「はぁ……っは……はぁ………」

見つからない。何処にもメロンパンがない。もう太陽も中天を過ぎ、じりじりとした陽気が私の体を焼く。疲れ切った体は休息と空腹を訴えていたが、それを無視して次の通りすがりを捕まえた。

「すみません！ カメールを見ませんでしたか！？」

泣きそうになりながら訊ねると、その人は気の毒そうな顔をして答えた。

「いや……残念ながら見てないよ」

「そう、ですか……ありがとうございます……」

肩を落としている場合ではない。私は次の人を探して走りだそうとした。

しかし、その人は私の服の端を慌てて掴むところ言った。

「待ってくれ、ポケモンを探しているのだろうか？ グレンのジムリーダーに協力を求めたらどうだ」

「ジムリーダー、ですか？」

その言葉に、私は足を止めて振り返った。その人は私が足を止めたことにホッとして、続きを話し出す。

「ああ。あそこに火山が見えるだろうか？ その近くにカツラさんは住んでいる。まずは火山の近くに行つて、近隣の人にジムの場所を訊ねると良い」

「火山……分かりました、行つてみます！」

そのまま火山に向けて走り出す。走りながら肩越しに振り返って

その人に叫んだ。

「ありがとう！」

その人は手を挙げて叫び返す。

「君にトゲキッスの祝福があらんことを！」

……棘キッスってどんな祝福ですか。ものすごく痛そうなんですが。

そんなことを思いつつ、走って走って火山付近。近場にいた人を捕まえて、グレンジムに到着した私だった。

外側は他のジムと大体同じづくりのグレンジム。その扉をくぐって私は声を張り上げた。

「こんにちは！ カツラさんはいますか！？」

まず目についたのは、固く閉ざされた機械式の扉に、その前に立つトレーナー。筋骨隆々 ではなく、ひよろつとした感じの不健康そうなお兄さんは、眼鏡をくいつと上げて言った。

「カツラさんに会いたいのなら……クイズに答えるのだ！」

「く、クイズ！？」

突然の宣言に、私は言葉を失った。だがお兄さんはそんな私にお構いなしに、眼鏡を光らせる。

「ふふ……お前に答えられるかな……？」

「……！」

迷わず“はい”のボタンを押す。「ピンポーン」と軽やかな音がして、機械が重々しい音をたてて開いていった。

「馬鹿なああああああッ!!」

扉が開く様を見て崩れ落ちるお兄さんを放置して、次の扉に進む。そこにはまたひよろひよろのお兄さんがいて、同じく不敵に笑った。

「ふっふっふ……奴は倒せたようだが、私はどうかな？ 奴は我ら

グレンジムトレーナー集団の中でも、一番の小物！」

「なんでもいいので早くしてください」

「そのふてぶてしさ……！ 良かろう、しつもん タイム!!」

やはり眼鏡を光らせて（以下略

「ポケモンリーグ認定バッジは、全部で8種類？」

「……」

スタスタ

ポチ

ピンポーン

「ぐはあああああああッ!!」

お兄さんはどさりと倒れ、機械式の扉が開いていく。次の扉に進みつつ、私はぽつりと呟いた。

「大丈夫かな……グレンジム」

こんなに心配になるジムは、初めてだった。

To be continue.....?

第十九話 グレン島・前編（後書き）

しばらくシリアスが続いたので、今回はギャグで決めてみました。

第二十話 グレン島・後編

「くくく……よくぞここまでたどり着いたな、挑戦者よおおおお
おおおッー！」

「……」

私は最早無言で、目の前の男性を見た。長い黒髪を三つ編みにして後ろに垂らし、フレームの無い眼鏡をかけた、ひよろつとしたお兄さんだ。お兄さんは不気味な笑い声を漏らしながら、黒いマントを翻した。

「我こそはあッ！ グレンジムトレ」

「カツラさんは？」

聞き飽きたセリフを遮って、私はお兄さんに抑揚のない声で問いかけた。見たところ、お兄さんの後ろに機械の扉はもうない。隠し扉でもない限り、ここがジムの最奥で間違いないだろう。

「ふっ……」

お兄さんは不敵に笑った。そして分厚い眼鏡を光らせると、無表情の私を見る。

「その質問には……この俺に勝てたとき、答えてやるっ！」

私は無表情のまま、片眉だけピクリと上げる。お兄さんはまたも無駄にマントを翻して、指笛を吹いた。甲高い指笛の音がジムに響き渡り、それを合図としてジムの天井が開かれていく。

「我こそは、グレンジムジムリーダー集団最後の砦。チートレム・オリツシュ！」

お兄さんは宣言と共にマントを脱ぎ棄てる。脱ぎ捨てた直後、一陣の強い風が吹き、私は目をつぶった。次に目を開けた時に見たものは、風によって飛ばされ地に落ちる眼鏡。

「お相手願おうか、挑戦者」

端正な顔が露わになったお兄さんが、ニヤリと笑ってモンスターボールを構えた。

「ニヨロモは3回進化するポケモンである？」

ピンポン

「ぎゃあああああああああッ！」

「電気タイプの技を繰り出した時、地面タイプには良く効く？」
ピンポン

「げぶろおおおおおおおッ！」

「同じレベルの同じポケモンでも、捕まえるたび強さは違う？」
ピンポン

「GUGEEEEEEEEEEEEEEEEッ！」

五人目のクイズに正解し、私はもはや無言で扉をくぐる。私の通った後にはひよろひよろなお兄さん達×5が死屍累々と横たわっていた。

もう嫌だこのジム。

何かがすり減っていくのを感じながら、それでもメロンパンの為、メロンパンの為と言い聞かせて先へと進んでいく。だがやっと終わりが見えてきたようで、次の人で最後だった。何かほにゃほにゃいっているようだが、私は開いた天井の向こうに見える、空を見て思う。

空が……青いなあ……。

良く晴れ渡った蒼穹を横切って、ソルトアイスが飛んでいた。ソルトアイスは私を認めると、天空にとどまったまま首を振った。まだメロンパンは見つかっていないようだ。ため息をついているとお兄さんがモンスターボールを投げた。その数は持てる最大数である、6つ。何を考えているのだろうか。

多量の煙を出して、ポケモン達が姿を現した。見たことあるポケモン、見たことないポケモン、色々混じっているメンバーだったが、私の無表情は崩れなかった。

「俺の使うポケモンは、ギャロップ、バクフーン、バシャーモ、ブースター、ヘルガー、シャンデラだ。炎タイプ一択だが、そう簡単に勝てると思うなよ?」

「……ソルトアイス」

私が上空のソルトアイスに声を掛けると、ものすごいスピードで降下してきて、砂埃を舞い上げる。ジムの設備が反応し、すぐにスプリングラーによって静まって行く砂埃。クリアになった視界の向こうにいるお兄さんに向かって、私は静かに言った。

「貴方に勝てば、カツラさんの場所を教えてくださいませんか？」
「あ、ああ……そうだ」

お兄さんは少しだけ顔を青くしたが、何かを振り払うように頭を振る。もう一度こちらを見た時には、顔色は元に戻っていた。私は淡々と言葉を紡ぐ。

「分かりました。始めましょう」

バトルフィールドにヘルガーが出て、私はソルトアイスを出す。審判の人もいつの間にか出ていて、宣言をした。

「どちらかの持ちポケモンが全員戦闘不能になった時点で、片方の勝利とします」

スツと旗が挙げられて、審判の人は叫んだ。

「試合　　開始！」

お兄さんは先手必勝とばかりに、ヘルガーに指示を飛ばす。

「火炎放射だ！」

ヘルガーは口から紅蓮の炎を真っ直ぐに吐き出した。ソルトアイスは動かない。私からの指示を待って、じつとそこに立っている。私の心は、いつになく静まり返っていた。焦りも高揚感も、何も無い。何も考えなくとも、指示すべき技が頭に浮かんだ。

「竜巻」

そこで初めてソルトアイスが動いた。背中羽根に寄って巻き起こされる風の塊は意思を持っていくかのように、ヘルガーの火炎放射にぶつかる。衝突しあうかと思われたが、逆に竜巻は火炎放射を巻き込んで、炎の竜巻と化してヘルガーに襲いかかった。

「へ、ヘルガー！」

お兄さんの焦った声が聞こえる。炎の竜巻に閉じ込められたヘルガーの断末魔は、燃え盛る炎の音と風の音にかき消されて耳に届く事はない。

そのまま竜巻は数秒荒れ狂っていたが、その後小さくなって消える。焦げ付いたフィールド上には、全身火傷を負ったヘルガーが倒れ込んでいた。お兄さんは顔をゆがめるが、私の表情は変わらない。

「戻れ、ヘルガー……。行って来い！ ギャロップ！！」

炎を纏ったギャロップが、真っ直ぐにはなく翻弄するように駆けまわりながら、じわじわと距離を詰めてくる。目で追う事が敵わないその動きに、お兄さんは得意げになる。

「この動きについてこれるかな!?」

確かに見えないなあと思っていると、脳内に誰かの声が響いた。

しよせん馬。臆する必要はないわ。

そんなこと言われるまでもないと反射的に反論したが、直後に首を傾げた。聞いた事の無い声なのに、酷く耳に馴染む。思案していた私だったが、ソルトアイスに迫るギャロップに思考を放棄した。

尻尾よ。

「尻尾で掬い飛ばして」

「バウッ！」

突撃してきたギャロップの足元を尻尾で掬うと、不意を突かれたギャロップが体勢を崩す。その瞬間を狙ってソルトアイスが尻尾でギャロップの体を尻ぎ払った。

「ギャンッ！」

壁に衝突して、目を回すギャロップ。余程勢いが良かったのか、そのまま動かなくなった。

「……くッ」

お兄さんが冷や汗を流しながら睨みつけて来るが、私はどこ吹く風。お兄さんの次のポケモンを黙って待った。

「バクフーン！」

次のポケモンは見た事の無いポケモンだった。お兄さんは今度は攻めてこず、こちらの出方を伺うようにしている。2体があっさり倒されたので警戒しているのだろう。

無駄な真似を。

脳内に響く声はもう気にせず、私はソルトアイスにアイコンタクトを取った。

「破壊光線」

ソルトアイスの口から光が一直線にバクフーン目がけて走る。だが待ち構えていただけあって、バクフーンは紙一重で避けると動かないソルトアイスに迫った。

「かみつく！」

「戻れ！ リン、ミサイルバリ！！」

噛みつくがヒットする直前に交代させて、一呼吸すらおかずにコーヒープリンを前に出す。噛みつくが空振りに終わったことで前のめりに体勢を崩したバクフーンに向けて、コーヒープリンのミサイルバリが襲いかかった。

「バグフウツ！」

戦闘不能に陥ったバクフーン。お兄さんが非難の眼差しで私を見た。

「おい！ 直前に交代するなんて卑怯だろう！！」

卑怯？

私がお兄さんより先に、脳内に響いた声が口から飛び出した。

「いつ交代しようがあたしの勝手でしょう。負け犬の遠吠えに貸す耳はないわ」

「なッ負け犬だと！？」

私の言葉にお兄さんは激昂して怖い顔になる。あたしは歪んだ笑

みを口元に浮かばせた。

「だってそうじゃない。文句があるなら勝って見せなさいよ」

「貴様……！」

怒りの燃える瞳に、仄暗い喜びが湧き上がる。そうよ、もっと熱いバトルがしたい。もっともっと怒りに染まって、憎しみそのものをぶつけて来るような戦いを見せて。苦戦に奥歯を噛み締めるような、悔しさで涙を流すような、そんな感覚を味わわせてよ。

こんなもんじゃまだまだ足りないよ。貴方は弱すぎる。

「行けえ！ ブースター！！」

端正な顔が醜く歪む様を見て、ペろりと唇を舐める。

弱者は弱者らしく、精一杯噛みついてちょうだい。

「 勝者、マサラタウンのユズル！」

審判の人の声に、私はハツとした。頭がくらくらする。なにか夢を見ていたような、現実との境目を彷徨っていたような、妙な気分だった。

「……」

フィールドに目を向けると、そこにはソルトアイスが無傷で立っていた。その前には見た事の無いポケモンがボロボロになって倒れ伏していて、私は首を傾げた。

戦っていたはずなのに、どこかスポツと記憶が抜けたような感覚だ。目の前のポケモンをどうやって倒したとか、そういった事がまるで記憶に残っていない。

だが状況を見る限り、私が勝負に勝ったということだよさそうだ。私は何故かへたり込んで俯いているお兄さんに歩み寄って、声を掛けた。

「カツラさんの場所を教えてください！」

お兄さんは顔を上げなかった。震えた小さな声で、短く言う。

「………ジムの裏手に入り口がある。その研究室だ」

「ありがとう！」

私はすぐにジムの裏手に向けて、振り返らずに走り去った。

ユズルが去ったフィールドに、男がへたり込んでいた。

「……ッ」

地面に落ちるいくつもの黒い痕。体は小刻みに震え、男は唇を噛

「カメール？ カメールならここにいるが」
「ええっ！？」

結論から言おう。メロンパンはカツラさんのところにいました。

……何でやねーん。

「メロンパン！」
「……！」

白衣を脱いだカツラさんの後ろに隠れるメロンパン。

カツラさんは野生ポケモンに襲われているメロンパンを保護したらしい。びくついていたらそうだが、満身創痍で動けなかったためそのまま連れてかれた。メロンパンが白衣が怖いことも既に知っているようだ。

「……君に伝えておきたい事がある」

カツラさんが、しょぼくれている私に声を掛けた。

カツラさんの話を要約するところだ。カツラさんはある方法でメロンパンと対話してみたらしい。このおかげでメロンパンはカツラさんにひっついてきているようだ。そしてメロンパンの話というのは、実力に関する事だった。

「……彼はこのままでは君の足を引っ張ってしまうから、ここでお別れするつもりだったらしい」

そういうことだったのか。カツラさんの説明で、メロンパンが消えた謎は解けた。

というわけで、メロンパンは空中を飛ぶこととなった。

私の拳に寄って軽やかに放物線を描くメロンパン。カツラさんは突然の出来事に啞然とし、私は甲羅を殴ったことでの痛みを無視してメロンパンにずんずんと近づいていく。

「!……ぜ」

「はい、捕まえた」

裏返ったメロンパンが逃げようともがいているところを、私はひよいと持ち上げた。すぐに甲羅にこもろうとするメロンパン。しかし私はそこで鋭く言い放った。

「逃げるな!」

「……!」

メロンパンは私の言葉に、金縛りにかかったかのように動きを止めた。

逃げるなんて許さない。目を逸らすのも許さない。私は真っ直ぐにメロンパンを見据えた。

「メロンパンは、根性無しだよな」

「ぜ……」

メロンパンが泣きそうな目で見つめ返してくる。それでも私

は言葉を紡ぎ続けた。

「ひきこもりだし」

「……」

「ほとんど喋らないし」

「……」

「ビビりだし」

「……」

「まともに戦ったことなんて、ほとんどない」

「……っ」

メロンパンは私の言葉一つ一つに体を震えさせて、ボロボロとその目から涙を流す。

私は、その身体を抱きしめた。メロンパンの体が一際大きく震えた。

「でも、私はもつと情けないよ」

「……ッ!？」

メロンパンが私の言葉に息を呑む。

「メロンパンがいなくなっただけで、すごく焦った」

「……せ」

「落ち着かなくて、心に隙間が出来たみたいで」

「……」

「探しても見つからなくて、泣きそうになって」

「……」

「姿を見たとき、本当に嬉しかったんだよ」

「……」

一言言っただけに、ぼろぼろ私の目からも涙が零れた。悲しくて泣

いてるのか、嬉しくて泣いてるのか、全然分からないけど、もしかしたら両方なのかもしれない。

「あのね、メロンパン」

メロンパンが消えた理由を聞いた時、一番に浮かんだ言葉があった。

「私は君の事を全部承知の上で、旅に出たんだよ」

マサラタウンを出たときに言った言葉。

「戦えなくなつて構わない、君が一番そばにいて欲しい」

言葉に出したことは一回しかなかったその言葉を、もう一度伝えたい。

「私は」

メロンパンを抱きしめていた手を解いて、正面からメロンパンを見る。メロンパンは涙で濡れた情けない顔をしていて、私と一緒にこんな近くにいたのに、大切な事をメロンパンはきっと忘れている。

私はね、メロンパン。

「君と、旅を始めたい」

メロンパンが、私の言葉に応えるように抱きついてきた。しっかりとその身体をもう一度抱きしめる。今度はもう放したりしない。

忘れてしまった言葉なら、もう一度伝えればいい。
開いてしまった距離は、もう一度縮めていけばいい。

伝えるために言葉があつて、近づぐために足はあるのだから。

T o b e c o n t i n u e ?

第二十話 グレン島・後編（後書き）

まあ、仲直りしたという事で。

PMSW 掲示板より抜粋・その二

【介入】原作スレその21【禁止】(874)

246：名無しのトレーナー

ぶつちやけ、原作原作騒いだところで、俺達がいる時点でバタフライ効果で色々変わってるんだから、今更気にする事無くないか？

247：名無しのトレーナー

お前それを言ったら介入禁止令出してる意味ないだろうが

248：名無しのトレーナー

いや、介入禁止令に意味はあると思うぞ。なんせ管理人が出した奴だし、何かしら意味が無いとおかしい。

249：名無しのトレーナー

そもそも律義に守ってる奴なんているのか？ みんな原作メンバーと関わりたくてうずうずしてるんだよ！

250：名無しのトレーナー

そう言って249は部屋から出て行った。

251：名無しのトレーナー

向かう先は当然、原作キャラの居場所であろう。

252：名無しのトレーナー

しかしその後249の姿を見た者はおらず、原作は何事も無かつたかのようにまた廻り出すのだ……

253：名無しのトレーナー

何それ怖い

254：名無しのトレーナー

いせいせいせいせい、ねーから。うん、ねえよ……

255：名無しのトレーナー

と言いつつも、不安の隠しきれない249

256：名無しのトレーナー

それが自分の生死を分かつ判断になる事も知らずに……

257：名無しのトレーナー

お前らどんだけ俺を殺す気なんだ。死なないからね？大丈夫だからね？

258：名無しのトレーナー

あながち嘘とも言い切れないがな。

259：名無しのトレーナー

どついつ意味だ？

260：名無しのトレーナー

つまり介入に行こうとした249が介入反対派によって闇に葬られるという事さ

261：名無しのトレーナー

理解した

262：名無しのトレーナー

理解した

263：名無しのトレーナー

理解した

264：名無しのトレーナー

戦慄した

265：名無しのトレーナー

驚異のシンクロ率

266：名無しのトレーナー

何故そこまで息が合う……

267：名無しのトレーナー

<<260

それもあるけど、それ以外の力もある

268：名無しのトレーナー

それ以外の力……だと……！？

269：名無しのトレーナー

まさか奴が目覚めたというのか！？

270：名無しのトレーナー

そんな馬鹿な！ 奴の封印が解けるなど、あつてはならない！！

271：名無しのトレーナー

時が……動く

272：名無しのトレーナー

なればこそ、我らの真価が問われる時か……

273：名無しのトレーナー

……フン、少し野暮用を思い出した。先に邪魔するぜ

274：名無しのトレーナー

！

お前、まさか……

275：名無しのトレーナー

馬鹿！ 叶う相手じゃない！！

276：名無しのトレーナー

後は、頼んだ

277：名無しのトレーナー

276ー！！！！

278：名無しのトレーナー

くそ！ お前一人行かせる訳にはいかないだろ！！

279：名無しのトレーナー

278……

280：名無しのトレーナー

へっ、お前の為じゃねえ。借りを作るのはまっぴらだからな

281：名無しのトレーナー

良く言っぜ……だが、感謝する

282：名無しのトレーナー

……そろそろ話してもいいか？

283：名無しのトレーナー

馬鹿野郎！ 早く突っ込めよ！！

284：名無しのトレーナー

みんなノっちゃったから、止めるに止められなかったんだよ！！

285：名無しのトレーナー

いや、なんか……すまんかった

286：名無しのトレーナー

今回はかりは許してやる。有り難く思っただな!!

287：名無しのトレーナー

アレ？ これ俺が悪いのか……？

288：名無しのトレーナー

気にしたら負けだ

289：名無しのトレーナー

もう良いよ……俺が良いたかったのは、？運命の修正力？の存在の事だよ

290：名無しのトレーナー

誰かああああああッ！バンソーコー持って来てええええええええ
え!!!

291：名無しのトレーナー

人一人包みこめるくらいでかいやつうううううッ！

292：名無しのトレーナー

お医者さん！ お医者さんはいらっしやいませんか！？

293：名無しのトレーナー

わしがそつじや。病名は？

294：名無しのトレーナー

厨二病です

295：名無しのトレーナー

厨二病です

296：名無しのトレーナー

厨二病です

297：名無しのトレーナー

厨二病です

298：名無しのトレーナー

厨二病です

299：名無しのトレーナー

しかも重症です

300：名無しのトレーナー

末期です（キリッ

301：名無しのトレーナー

お前らなんて嫌いだ

302：名無しのトレーナー

まあ涙を拭けよ

つ「ハンカチ」

303：名無しのトレーナー

それで？運命の修正力とは？

304：名無しのトレーナー

もういいよお前らなんか話してやるものか

305：名無しのトレーナー

落ち着けて、悪かったよ。な？ 機嫌直せ

306：名無しのトレーナー

ほらほら、茶も汲んでやるし
っ
っ

307：名無しのトレーナー

今回だけだからな？（チラッ

308：名無しのトレーナー

デレた W W W W

309：名無しのトレーナー

W W W W W W W

310：名無しのトレーナー

お願いします W W

311：名無しのトレーナー

運命の修正力って言うのは、原作軸に話を戻そうとする力の事だ。この力のせいで、今まで何人もの介入者が原作メンバーに接触する事すら出来ずにいる。そうでないと、こんなに介入しようとする人間や、俺らトリッパー、転生者がいるのに原作にはば変化なしって言うのはおかしいだろ

312：名無しのトレーナー

あー……言われてみれば、そうかもしれん

313：名無しのトレーナー

実際、レッドやグリーン達の第一章とイエローの第二章は、脚本

に全くと言っていいほどに影響を及ぼさなかったしな

314：名無しのトレーナー

俺も小さい頃にマサラタウンにいる事にハッスルしてレッドに接触しようとするたび、何処からともなく現れた野生ポケモンに襲われていた覚えが……

315：名無しのトレーナー

よく生きてたな

316：名無しのトレーナー

修正力容赦ねえ……

317：名無しのトレーナー

待てよ、ならわざわざ介入禁止令なんて出す必要なくないか？

318：名無しのトレーナー

禁止されることほど、やりたくなるもんだ。管理人はそれを見越して、修正力の強さでも計ってたんじゃないか？ もしくは無駄に被害が出るのを避けるためとか

3 1 9 : 名無しのトレーナー

絶対前者だ。あの人はそういう人だ

3 2 0 : 名無しのトレーナー

ああ、間違いないな

3 2 1 : 名無しのトレーナー

俺達は所詮、まな板の上の恋か……

3 2 2 : 名無しのトレーナー

……。

3 2 3 : 名無しのトレーナー

まな板の上の恋
W W W W W W W W W W

3 2 4 : 名無しのトレーナー

調理三秒前

325：名無しのトレーナー

間違えた、まな板の上の鯉な、鯉

326：名無しのトレーナー

鱒子「シヤケ男さん、貴方だけでも逃げて！」

シヤケ男「駄目だ！ 君一人おいて行けるわけないだろうが！！」

327：名無しのトレーナー

むしろ二匹とも逃走不可って言う
www
www
www
www
www
www
www

328：名無しのトレーナー

そして振り下ろされる鈍く光る包丁

329：名無しのトレーナー

夢い恋だった……

330：名無しのトレーナー

管理人と言えば、あの企画まであとどれくらいだ？

331：名無しのトレーナー

どれくらいって言っても、正確な時間軸なんて分からんしなあ

332：名無しのトレーナー

原作進行情報掲示板によれば、ジヨウトのクリスが動き出したらしい

333：名無しのトレーナー

それはもう古い。確か鈴の塔に巨大なクリスタルが現れたって話だから、スイクンの暗躍も始まっている

334：名無しのトレーナー

暗躍とかWW悪役みたいに言うなよWWW

335：名無しのトレーナー

近い事はやってないか？

336：名無しのトレーナー

闇夜に紛れて強襲とか。悪役って言うより暗殺者的だな

337：名無しのトレーナー

スイクンさんはそんなことしない！ ジムリーダーに関しては仕方ないだろ！！

338：名無しのトレーナー

他の二匹はスイクンよりも被害人数が少ないぞ

339：名無しのトレーナー

スイクン「メインは俺ですから^^二匹は画面の隅っこでちよろちよろしてて下さいね」

340：名無しのトレーナー

スイクンエ……

341：名無しのトレーナー

流石スイクン格が違う

342：名無しのトレーナー

初登場シーンもスイクンは単体なのに、エンティとライコウはセ
ットWWWWWW

343：名無しのトレーナー

ライコウ「映画化……か。遠い夢だな」

344：名無しのトレーナー

ライコウに出番を！誰か！！

345：名無しのトレーナー

ライコウさん……；；；

346：名無しのトレーナー

ぞ！！
待て、エンティの初登場シーンは、正確にはバトルの時じゃない

347：名無しのトレーナー

!?

348：名無しのトレーナー

どついう事だ!?

349：名無しのトレーナー

ゴールドとシルバーが怒りの湖に沈んだ時を思い出せ!!何があつた!!!

350：名無しのトレーナー

!

シルバーのデレ!!

351：名無しのトレーナー

デレしかねえ!!

352：名無しのトレーナー

アレは衝撃的だった!!

353：名無しのトレーナー

とっとうデレた!!

354：名無しのトレーナー

いやっほおおおおおおう!!!!!!

355：名無しのトレーナー

ちげーよ！ もっと他にあるだろ！ 沈んだ後引き揚げたのは誰だ!!

356：名無しのトレーナー

俺です

357：名無しのトレーナー

いや俺だ

358：名無しのトレーナー

お前ら何言ってるの？ 俺だし

359：名無しのトレーナー

俺が！俺こそが救世主！！

360：名無しのトレーナー

エンティ」……」

361：名無しのトレーナー

お前らどうしてくれんだ。エンティさんが黙っちゃまったやねーか

362：名無しのトレーナー

無言の圧力を感じます

363：名無しのトレーナー

引き揚げたのはエンティとして、アレを初登場とカウントするなら確かに

364：名無しのトレーナー

しかもその後、シルバーに言い寄られて逃げた先で、まさかのグリーン&シルバータッグに迫られる事に。結局カツラさんの物になる事で落ち着いたが

365：名無しのトレーナー

思わずラーメンひっくりかえしちゃまったじゃねーか

366：名無しのトレーナー

三秒ルールだ。力の限り啜るんだ

367：名無しのトレーナー

出来るか！

368：名無しのトレーナー

<<364

言い方が誤解を招いたようだな

369：名無しのトレーナー

間違った事は何一つ言っていないぞ。

370：名無しのトレーナー

エンティもスイクンほどじゃないにせよ、地味に登場が多かった
しな

371：名無しのトレーナー

カツラさんの身体を治すという使命もあったし

372：名無しのトレーナー

あれ？ ライコウは……？

373：名無しのトレーナー

ライコウにもちゃんと、リニアの逆走とかポケモン転送の電力と
かあっただろ

374：名無しのトレーナー

他の二匹に比べたら……地味じゃね？

375：名無しのトレーナー

必要なのは電気だけです。電気を貰ったら本体は用済みさあッ!!

376：名無しのトレーナー

ゲットされるシーンもカットされたしな

377：名無しのトレーナー

本体登場シーンって、いくつあったっけ……

378：名無しのトレーナー

ライコウ「……所詮は引き立て役」

379：名無しのトレーナー

落ち着けライコウ!!

380：名無しのトレーナー

もう止めて! ライコウのHPはもうゼロよ!…

381：名無しのトレーナー

T
O

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
.....
?

PMSW 掲示板より抜粋・そのに（後書き）

この掲示板の人間は脱線しすぎだと思う。そして以上にノリが良い。ポケしかいねえ……………

補足ですが、スイクン・エンティ・ライコウは伝説のポケモンの事です。彼らはジョウト地方で起こる事件に立ち向かうために、各地のトレーナーの腕試しをして回っています。

第二十一話 空中戦・前編

「これを」

カツラさんはそう言って、私にグレンバッジを渡した。私は慌ててカツラさんにバッジをつき返す。

「貰えません！ 私、ジム戦してませんよ！！」

「いや、これは君の物だ」

カツラさんは微笑んで私の手を押し返す。困ったようにカツラさんのサングラスの奥の瞳を見つめると、カツラさんは私の手にそっともう一つの手を重ねて問いかける。

「君にとって、ポケモンとは何だね？」

「私にとって……」

最初は、家族のような、友達のようなものだと感じていた。特にメロンパンに対しては、保護者のような気持ちが強かった。けれど

「ポケモン、は」

視線を下げると、足元で私を見上げているメロンパンと目があつた。メロンパンはここに来て初めて、私の下から自分の意思で去ろうとした。それは、メロンパンの中で何かが変わろうとしているという事だ。自分の力で立ち上がるうとしているという事だ。そんな

相手に対していつまでも保護者気分でいたのならば、かえってその成長を邪魔する事になりかねない。

「……どうなのかね？」

視線を上げると、カツラさんと今度は目があった。どうなのだろう、私にとってポケモンとは何なのだろう。足元にいるメロンパンとは別に、私は腰元のモンスターボールに触る。メロンパンだけではない、その三匹との関係も訊かれているに等しいこの質問。

「……同じ質問を、昔オーキド博士に訊かれた事があります」

「ほう、その時はなんと？」

『君達にとってポケモンとは何かね？』

「守るべき相手、と」

メロンパンを守らなければ、という思いが強く、その時は何よりも先にそう思っていた。

「けど、今は少し違うと思います」

カツラさんが興味深そうに私の目を見つめる。探るような目を真っ直ぐに見返した。

キリはあの時、即答した。

『ポケモンとは、僕の手足であり、部下です』

カスムはしばらく考えた後、含みのある口調で答えた。

『…………… 同胞、みたいなもんですわ』

あの時と、二人の答えが今も変わらないかは分からない。が、少なくとも私は変わった。

「ポケモンとは、私にとってライバルです」

「ライバル、かね？」

「ポケモンとトレーナーは、共にあり、共に戦います。けれど、トレーナーが未熟であれば、ポケモンの力を活かさず、ポケモンが力不足であれば、いくらトレーナーが凄くても押し負けます。お互いにお互いを高めあい、努力を怠ることなく信頼し合い、そして時には厳しい言動で相手を奮い立たせる。そんな存在でありたいと私は思いました」

ナツクツキーやコーヒープリンの試すようなあのバトル。彼等はきつと計っていたのだろう。私が彼等の主である事に相応しいかどうかを。

そして、メロンパンは今まさに一步を踏み出そうとしている。マサラタウンにずっといたのであれば、決して踏み出されることなかった一歩。守られるだけでは変わらないものもあると私に教えてくれた。

「今まで様々なトレーナーを見てきたが……………君の答えはいささか新鮮だった」

カツラさんの重ねていた手が離れ、その手は私の頭を撫でた。

「私のジムのトレーナーを全て倒し、君は更にポケモンとの絆を私の目の前で示した。やはりこのバッジは、君に相応しいようだね」

「でも……」

「……うぐッ」

私が更に言い募ろうとすると、カツラさんは突然右腕を押さえて苦しみ出した。

「カツラさん!?!」

私もしゃがんでカツラさんの顔を覗き込むと、カツラさんは顔に脂汗を滲ませて私に笑ってみせた。

「すまない。正直なところ、私はある事情によってまともにバトルが出来るような状態じゃないんだ。ジム戦は出来ないが、それでも君にそのバッジを受け取って欲しい」

「カツラさん……」

カツラさんは大きく息をつくと立ち上がり、私の両肩を掴んだ。

「……ここだけの話だが、ジョウトで何かが起ころうとしている。

だが、私はここカントーにも嫌な予感を感じているのだよ」

「予感……」

カツラさんは頷くと、真剣な顔で私の両肩を掴む手に力を込めた。

「今は一人でも優秀なトレーナーが必要な時だ。セキエイリーグのエキシビジョンマッチは知っているかね?」

「はい、それは知ってますけど……」

既にセキエイリーグまで一ヶ月を切っている。大々的に告知もされてきたのだが、セキエイリーグの会場はジョウト。しかもそれにはカントーVSジョウトのジムリーダー同士のバトルがエキシビションマッチとして行われる予定だ。

「ジムリーダー達がカントーを完全に留守にする瞬間だ。何しろ予感に過ぎないからね、何も無いといいのだが……嫌な感じがするのだよ」

そう語るカツラさんに、私は受け取ったバッジを強く握りしめた。

と、そんな事があったが、現在は空の上である。

「風よ！　今こそ風になる！！　真なる風の王よ！！」

耳元で轟々とした風切り音が駆け抜け、ソルトアイスの広い背中の下にはミニチュアのような街並みが流れていく。落とされないようにソルトアイスの身体にしっかりと抱きついた。

カツラさんのお使いで、シオントウンまで行くのだ。カツラさんはそろそろジョウトに向かわなくてはいけないらしく、代わりにシオントウンのポケモンタワーにポケモンの遺体を届けて欲しいと頼まれた。カイリユーならひとつ飛びだし、シオントウンのポケモンタワーに興味のあった私は、二つ返事で引き受けたのだ。

「私は風と一体になる!!」

旅立ち前にメロンパンを抱えてみたアニメの台詞を叫びながら、私は空の旅を満喫する。一度やってみたかったんだコレ。大好きなアニメの主人公も同じようにカイリユーに乗って叫んでいた。そっちは手を放していたが、それは怖いのでやりません。

いや本当にいいアニメだった。特に相棒の蟹が自ら封印の呪縛を戻し、主人公の少年を庇ったシーンなんて涙が止まらなかった。空腹に耐えきれず、相棒の蟹を何度も鍋にしかけようとしては踏みとどまる、少年の苦悩も見ごたえがあつたなあ……。

「バウ！」

「……ソルテイ？」

思い出し泣きしていると、ソルトアイスが鋭く吼えた。何事かと前方に目を凝らすと、何かがこちらに向かって来ているのが見えた。あれは多分大型の飛行タイプのポケモン。こちらとは真逆の方向に飛んでいるため、ぐんぐん距離が近くなってくる。

「んんー？」

どんどん大きくなっていく姿は、どうやらプテラのようだった。

プテラは基本的に秘密の琥珀からしか復活できない古代のポケモンだけに、連れている人はとても珍しい。私が知っている限りで、プテラを連れていたのは確かレッドさんだけ……

「……いや、もう一人いる」

高速で近づくプテラ。私の全身の神経がその背中に集中する。

誰だろうか、その背中に乗っているのは。誰を私は期待している

のだろう。
すれ違った一瞬に、瞳が捕えたのは

黒い、マント。

「
ッソルティ！」

「バウッ！！！」

私はソルティをリターンさせて、プテラを、正確にはその背中に乗っている男を、追った。すぐに小さくなっていた姿は大きくなり、私はプテラに並走する。男は並走する私に気がついたようで、訝しげに眉を寄せた。

「……何の用だ」

風の音ではつきりとはしないが、その声に私は確信を持った。間違いない、マサラタウンで会ったあの男だ！

「マサラタウンで会ったでしょう！」

唸る風のかき消されないように叫ぶと男は心底不思議そうな顔をした。覚えが無いと語るその顔に、私はふつつと怒りが込み上げてくる。

「……マサラタウンに行った覚えはあるが、貴様の顔など記憶にない」

「き……ッ記憶にない、だって……!?」

男の音量はそれほど大きいものじゃないが、今の私の耳は一言たりとて逃す事はない。私は、一日たりともこの男のやったことを忘れる事はなかった。いずれ相まみえた時、必ず勝つと自分に誓い、メロンパンと一緒に沢山のジム戦を勝ち抜いて来た。だが、男は私の事など欠片も覚えていなかったらしい。

心の奥底から湧きあがってくる怒りの炎に、私はなおもソルティで並走しながら叫んだ。

「ぶざけるな！ 今ここで、私とバトルしろ!!」
「……………」

男は面倒そうにため息をつく、邪魔だといわんばかりにしつしと手を振った。

「俺は忙しい。貴様程度の凡人トレーナーの相手などという、時間のこれ以上ない浪費を行うつもりはない。そこらのトレーナーとせいぜい低レベルなバトルでもしているんだな、小娘」

その言葉と共に私を置いていこうと、高度を上げるプテラ。私は自分のリュックを背中から下ろすと、中からバツジケースを取り出す。

「ソルティ!!」
「バウ……ッ!!」

ソルトアイスの名前を鋭く呼ぶと、分かっているとすぐに高度を上げる。上空のプテラを見上げると、陽光に目が眩んだ。速度を上げるプテラの横に再び並ぶと、私はバツジケースを男に向けて開け

て見せる。

「誰が凡人だって!? 私はもう、バッジを6つ手に入れたんだ！あの時と同じだと思わないで!!」

「……何？」

今まで全くもって私に興味を髪の毛一筋も向けなかった男の目に、僅かばかりの変化が訪れた。思案顔で顎を撫でると、おもむろに視線を寄越した。

「いいだろう。小娘、相手をしてやる」

その言葉と同時に、プテラはさっきよりも更に高く、天空へと舞い上がった。

「ま……っうわ!？」

プテラを見失うまいとするが、太陽をほぼ直視してしまい反射的に目を閉じる。その瞬間に男の声が降ってきた。

「破壊光線!」

「!」

頭を振って目を開けると、目の前に破壊の一閃が迫った。「避けて」と叫びかけて、私はハツとして地上を一瞬だけ見る。雲の切れ間から覗く街並み。眼下に広がる景色に高速で思考を巡らせると、私は指示を変更した。

「迎え撃つて!!」

ソルトアイスは即座に反応するが、距離が近過ぎる。二つの破壊光線が至近距離で衝突し、その余波に私はソルトアイスの背中から投げ出された。

「うわあああああああッ!!」

爆発の余波を受けたのは私だけじゃない。ふらつくソルトアイスが視界から遠のいていき、耳元で落下を告げる風音が唸った。

「スピッツ!!」

落下する私の腰のモンスターボールから飛び出したコーヒープリンが、素早く私の身体をキャッチする。ホツとしているのもつかの間、目の前に現れたプテラに私は目を見開く。

「どくば」

「超音波!!」

私が指示を出すよりも早く、男のプテラから耳障りな音が繰り出される。脳を取り出されてシャッフルされているような感覚に、ぐらぐらと世界が揺れる。影響を受けたのは私だけでは無い。避ける間もない攻撃に、コーヒープリンも混乱して私を取り落とした。

「あああああああッ!!ぎゃッ!!」

「バウ!!」

再び落下する私の身体を受け止めたのは、余波のダメージから立ち直ったソルトアイスだ。だがくわんくわんする頭に、喉元に熱いものが込み上げてくる。気分は最悪だった。

それでも口元を抑えて、コーヒープリンと男の姿を探す。ソルト

アイスに雲では無い影が差した時、視界の端に炎に巻かれて落下するコーヒープリンの姿を捕えた。

「リンー！」

慌ててソルトアイスをコーヒープリンの下に飛ばし、その身体をキャッチする。燻ぶる身体からは煙が立ち上り、大きな紅い瞳が苦しそうに揺らいでいた。コーヒープリンをすぐにモンスターボールに戻し、私はプテラの背中を追う。

「……この程度だとは。やはり凡人か」

男は興味の失せた瞳で私をプテラの上から見下ろし、つまらなさそうに呟いた。その反応に私は奥歯を噛み締める。

「まだ……まだ勝負はついてない！」

「……しつこいな」

男はうつとおしそうに眉を潜め、モンスターボールをソルトアイスの背中に向けて放る。新たな飛行タイプかと構えたが、予想に反して目の前に現れたのは飛行タイプのポケモンじゃなかった。

青い身体。

つるりとした頭。

硬い甲羅。

「ゼニツ！」

「ゼ、ゼニガメ！？」

困惑する私を他所に、カイリユウの背中に降り立ったゼニガメに

男が叫んだ。

「ゼニガメ！ その小娘を倒したら、実験から解放して野生に戻してやる」

「ゼニツ！？」

男の言葉に目を見開いて、ゼニガメは思い詰めた表情で私に相対した。今までどんなポケモンからも感じた事のない、恐ろしいまでの気迫に私は戸惑った。何がこのゼニガメをそれほどまでに追い詰める。男は“実験”といった。その意味は文字通りなのだとしたら

「ゼニガメッ！」

「うわぁッ！！」

ゼニガメは私をソルトアイスの背中から落とそうと、弾丸のような水鉄砲を次々と発射する。鬼気迫る顔のゼニガメに、私は碌に反撃も出来ず必死で避ける。

どうすればいい。ゼニガメをソルトアイスの背中から落とす訳にはいかない。この高度なら、確実に死んでしまう。ならば捕獲するか？ 野生のポケモンではないので不可能だ。

倒すか和解するしか、この局面を切りぬける方法はない。けど倒すと言ってもソルトアイスの背中にいるのだから制限がつく。まずコーヒープリンは既に瀕死。次にソルトアイスだが、身体を揺らしたり尻尾で攻撃する時に、乗り慣れてない私は落ちてしまう危険性が高いし、第一そんなことしたらゼニガメが落ちてしまう事は必至。ナツクッキーは身体の大きさに無理だ。唯一可能性があるのはメロンパンだが、前の家出事件の精神的ショックから完全に立ち直ったかどうか。それに同族と戦わせるのは気がひける。

「ゼニツ！」
「くっ！」

ゼニガメの水鉄砲によつて、服からぼたぼたと水が滴り落ちる。なかなか当たらない攻撃にゼニガメは焦っているようだが、私も受ける訳にはいかない。

倒すのが無理だとするなら、和解か？　だがポケモンの言葉が分らない私に、ゼニガメの事情は分からない。知っているのは他にあの男だが

「あなたはっ……ゼニガメに何をした！！」

上空から私達の戦いを静観していた男は私の質問に、鼻で笑つて応えた。

「貴様に語つてやる必要が、何処にある？」

「このまま戦えば、ゼニガメは落ちてしまふよ！」

警告のつもりで言い放つた言葉に、男は口元を歪めてせせら笑つた。

「それに、何の問題がある？」

その言葉の意味に私はぞっとした。あの目は、ポケモンの命を何とも思っていない目だ。

「くそっ！！」

舌打ちをしてゼニガメに視線を戻す。予想は出来ていたが、男に語る気はないらしい。ならばどうする。どうしたらいい。和解は出

来そうになく、ソルトアイスの背中という狭いフィールドの上に出せるポケモンもない。どうしたら

「……いや」

出せるポケモンが、いない？

「　　そうか！」

私はその事に気がつくと、ゼニガメの攻撃を避けながらソルトアイスの手にリュックサックを預けた。水を含んで重くなった上着を脱いで片手に持ち、睨んでくるゼニガメに叫ぶ。

「バトルだよ！　私が相手だ！！」

「ゼニツ！？」

これしか方法はない。私が、ゼニガメを倒す。

T o b e c o n t i n u e ……？

第二十一話 空中戦・前編（後書き）

物語の中核が動き出しました。はたしてユズルはセキエイリーグに間に合うのでしょうか？ 間に合ってもセキエイリーグは中止になるので意味ないですが。

そして男の再来でござる。第一話で出て以来、全く音沙汰もなかっただけに、忘れてる人が大半と予想される。それにしても鬼畜なバトルに毒舌と容赦がない。もちろん下に街があったことも、ユズルがゼニガメをたたき落とすことができないであろうことも予測済みです。

後、本文に出てた。謎のアニメの補足。本編には全く関係が無い、完全にネタな話なのでスルーして頂いても結構です。

アニメ「crab&starfish」

日本語訳は蟹とヒトデ。ある少年が磯釣りをしていると、何とヒトデの張りついた蟹が釣れる。その蟹を今夜の夕飯にしようと思っただ少年は、食べられないヒトデを取って蟹を持ち帰ろうとしたが、まさかの蟹の反撃。赤い鋏を構えて蟹は言う。「この俺を炙ろうとはいい根性だ……」蟹が喋った事にビビった少年は近距離戦ではなく遠距離戦でかたをつけようと考え、そこらにあった石ころを投げまくって反撃。その内の一つが蟹に張りついていていたヒトデに当たり、ヒトデから垂れた体液が地面に落ちた時、魔法陣が現れる。その光に巻き込まれてしまった少年であったが、行きついた先の世界では蟹が「邪悪なる紅き魔」とされ、忌み嫌われどころか所持だけで虐殺対象の世界だった。蟹と一緒にいるところを目撃されてしまった

少年はそのままお尋ね者に。途方に暮れている少年に蟹は問いかける。「生きて元の世界へと帰りたいか？」蟹は元人間らしく、五つの封印によってこのような姿になっているのだと、その封印が解かれれば元の世界に帰す事も出来るかもしれないと提案。一も二も無く飛びついた少年に、蟹は契約の印として水の精霊の化身であるヒトデを少年の髪に張りつける。「おれは必ず、元の世界に帰るんだ！」

途中で空腹に耐えきれなくなった少年が蟹を10回以上鍋にしかけたり、蟹が嫌がらせに少年の頭を丸刈りにしたり、蟹を囷に窮地を脱出したり、蟹が少年のズボンの紐をカットして街中で恥をかかせたり、街中でいきなり襲いかかられたり、逃走に次ぐ逃走で精神をがりがりと削られたり、封印を解く精霊に「ヤダぶー」といわれて蟹と一緒に半殺しにしたり、「大丈夫大丈夫！ そんなに有るんだから1本くらい大丈夫！」といって少年が鍋を片手に蟹ににじり寄ったり、蟹の封印が解けたと思ったら、パーツごとのせいで人間の足の生えた蟹になって少年が悲鳴を上げたりといった微笑ましい触れ合いを繰り返しながらいつしかお互いにお互いを認め合う存在になっていく少年と元人間の蟹の触れ合いを描く、ハートフル・ファンタジー。全40話でお子様に大人気のアニメ。映画化もしたよ！

第二十二話 空中戦・後編

耳元で、風を切る音が聞こえる。眼下に広がる街並みに、脚ががくがくと震えた。

正直言つて、めちゃくちゃ怖い。だが、これは今この状況下では私にしかできないことだ。唇を強く噛み締め、曲がりかける足を無理矢理に立たせる。

「ソルティ。私の事は良いから、あの男を逃がさないでね」

「……バヴツ！」

少しだけ間をおいて、それでもソルトアイスは返事をした。ソルトアイスは私の指示に従つて、その場から飛び去ろうとするマントの男を全力で追いかける。ソルトアイスのそれは僅かなためらいを感じる返事だった。それを感じ取った私は、焼けつくような焦りの感情を高める。

私の方が危険だと判断すれば、ソルティはきつと私の指示に背いても追跡を止めるだろう。その確信が、今の沈黙からは感じられる。ソルトアイスは私の事が心配で止めるのだろうけど、それは駄目だ。

私はあの男を決して許さない。一度ならず二度までも、仲間を傷付け、トレーナーとしても誇りを踏みにじるに等しい言葉を放ったあの男を、許してはいけない。

早く、早く決着をつけねばならない。私に取れる選択肢は限りなく少ない。ソルトアイスが追っている男を一瞬だけ肩越しに振り返った。余裕の表情で、ニヤニヤしながらこちらを見ていた。私はき

つとあの男の掌の上で踊っているのだろう。

それでも、そうだとしたもだ。私は私自身の為にも、このゼニガメのためにも、最良だと思える選択肢を選ばなくてはいけないのだ。

例え用意された選択肢全てが、最悪のシナリオへと続いていたらしても。

視線をゼニガメへと集中する。目の前にいるゼニガメは、ギラギラとした目で私を睨んでいる。ソルトアイスの背中に散らされた水が、太陽の光を浴びてキラキラと輝いていた。私達の間を吹き抜ける風は冷たく、全身を差すような寒さだ。

「ゼニ……！」

ゼニガメは水鉄砲を打つそぶりを一切見せず、ただただ私を見つめる。水鉄砲はもう打って来ないのだろうか。いや、もう打てないだろう。あれだけ打ったのだから、水鉄砲に使える体内の水が切れてしまったのだと思う。ゼニガメと私は、真正面から睨みあう。水鉄砲が使えなく、今のこの状況下で使ってくる可能性が最も高い技はただ一つ。

轟々と燃えるゼニガメの瞳の炎。負けじと睨み返す私。意を決したかのように、ゼニガメが雄叫びを上げて動いた。

「ゼニイイイイイイイイイイイイイイッ……！」

ゼニガメの足が、濡れたソルトアイスの背中を駆けだす。水に慣れたゼニガメの足は滑りにくい。私達の距離はすぐさま縮まってきた。渾身と力の籠った体当たりが私の腹にヒットした。

「ぐっ……う……ッ！」

全身全霊を持って私は受け止めた。これを無事に受け止め切れれば私の勝ち。もしも足を滑らせたり、押し負ければ、そのときは

「プテラ。急反転して鋼の翼」

私の耳に、最悪のタイミングで男の声が聞こえた。

焦るソルトアイスの鳴き声に、傾く足場。空中に放り出された体は、一瞬の浮遊感と共に落下を開始した。

「うわあああああああああッ!?!」

「ゼッ!?!」

プテラの攻撃は紙一重で避けきったソルトアイスであったが急激な体勢変化についていけず、私とゼニガメは放り出されてしまった。重なる悲鳴に、上下逆転する世界。ソルトアイスは即座に私を助けようとするが、男は哄笑を上げながらソルトアイスの行く手を阻んだ。

「グルルルッ!」

殺気に満ちたソルトアイスの威嚇にもひるまない、男の楽しそうな声が風に混じって聞こえてくる。

「ハッハハハハハ! 絶体絶命だなあカイリユー。早くしないと潰れトマトは確実だぞ?」

その言葉に、脳裏に浮かんだ数分後の自分の姿。頭から地上に激

突し、惨めに死んだ私の姿が

恐ろしすぎる想像に頭を振り、ぎゅっとゼニガメを抱きしめる。確かな感触に、舌をもつれさせそうになりながら囁いた。

「大丈夫だよ。大丈夫。絶対大丈夫だから」

その根拠のない言葉は、私自身に言い聞かせるに近い言葉だった。絶対大丈夫？など、どの口がほざくのだろう。飛べるポケモンである二匹は、それぞれ瀕死に交戦中で状況は絶望的だ。ぐんぐんと速さを増す私達と頭上ではこれ以上なく楽しそうな男の声と、焦りと怒りの入り混じったソルトアイスの鳴き声。

ズキン、と頭の何処かが疼いた。

「ア、アア」

ズキン、ズキン

「あ、ア、ア……ッ！」

痛い、痛い、頭が割れそうになる。

「ああ、あ、ア、ア、ア」

響く響く、男女の声にソルトアイスの鳴き声。聞き覚えのあるよ
うないようなその声が、ノイズのように切れ切れに聞こえる。

「アッハハハハハハハアッ！」

「バヴ 退け ヲ そこを ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ さもなくヲ

ヲ 消 ヲ」

ガツンガツンと、誰かが無理矢理に脳内に割り込んでくる感覚。脳内を土足で踏み荒らされるような不快感に喉元に熱いものが込み上げてくる。

「ア、ああア、アアア、ああア、アア、ッ！！」

体中を引き裂いてしまうかと思われるほどの、絶叫が喉を引き裂いた。自分の声とは思えない苦鳴に満ち満ちた叫び。ちかちかと目の前に明滅する光が収束し、視界を真っ白に染め上げた。何も見えない、何も感じない。その中で一瞬だけ、誰かの姿が映し出された。

深い青と水色の、二色の長い長いローブ。顔を隠すフードを落とし振り返った少年は、長い前髪の合間から私を見つめていた。

『僕が必ず、君を助けるよ』

「あ……ッ！」

少年の声がすると同時に、パチンと光が弾け飛んだ。腰元のモンスターボールから一条の光が走る。その赤い光は空中でみるみる姿を変えると、ゼニガメを抱えた私をがっしりと抱きしめた。その姿は私の見覚えのある姿とは違って、私は驚きのあまり声も出なかった。

「カメエエエエエエエエエエックス！！！」

大きな巨体のカメックスが、私達を抱きかかえていた。

「メロン……パン……？」

「カメツ！」

メロンパン？ なカメックスは、ジャキンと砲台を構えると、勢いよく水流を発射した。凄まじいまでの密度で地上に向けて放たれる水流は、その反動で私達を反対方向へと猛スピードで向かわせる。その向かう先は、交戦中の空中。

巨体が狙い違わず、プテラの腹に激突した。

「プデガツ！？」

苦鳴を上げてよるめくプテラに、キラリとソルトアイスの目が光る。隙を逃さず、ソルトアイスが私達を空中から掻っ攫った。

「ソルテイ！」

「バ……ヴヴヴヴ！？」

喜びの声を上げる私に応えようとするが、ソルトアイスの高度は急激に下がった。今のメロンパンの重さは流石のソルトアイスでも無理があつたようだ。メロンパンが即座に私に視線を向けたので、私はすぐにメロンパンをモンスターボールに収めた。

「いまのは……少し驚いた」

男の声に、私はソルトアイスに掴まれた状態で睨む。体勢を立て直し終えたプテラの上では、男がバックを片手に静か私を見据えていた。その手に持たれたバックは、明らかに私の物だ。

「わ、私のバックが！」
「……………」

男は私のバックから取り出したらしいバツジケースを、無言で左手に持って見せた。そのままバックを私の方へ投げる。慌ててソルトアイスを向かわせて空中でバックをキャッチしたが、大切なバツジケースは未だ男の手の内だ。

「返してよ！」

バックとゼニガメを抱きしめたまま怒鳴ると、男はニヤリと笑った。その後に、訳のわからない言葉を吐く。

「俺が憎いか？」

「当たり前じゃないか！」

男は笑みを深くした。そして、あるうことがバツジケースを空中へと投げ出した。

「なッ！」

私はソルトアイスと一緒にバツジケースへと向かおうとする。だがその前に、男の笑みが顔一杯に広がったのが見えた。その口からプテラに向けて、私達が止めるよりも早く、命令が放たれる。

「プテラ、噛み砕け」

全てがスローモーションのように感じた。空中に放り出されたバツジケースに向かって、大口を開けるプテラ。必死に速度を上げる

憎しみと、怒りと、悲しみと、悔しさと、様々な感情がごちゃまぜに押し寄せてくる。その感情のまま、私は咆哮した。目からは次々と涙が勝手に零れて、嗚咽と罵倒が口から飛び出す。心に汚泥のようなどす黒い感情が渦巻き、私は生まれて初めて誰かを絞め殺してやりたいと思った。

「ああ、その目だ。憎いか、俺が憎いか小娘！ 憎いなら追ってみせろ、俺を倒してみせろ！ 貴様には永遠に不可能だろうがなあ！」

私はソルトアイスに指示を出した。ひたすらに、めちやくちやくに、ただ攻撃の指示を喚く。

ソルトアイスは私の指示に無反応だった。

男がプテラに乗って飛び去っていく。私も後を追うようにソルトアイスに悲鳴のように繰り返し叫ぶ。

ソルトアイスは私の指示に無反応だった。

私は泣き、喚き、ソルトアイスに何度も指示を繰り返した。

ソルトアイスは、私の指示に無反応だった。

男の後ろ姿が小さくなり、その姿が消えるまで、ずっと無反応だった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.....?
?

第二十二話 空中戦・後編（後書き）

今回は重め、ですね。本当はもう少し明るい予定だったんですが。個人スタンスとしては、「ストーリーと設定は重く、キャラはギャグに明るく」が主義なので、気が付いたらプロットがえぐいことになってることが多いです。えぐい話大好きでごめんなさい。ゆっくりしていいってね！

第二十三話 シオントウン・前編

憎い。

あの男が、憎い。自分が憎い。

あの男以上に、弱い、実力の無い自分が、殺したい程に憎い。悔しくて、悲しくて、力の無い自分が情けなくて、なんとも仕様がな
い黒い感情が、胸の内に渦巻く。

強くなりたいのね。

響いた涼やかな声は、すんなりと耳に馴染んだ。誰、と問う必要
など無い。私はこの声を知っている。

これまで、私は薄々その存在に気づき始めていた。それでも自覚
はしなかったのは、心のどこかで、この声に耳を貸してはいけな
いと、蓋をする思いがあったから。どうしてだか分からないけれど、
本能の部分が、この存在を受け入れる事を拒否していた。

けれど今は、何故かこの存在を撥ねつける気にはなれない。声は
そよぐ風のように優しく、続く言葉を紡いでいった。

理想を語るには、力が必要だわ。

私はずっと、ただ一つの事を信じて走って来た。大切な宝物のよ
うに、大事に大事に、それを胸にポケモントレーナーとして生きて
きた。

『勝ち負けなんて関係ない。ただポケモンを信じていればいいんだ』

メロンパンがひきこもりというハンデを背負っている以上、勝利

という言葉は私達にとって最も縁遠い言葉だった。今は少し違っけれど、昔はずっとそうだった。だから私は、“勝ち負けなんて関係ない”という言葉を投げ所にしてきた。

けどそれは間違いだった。これ以上ないほどに、愚かしく、弱い考え方だった。ただ端に、私は“実力では勝てない”という現実から目を逸らして、逃げていただけだったんだ。

飢えるでしょう？ 勝利に飢えて仕方ないでしょう？

そうだよ。私は知らなかったんだ。

敗北が、こんなにも苦々しいなんて。

誇りを踏み躪られることに、こんなにも怒りを覚えるなんて。

バトルに慣れ合いは必要ない。

あの男と慣れ合うだなんて、へどが出る。

死んだってごめんだ。慣れ合いなんて言葉自体、爆発してしまえば良い。

甘やかな感情、温い繋がり、躊躇いを捨てなさい。

頷きかけて、止まる。聞こえてくる言葉に対して、私は受け入れる事を初めて迷った。

それは、捨ててしまって良い物なのかな。

それとも持っていないなくちゃいけないものなのかな。

どっちだろう。分からないよ。

迷いは一瞬。心が揺らいたが、私はやはり受け入れた。

貴女が言うのなら、本当に必要な物なのでしょう。
全部斬って、全部捨てて、その後私は何を手にするのかな。
何が残るのかな。

そんなの、決まってるわ。

声が、一段と大きく聞こえるようになった。余計な物や、邪魔する物が消えたから。これからもっと捨てていけば、もっと聞こえやすくなることだろう。私は嬉しそうに声に同意する。

そうだね。聞くまでもない事だったよ。

答えは最初から最後まで、一つしかないものね。

何よりも美しく、何よりも甘美で、何よりも素晴らしい物。

『勝利』

全部捨てて、強さだけを求めたら、あの男にもきつと勝てる。
(たった一つ残るのが孤独な頂点だとしても、勝利の光が目を見え
んだ)

「此処がシオンタウンなんだね。あのでっかい建物が、ポケモンタワーかあ」

私はソルトアイスの背中から、シオンタウンを見下ろした。全体

的にあまり明るい雰囲気はない。それどころかどんよりしている街だ。しかしそれも仕方のない事なのだろう。なんせ此処にはポケモンタワーがあるのだから。

慎ましい少数の家が立ち並び、街の端に大きな塔がそびえ立つ。あの塔が、通称“ポケモンタワー”。亡くなったポケモン達のお墓があり、その魂を慰めるための塔だ。

私はリュックサックを覗き、きちんと遺体が収まった箱がある事を確認する。遺体といっても数本の骨だけなので、荷物はとても軽い。あの男との戦いでぐちゃぐちゃになったり、中身が散らばったりしてないか心配だったが、箱は無事だ。一安心したところでソルトアイスにシオンタウン入り口に着陸を指示すると、ソルトアイスの心配そうな目とかち合った。

「……大丈夫だよ。もう完全に落ち着いたから」

苦笑しながら微笑むと、ソルトアイスは「バヴ」と短く鳴き、ゆつくりと降下を開始する。シオンタウンの入り口付近、人の少ない場所だ。軽い砂煙を巻き上げながらふわりと着地したソルトアイスから飛び降りて、さっさとボールに戻す。入り口にある看板には、毎度おなじみの町紹介文が書かれていた。

『ここはシオンタウン 紫苑は紫 尊い色』

「ふうん。紫苑って紫色のことなんだ……」

どうでもいいことだが、少しだけ賢くなったような気がする。私は早くチェックインと回復を済ませてしまおうと、宿とポケモンセンターを探しに歩き出した。シオンタウンはポケモンの供養に来る人が多いので、陰気な雰囲気に反して宿自体は多い。すぐに泊る場所は見つかった。

チエツクインを済ませて、次はポケモンセンターに向かう。モンスターボールを預けると、ジョーイさんは笑顔で全回復してくれた。瀕死のコーヒープリンに、進化したメロンパン、長距離飛行+戦闘だったソルトアイス。最後に、あの男のゼニガメ。

回復を終えた後に考えなくてはいけないのは、あのゼニガメのこれからについてのことだった。

「ゼニガメ」

ポケモンセンターの裏手に出ると、モンスターボールからゼニガメを出す。大分弱っていたので、一時的な保護としてモンスターボールに収めて置いていたのだ。すっかり元気になったゼニガメは、不安そうな目で私を見ていた。私は上から見下ろして、淡々と告げる。

「私は、君を使う気はないよ」

「……！」

私が言葉を伝えたたん、ゼニガメの目には一気に涙が込み上げてきた。ゼニガメは目にいっぱい涙を溜めて、縋るように私の足に抱きついてくる。その姿は憐れみを誘うものではあったが、私の結論が覆る事はない。だから私は態度を変えることなく話し続けた。

「君は弱い。それに私は既にカメックスを持っている。だから

イタッ！」

足に走った痛みに驚いてゼニガメを見詰める。ゼニガメが、ボロボロと泣きながら私の足にしがみついていた。爪が食い込むほどに強く掴んで放さず、捨てられまいと縋りつく。

ギシ。

その姿を見て、私の頭が痛み、心の何処かがが軋んだ。

私は、躊躇っているのだろうか。このゼニガメを野生に帰す事が、嫌なのだろうか。

しかし、何を躊躇う必要がある。たかだかポケモン一匹、野生に戻すだけだというのに。

ギシリ。

心の何処かが、悲鳴のように強く軋む。

それにあわせて、少女のような声が私の耳に聞こえてきた。あの女性の声ではない、他の誰かの……いや、これは、ずっと付き合ってきた、自分の声だ。

『“実験”に使われたゼニガメは、本当に野生に帰って生きていくの？』

私は、私が一番訊いてほしくなかった質問を、容赦無く問いかけた。私は内心の動揺と頭の痛みに耐えながら、誰もいない虚空に向かって返答した。

「問題ないよ。大丈夫、きっと生きていけるさ」

今度は少しだけ強めの口調で、私は言った。

『卵から孵されたのだとしたら、野生の生き方なんて分からないよ』

「その時はその時だよ。世の中弱肉強食なんだ」

『……見捨てるの』

その言葉を聞いた時、心臓が止まるかと思った。私は見えない私に必死に弁解した。

「見捨てるわけじゃない。他にも実験されたポケモンがいるかもしれない。いちいち助けてられないよ」

『見捨てるんだね』

私は糾弾を止めない。更に強い口調で責め立てた。

「違う、違うよ。見捨てたくななんてないんだよ」

『嘘つき。見捨てるんだ！』

「違うったら！」

私は泣きそうだった。顔を歪ませて、自分を守るように耳を両手で塞ぐ。

『勝手に助けて、勝手に放り出して、死んでいく事から、貴方は目を背けるんだね』

声はそれでも聞こえてくる。その声がだんだん大きく、強く聞こえてきて、私は私が責めているのか、私が言い訳しているのか分からなくなっただけ叫んだ。

「そんなことしない！ゼニガメは、私が助け

」

甘やかな感情、温い繋がり、躊躇いを捨てなさい。

「……は……っはは」

“私”の音が、かき消された。脳髄に響く言葉が、私を落ち着かせる。

痛みが、軋みがすうっと引いていくのが分かった。いつの間にかついていた膝に力が戻る。立ちあがって砂を払うと、しがみつくゼニガメを思いつきり引きはがした。

「ゼ……ッ！」

迷いはない。私はもう、大丈夫。

「うん……分かってるよ……」

私には、強い心と、仲間と、勝利だけが必要だ。私はゼニガメを放りだすと、冷徹に言い捨てた。

「君は必要ない」

これが今の私の信条だ。

「弱いポケモンに、意味なんてないよ」

「……！」

そう言った瞬間、腰のモンスターボールがガタガタと暴れ出した。突然の出来事に驚いていると、メロンパンが勝手に外に飛び出す。

私は冷静にメロンパンの出てきたモンスターボールを手に取ると、メロンパンに言い放った。

「メロ、何か言いたいことがあるようだね？」

「……カメ」

メロンパンはゼニガメを抱きかかえると、私の前にずい、と差し出した。その目は真剣そのもので、何処か困惑しているような、怒っているような、悲しんでいるような、そんな感情の入り混じった目だった。

私はため息をついてメロンパンに言った。

「メロ、ボールから聞いてたと思うけど、私は弱いポケモンを連れていく気はないよ」

「……」

メロンパンが目を見開いて、硬直した。何か、今まで信じてきた物に裏切られたような、もしくはそれ自体が間違っていたような、絶望の覗く眼差しで、私を凝視する。

私は、じっとその目を見返した。そして、心の底からの言葉を伝えた。

「もう一度言おう。弱いポケモンに、意味なんてないよ」

亀裂が走った音がした。もう二度と直せないのではないかと思う程に、深い亀裂が走った音だ。その音が何なのか、私には分からない。

今の私には、もう分からない。

「カメ」

「……ゼニ」

メロンパンが、ゼニガメを抱えたまま私に背を向けた。巨体を揺らして、少しずつ私から遠ざかっていく。私の下を去ろうとしているのだ。私は止めなかった。止める気が起きなかったのだ。それは単純明快な理由で、それ以外の理由も浮かばないほどだった。私は弱いポケモンに意味を見い出せない。

けれどそれ以上に、既に従う気がないポケモンを持つ趣味も無いからだった。

メロンパンとゼニガメの後ろ姿が小さくなり、ついには街の外の木々の向こうに消えてしまった。十年以上付き合った相棒との別れだった。私も踵を返して、宿屋へと向かう道すがらの空を見上げてため息をついた。

黒い積雲が、綺麗な夕暮れを侵食し始めていた。

メロンパン達と別れた後、宿屋に向かって歩いていると見覚えのある後ろ姿が眼に映った。黒に近い青色の頭は、少しだけふらつきながら歩いている。手を振って声を掛けようかと思ったが、私は片手を上げたポーズで止まった。

「……」

私は無言で手を下ろし、カスムから視線を外す。気分はかつてな

いほどすつきりしていたが、どうにも変な感じがする。大きな空白を抱えているような、わけのわからない空虚感。今のこの状況で、勘の鋭いカスムに会うのは、得策ではないように思えた。

「はあ……」

別の道を通ろう。そう思い、横道に逸れて、もう一本向こう側の道に出る。そのまま別の道を通って宿屋へと辿りついたが、宿屋の廊下を曲がったところで誰かとぶつかった。

「あつとと……と。すいませ……って、なんやユズルかいな」
「……！」

聞き覚えのある声がして私は驚きに心臓が止まるかと思った。カスムは倒れかけた私の身体を抱きとめると、気の抜けた声を出した。私は今日とことんついていないらしい。まさか同じ宿屋だとは思わなかった。

「……」
「……どうしたの？」

私を立たせたあと、カスムはじつと私の顔を見詰めてきた。目を逸らすなんてやましい所があると公言しているようなものなので、私も同じように見つめ返す。

カスムの目の下には、くつきりとした隈ができていた。髪もどことなくぼさつとした感じになっており、口角は下がり、表情は硬い。全体的に疲れ切った雰囲気が出ており、一見ただけで何かあったと分かる様子だった。

カスムは見詰めた後、私の両肩にがっしりと手を置いた。

「あんさん、なんかあったやろ」

「……」

この男はどの口でそんな事をほざいているのだろうか。それはこ
っちのセリフだ。

「カスムこそ、何かあったでしょ」

「……俺の事はええんや。今はあんさんの事話しとるんやろ」

カスムは自分の事を棚に上げて、私の腕を掴んで歩きだした。急
なことだったが、無理やり立ち止まって抗議した。

「ちよ、ちよっと、どこ行くつもりなの」

「俺の部屋や。あんさん、真面目に雰囲気がおかしいで」

「はあ！？ はな……し……っ放して！」

私は全力でカスムの手を振り払った。カスムが驚いた顔で私を振
りかえり、私はじりじりと後ずさりながらカスムを睨んだ。

「……私には私の、カスムにはカスムの旅がある。人の旅に首突っ
込まないでよ！」

「……！」

カスムはそのまま黙りこんだ。クチバシテイで自分が言った言葉
そのままを返されて、何も言えなくなったのだろう。

そう思っただけはほっとしていたのだが、突如カスムがもう一度私の
腕を掴んだ。

「へ……っ！？」

「……」

さつきよりも段違いの強さの握り方に、私は眉を顰めながら踏み止まろうとして、失敗した。ずるずると引き摺られて、止めるどころの話じゃない。無理だ。

「放して。放してよカスム！」

「嫌や」

悲鳴のように叫ぶが、カスムはぎりぎり腕を締めつけるだけで放そうとしない。カスムはカスムの部屋らしき扉を乱暴に開けると、後ろ手に鍵を掛けた。

「放……っ」

二の句は継げなかった。カスムがぐいと腕を引つ張ったかと思うと、壁に身体ごと張りつけられて身動きが取れなくなる。私よりも背の高いカスムが、自分の身体を壁にして、私を自分の身体と壁の間に閉じ込めた。鬼気迫る顔で私と目を合わせると、聞いたことがないほど低い声で言った。

「なあ。俺は今ちょっと精神的に色々きとってな。いつもみたいに優しく聞くことはできひんのよ」

「……っ」

誰だ、これは。

私の知っているカスムではない。カスムがこんな乱暴なことをした記憶など、全くない。いつも飄々としていて、余裕たっぷりです。大人で。

「……あんさん今、自分の知つとる俺とちゃう思たやろ」

「……！」

ひゅっと、短く息を呑んだのが聞こえた。

「俺かて、いつもいつも余裕かましとれへんよ。あんさんさつき、自分の旅に首突っ込むな言つたやろ。昔俺が言つたセリフやな。それを訂正するつもりはない」

カスムは私を真つ直ぐに睨み据えた。いや、正確には、“あたし”を睨んだのだろう。

「けどなあ、大切な大切な幼馴染の危機を黙つて見過ごすのは、なんやちやうと思わへんか？」

カスムの吐息が顔にかかる。近すぎる位置でカスムの高い体温が、じわじわと私に伝わって来た。カスムが潤んだ瞳で問いかける。

「なあ　中におけるあんさんは、一体誰なんや？」

その言葉を最後に、カスムはずりりと倒れ込んだ。

To be continue……？

第二十三話 シオントウン・前編（後書き）

HAHAHAHAHA!

闇堕ち？YES 闇堕ち！

ユズルちゃんはちゃんと戻ってこれるかな？闇堕ち自体プロット段階では存在しない展開だったので、私にもわからないんだよ！訳が分からないんだよ！

第二十四話 シオンタウン・中編

「…………カスム？」

正体を探ろうとする言葉を最後に、カスムは倒れ込んできた。もたれかかるかのように倒れ込んだカスムを抱きとめると、ずっしりと重い。年代代ではあるが、背丈も性別も違うユズルがその身体を支えるには無理がある。すぐにガクンと膝を折らざるを得なくなり、カスムと一緒にずると床に座り込む。何とかカスムを抱き直して、あたしはその額に触れた。呼吸は浅く、顔色が悪い。額は明らかに熱を持っており、玉のような汗が浮かんでいた。次いであたしはその頬を軽く叩いてみる。

「……………う……………」

カスムは少し眉を寄せて呻いただけで、それ以上動く様子はない。反応は鈍く、ぐったりとした様子から、回復まではしばらく時間がかかりそうだと判断する。あたしはほっと息をついた。

「鋭い男ね…………。不安定な今、心を揺さぶって貰っちゃあたしが困るのよ」

あたしは既にユズルと交代している。ユズルはあたしの存在をまだ感覚的にしか理解していないため、カスムに指摘されて大きく動揺したのだ。それで不味いと思ったあたしが、ユズルと強制的に交代したという訳だ。

鋭い目でカスムを見ると、ゆっくりと床に下ろす。何が原因かは

分からないが体調が悪いようで、カタカタと小刻みに震えている身体は、顔の熱に対比して、汗でじっとりと濡れて冷やりとしていた。見た限り体調は最悪だ。動けたのは奇跡に等しいのではないだろうか。

しかし、奇跡も此処までだろう。もう起き上がる体力はなく、気絶しているようだし。あたしは当然放置の一択。悪化でもして息絶えてくれようものなら、二度と追いかけてくることも無く万々歳だ。あたしはその場を去ろうと立ちあがった。

「……ハア」

立とうとして、服の裾を何かに引っ張られる。めんどくさそうに視線を向けると、案の定。カスムが服の裾をしっかりと握りしめていた。気絶しているくせに、此処だけはしっかりしているとは。あたしはその手を振りほどこうと、手首を掴んだ。

「あ……テイ……ガが……」

カスムが何事かを呟いて、あたしはぴたりと動きを止める。こいつ、なんて言った？ 今の言語は明らかに、あたしの知る限り人間には不可能な発音だった。

「これは……」

あたしは思わず、カスムを凝視した。人間には不可能だが、可能になる可能性も存在する。それに心当たりがあったあたしは、予想の検証を行った。床に寝たカスムの服の前ボタンを少し外し、抱え直して耳を当てる。

心音を慎重に、無言で一分程聞き続ける。その結果に、あたしはニヤリと笑った。

「やっぱりね……貴方……いえ、止めておくわ」

結果は、あたしの予想通り。そつと服の前を直し、もう一度床に横たえる。この事実をあたしが言ってしまう事は簡単だが、彼女にあまり刺激を与えたくはない。あたしがここで口に出してしまえば、身体を共有しているユズルに聞こえてしまつかもしれない。油断は禁物だ。

「さて」

あたしは掴まれた状態で器用に上着を脱ぎ、その場に置いて今度こそ立ちあがる。幾つか持っていた疑問の一つが解消されてスッキリ。といったところか。

カスムという少年がユズルに好意を抱いていると言う事は、あたしにも何となく分かっていた。でもある程度距離を置いている理由は、どうしてもわからなかった。けれどカスムがそうなのだとしたら……。距離をとるのも、領ける話だ。

あたしは床に寝ている少年に呟く。

「恋しい恋しい……けれど真実を知られる事は恐ろしい。だったら今のままでいい」

この少年が生きている時代が、もう少し昔だったならば、もっと人間とポケモンが近かった時代ならば。こんなにも悩む事はなかったでしょうに。

キリ、カスム、ユズル。あたしはこの三人の中で一番強いのはこの少年だと思っていた。この少年は賢く、強い。でもこんな秘密を抱えて、ユズルに距離を取ったままでは、ユズルの心を取り戻すどころか、近づくことすら叶わないだろう。

「まだ来てもない未来に怯えて停滞する貴方に、大切なものなんて掴めそうもない」

新しい未来に一步を踏み出す勇気を、彼は持っていない。そんな事では、どんどん取り残されていく。自分が変わるまいと思ったところで、周囲は容赦なく変化していくのだ。

あたしは部屋を出ていこうと扉を開ける。少しだけカスムが気になるって、最後に一度だけ振りかえった。無意識のうちに言葉がほろりと零れ落ちる。

「さよなら」

部屋の扉を閉めたとたん、空白がまた少し増えた気がした。

「はい、手続きは既に済んでおりますので、遺体をお渡し頂けるだけで結構です」

目の前の女性は優しく笑う。ポケモンタワーの管理人は、丁寧に遺体を受け取ると「わざわざありがとうございます」とお礼を言った。あたしがこの依頼を受けた訳ではないのだが、それを言うと話がややこしくなるので言わない。無言でお辞儀をして返すだけだ。用は済んだので、さっさとこの町を去るために出口へと向かう。万が一、カスムに捕まったらめんどくさい。

ぐらりと、世界が揺れた。

その瞬間、喉元に熱い物が込み上げてきて、両手で口を覆う。

「ふ……つく……」

頭が、痛い。気持ちが悪い。

「は……っ」

ふらつきながら、近くの壁にもたれるとずるずると座り込んだ。きつと、“彼女”がまだ情緒不安定なせいで、その影響が表に出ている“あたし”にも及んでいるのだろう。いくら彼女が強さを望んだからといって、もっとも彼女と繋がり深かったポケモンと、友人の一人を同時に失うのは、精神的にダメージが大きかったらしい。

「大丈夫ですか！？」 向こうに休憩室があります。横になってきては如何です」

さつき遺体を受け取った受付が、心配げに声を掛けてきた。あたしは口元を押さえながら無言で頷くと、誘導に沿って移動する。休憩室には長ソファが二つに一人用ソファが四つ。長ソファに横たわって、あたしは深呼吸をした。

これはだいぶキツイ。“本人”に会ってくるしかなさそうだ。

すつと目を閉じて、心の中に沈んでいく。暗い暗い闇の中に沈んでいく。やがて、闇だと言うのにくっきりとした姿となって、彼女が見えてきた。

いや、「彼女」ではなく、「彼女達」と言うべきか。

一人は、殴んだ瞳でもう一人の彼女の首を絞め、何がしかをぶつぶつ呟いている。

片方は、もう一人の彼女よりも幼く、目を真っ赤にして泣きながら苦しんでいる。

どちらもユズルであってユズルではない。人の精神に干渉する事はとても難しく、また人の心は複雑怪奇だ。そこにあたしという存在が無理やり割り込んだために、精神が分裂してしまったのだろう。首を絞めている方の彼女に歩み寄ると、その手にそつとあたしの手を重ねた。彼女は思いつきり絞めている訳ではなく、躊躇いながら絞めている。そうでなければ絞められている方はとくに昇天している。彼女の手を掴んで外してあげると、彼女はあたしを見てほそりと呟いた。

「弱くなっちゃうの……この子を消さない……消さ、ない、と。早く、消さ……」

うつろに繰り返す彼女は、縋りつくようにあたしにしがみついてきた。顔に出ている感情はハッキリとせず、どんな顔を取って良いかわからない、という表現が一番しっくりくる感じがする。私は彼女と目線を合わせると、優しく微笑んで頬を撫でた。

「焦る事はないわ。得るものが大きいほど、失うものは大きい。けれど、失うものが大きいほど、捨てる事に躊躇いを覚えるものよ。少しずつ、少しずつでいいの。ゆっくりと、強くなっていきましょうっ?。」

「……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

「大丈夫よ、落ち着いて。今はもう少し眠っていると良いわ」

「あ……」

彼女の目に手を当てると、彼女はすぐに意識を失い倒れた。後ろに倒れ込んだ身体は、ずぶずぶと、更に深い闇の中へと落ちていく。これで彼女の方はしばらく表に出てくる事はないだろうし、しばらく沈んでいれば時期に悲しみも忘れ、落ち着いて来るはずだ。

「さて……」

彼女を眠らせたあたしは、幼い方の彼女に目を向ける。解放された幼い彼女は乱れた髪にずるずるの大きい服を引きずって、必死にあたしから逃げようとしていた。すたすたと大股に近づいて、その服の裾を掴む。幼い彼女はべたんと倒れ、あたしを睨みつけて叫んだ。

「放して！」

「嫌よ。貴女、まだ生きてたのね」

あたしは感嘆気味に彼女に話しかける。この幼い彼女は、ユズルに残された最後の砦。あたしに抗おうとする、意思そのものだ。メロンパンが去った今、この意思も消えたものだと思っていたのだが……なかなかしづとい。

「……ッ！ 私は、貴女に負けたりなんてしない！！」

「痛ッ！」

鋭い平手打ちが、あたしの右頬を打った。幼い彼女はあたしの手が緩んだ隙に、沈んでいった彼女を追いかけて深い闇の中へと姿を消していく。叩かれた頬を撫でてあたしは彼女の消えていった闇を見詰めた。

もつともつと抗って、その果てにあたしと同じ場所に立てばいい。どんなに抗おうとも、彼女はあたしと同じ道を辿ることだろう。メロンパンがいないのだ。彼女はこの道を進まざるを得ない。あたしは一見単純に見えて、複雑に歪んでいるユズルの心を考える。

彼女がメロンパンと呼んでいた存在 あの存在は、ユズルの精神を奪おうとしているあたしにとって、唯一にして最大の邪魔者だった。

勿論、ユズルの心を揺さぶる存在は他にもいる。二人の幼馴染の少年達。ポケモン図鑑を持った少年少女。目標の人物であるレッド。そして、あの男。しかし、しかしだ。もつともユズルの心に近い場所にいるのは、メロンパンをおいて他にはいないだろう。

一見すると、メロンパンがユズルに依存しているように見える。全くバトルの役に立つ事も無く、ひきこもりで滅多に出てこないメロンパン。そんな存在に、初めてのポケモンだと言うだけで此処までの執着を見せる人間が本当にいるのだろうか？ 不利を承知で危険な旅に一緒に出て、戦えないというのにわざわざバトルに引っぱり出し、自ら去ろうとした時はこれまでにないほどに焦り、嘆き、必死で探し求めた。

その様子は正に、親を探し求める迷い子のようではないか。

絶望していたのは、メロンパンじゃない。どんなことがあっても傍にいてくれる誰かを探していたのは、彼女の方だ。表の感情はどうであれ、ユズルにとって真に友人と言えた相手は、幼馴染の少年達ではない。メロンパンだ。少年達は、心の距離が遠すぎる。

一人は、感情の裏返しから好意を素直に伝える事など決してなく。

一人は、秘密を知られることへの恐怖から、心に踏みこむことなど決してなく。

対等と言える関係を築けたかも知れない二人は、無意識のうちにその可能性を捨て去った。友情が愛情に変化したその瞬間から。そのことがユズルは寂しかったのだ。悲しかったのだ。昨日まで傍にいた友人たちが、少しだけ距離を取るようになる。その結果、ユズルは父の手伝いという名目で研究所へ逃げ、そして

メロンパンと出会った。

メロンパンはひきこもりだ。ユズルが害さえ加えなければ、ずっと傍にいてくれる。最初に感情のままぶつかった時も、ゆっくりとだが歩み寄ってきてくれた。幼馴染達は、愛情は寄せたが友情は寄せなかった。友情と愛情は同居できない。それでは駄目だった。彼女が欲しかったものは、なによりも友情だったのだから。

何でも話せて、共に笑い、共に泣き、垣根など何も無い、何が起こっても関係の変わることに無い友人関係。安定した、真っ直ぐに伝わってくる、好意。

メロンパンは、ひきこもり。トレーナーであるユズル以外に愛情を注いでくれる相手などいるはずもない。いてはいけない。ユズルが愛情を注げば注ぐほど、メロンパンはユズルを信頼し、ユズルの前にだけ姿を現し、好意を返してくれる。自分の事をどう思っているのかはつきりしない幼馴染達などよりも、よっぽど分かりやすく好意を示してくれた。

非常に分かりにくい、本当はユズルの愛情は歪んでいたのだ。

その事に薄々気がついていたのは、固執されていたメロンパンただ一匹。だからこそ、その不安定な心を何とか出来たのも、彼一匹だった。だってメロンパンは、ユズルの寂しさに気がついていたの

だから。

必死に強くなるうともかく彼女を追いかけて、深みに沈んでいった幼い彼女。強そうに見えて、酷く脆く、小さく抗う最後の愛情。メロンパンが離れて言ったのにまだ生きてると言う事は、それだけメロンパンを強く想っていたという事なのだろう。

その想いが友情よりなのか愛情よりなのかは知らないが、今の時点では少年達には勝ち目がなさそうな程に深い思いだ。彼等も哀れなことだ。

まあ、あたしにはどうだっていい話である。

「待ってるわ。あたしの生まれ変わりさん？」

あたしはすつと目を閉じると、表へと再び舞い戻る。気分が悪さはもうない。目を開ければ、さっきまでいたポケモンタワーの休憩室の天井が見えた。立ちあがって身体を少し動かす。立ちあがって伸びをしたあたしの目の前を、何かが横切っていった。

「火の玉……」

小さな火球が、ふよふよとあたしを周囲を回り、そして目の前で止まる。その懐かしさに少し笑い、あたしは火球に指を寄せた。火球はみるみる間に燃え広がり、狐の形を取った後にかき消えてしまった。

「あの子らしい招待状だわ」

あたしはポケモンタワーの中に入っていく。ユズルは自分で名前をつけていたようだが、スピア、サイドン、カイリユーは元々あたしのポケモン達だ。そしてこの先で待っているであろう、彼女も

あたしのポケモン。

ポケモンタワーの奥から、主の帰還に対する歓喜の鳴き声が聞こえる気がした。

「……………ッ……………」

とある宿の一室で、少年が呻き声を上げた。ゆるゆると瞼を上げると、虚ろな瞳で天井を見る。ぐっと力を入れて目を閉じ、もう一度瞼を上げた。

「あれは……………ユズルやない」

少年　カスムは、ぼそりと呟いた。その声は泣きそうで、同時に怒りに満ち溢れている。

ユズルの身体を乗っ取っているらしい彼女は、カスムが意識を失っていると思っていた。しかし、カスムはぼんやりとだが、あの時まだ意識を保っていた。保っていたが、動けなかったただけの話である。

身体が、重い。カスムは自分の体調の悪さに反省した。此処最近、各地で起きているポケモンの事件を追っていたのだが、連日碌に睡眠も食事もとっていないかった。そのせいで、大切な今この時動けなくなっているのだから、なんと情けない話か。

「ユズルはあんな言葉が言えるほど、頭は良くない」

本人が元気だったら、むくれつつ文句を言いそうなセリフである。

カスムはユズルの姿をした“何か”の言葉を反芻する。

『恋しい恋しい……けれど真実を知られる事は恐ろしい。だったら今のままでいい』

カスムは右腕を顔の上に乗せ、唇を噛み締める。絞り出すような小さな声で、もう此処にはいない相手に反論する。

「なんやねん……なんやねんあの女……。あんさんに何が分かるって言っんや……」

変化を恐れて何が悪い、とカスムは思った。その先の関係を望むよりも、大切な人間の気持ちに離れていってしまうことの方がよっぽど恐ろしい。

悪く思われたくない。

良いところだけを見せたい。

相手が自分をどう思っているのか、不安で不安で仕方がない。

そう思う事は、普通の事じゃないか。本当は、自分の良い所も、悪い所も受け入れて欲しい。けれど受け入れられないのなら、せめて知らないままでいて。そうしたら傷つかずに済む。そのまま変わらず傍にいられる。

『まだ来てもいない未来に怯えて停滞する貴方に、大切なものなんて掴めそうもないわね』

「……停滞、か」

カスムの目に、光が宿る。

ごろりと仰向けからうつぶせの状態になると、がくがくする腕に力を込めて身体を起こそうとする。ゆらゆらして見える地上。まだ体調は最悪そのものだった。それでも、ゆっくり、ゆっくりと身体を起こしていき、壁に縋りながら立ちあがる。よろよろと歩きだしたカスムは、緩慢な動作で宿の出入口まで向かった。

一歩一歩、出入り口に近づく。辿りついたその時、カスムは腰のモンスターボールを取りだし、放った。

「グオオッ！」

中から飛び出したのは、ウインディ。ウインディはふらつく主を心配そうに見るが、カスムは無理やりに微笑んで言った。

「ウインディ、ちょっと付きおってくれるか？」

「……オオッ！」

多少の躊躇いは見せたものの、ウインディは了承した。カスムが背中に乗りやすいようにしゃがむ。その背中によじ登って、ウインディの耳元に囁いた。

「ユズルの匂いを追ってや。前に会ったことあるやる？」

ウインディは無言で頷くと、道の匂いを嗅ぎ始める。時間が多少かかりそうだと考えたカスムは、着くまでに僅かでも体調を回復させようと、そつとその背中に身体を預ける。

「悪いんやけど……見つかったら、起こしてな」

ウインディは分かっているとばかりに一吼えすると、また嗅ぎまわる。やがて匂いを見付けたらしく、じりじりと後を追いつつ始めた。カスムはその背中ですっと瞼を閉じる。目を閉じた闇の中で、ユズルの後ろ姿が浮かんだ。

自分は、ずっと逃げていた。ユズルはいつでも真正面からぶつかってきていて、それはキリも同じだった。キリは知っている。カスムが何かを隠していて、そのせいでキリからもユズルからも何処か距離を取っている事、ユズルに好意を抱いているくせに、それに気がつかない振りをしている事。

キリは自分の事を「大嫌い」と叫ぶ。でもあのツンデレの言葉は、額面通りに受け取ってはいけない。カスムは分かっている。キリは本当はユズルも自分の事も大好きだ。大好きだから、友人だと言うのに勝手に悩んで、勝手に壁を作っているカスムが気に食わない。キリは自分は素直じゃない癖に、他人がまだるっこしい事は嫌いなのだ。

真実を告げる事は、酷く恐ろしい。でもあの女の言った事は最もだ。本当は、今のままで良いと思いつつながら、心の何処かで焼けつくような感情を覚えていた。ユズルの感情がどう変化するのか怖くて、その感情を無視して、自分に嘘をついて。

『さよなら』

最後の言葉が脳裏に響く。あの女か、それともユズルか。あの時はあの女が主導権を握っていたけれど、あの時のあの言葉は間違いなくユズルからの言葉だと、別れの言葉だとカスムは確信する。「さよなら」なんて言わせない。必ず取り戻す。

“愛してる”なんて求めないから、せめて“大好き”のまま
いで下さい。

(愛されない事実は胸を締めつけるけれど、貴女を失えばきっと
絶望してしまう)

でも、この思いを伝えないうままに貴女を失うなんて、も
っと嫌なんだ。

T o b e c o n t i n u e d ?

第二十四話 シオントウン・中編（後書き）

恋愛系描写、ぶっちゃけると本当は苦手です。何と言うか……背中がかゆい感じがしませんか？書いていて、書いている自分が恥ずかしくなってくるというか、照れくさいというか。

でも今回に関しては、あんまりそういった感情もなく、するーっと素直にかけたので嬉しかったですね。“カスム”というキャラがしっかり立っていたので、その心の声を代弁している気分だったので、こっぴどくしなくなかった！よっしゃ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8344v/>

出てきてください

2012年1月13日00時46分発行